

# シャンヴリルの黒猫

jonah

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

それはまだ魔法があたりまえのように存在し、邪を統べる魔人が世界の頂点に君臨していた時代。

この世には、限りなく広がった一つの海に、一つの大きな大陸【アンチユール】と小さな島が浮かんでいた。

その大陸は五つの地に分かれ、其々を大国として国が成立していた

北の魔法王国 ナルマテリア王国。

南の魔獣使役都市 ローズダウン皇国。

東の兵器技術大国 バスカルグ同盟。

西の異民族衆 フェイ・ド・テルム帝国。

そして中央 天使が住まう宗教国家、またの名を神都 ルバリス教国。

小さな島は、最果ての地、魔の神の住まう島 レーゼと呼ばれた。

各国の力は均衡し、危うげながらも平和な日々を送っていた。

ひとつの国が滅びたことが、全ての始まり。

これは、亡国の王女とある青年の物語――

※ この物語は「小説家になろう」「pixiv」「暁」サイト様でも掲載しております。

※ Chapter1「邂逅」完結、Chapter2「武闘大会」凍結中（解凍予定）

※ 2014―15年にかけて作者浪人生（泣）により更新停止中

です(といいつつ、稀にふらっと投稿します)。

# 目次

## Chapter 1 邂逅

1話「虚無へ」	1
2話「蒼き森の神殿」	5
3話「煉瓦街ポルス」	13
4話「冒険者ギルドポルス支店」	19
5話「駆逐」	27
6話「襲撃」	35
7話「亡国の王女」	41
8話「安価な珍珠達」	51
9話「魔力過多症」	58
10話「けもの」	66
11話「グランドウルフ戦」	77
12話「貿易都市シシム」	90
13話「エルフ」	98
14話「スレイプニル（1）」	106
15話「スレイプニル（2）」	113
Chapter 2 武闘大会	
16話「胎動」	125
17話「とある旅の日常」	127
18話「クオリ・メルポメネ・テルプシコラ」	133
19話「闘争の街ファイザル」	146
20話「第一次予選」	157
21話「第二次予選」	167
22話「第一次本戦」	175

23 話 「第二次本戦」  
24 話 「ぬくもりの消える路」

203 189

## Chapter 1 邂逅

### 1話「虚無へ」

思えば俺は、20年前にこのひとに造られたんだった。なんて、ちよつと現実逃避してみる。

目の前には閻魔大王も真つ青になって逃げ出すだろう、本当の“神”がいる。人は、この方を『魔人』と呼ぶが、語源となった『魔神』の方が呼ぶにふさわしい。

まさしく、この方たちは神の領域にいる。

そして今、俺はこの方のお怒りを買ってしまった。怒りと言っても怠惰なこのひとだ、本気で怒るなんて面倒な事、していないだろうが。

全ての発端は、俺が違う魔人、ヴューⅡエⅡルバ様の遣い魔に喧嘩で負けたことにある。俺は魔人に造られた、人間を元にした遣い魔だ。それに比べて、あいつは遣い魔と使い魔の息子。所謂、サラブレッド。勝てるわけがないじゃないか。しかし、そんな事はこの方の前では些細な言い訳だ。

「アシユレイ。お前にはまだ伸び白がある。それに、奥の手も出さなかつた試合であるし、負けても致し方ないと言えなくもない。だから、私<sup>わ</sup>としてはお前を手放すのはそれなりに勿体ないと思うが、ここは他への体面と言う物がある」

俺の召喚主にして、主人、少女の姿を騙っている『享楽』の魔人、ノーアⅡナⅡヴユラ様は老人の様な口調で仰った。実際、この人は千もの時を生きているのだから、間違いではない。

「は」

彼女の前でひざまつき、首を垂れると、適当に切りっぱなしの黒髪が視界に入る。ノーア様に造られて20年。彼女がふと『夜の闇の色をもつ人間を見て見たい』と思われて、俺は造られた。その後、生まれてまだ1日も経たないうちから過酷な訓練を受け続け、15の時から正式に彼女の遣い魔として働いてきた。

だが、それも今日で終わる。抵抗しようとは思わなかつた。文字通

り血反吐を吐いた特訓を受け、使い魔の『刻印』を受けたところは彼女に対して恨み辛みもあつたが、7年もお傍にいと、何故かその気持ちも薄らいだ。

「お前を『狭間』へと強制送還する」

「……ッ。今まで……お仕えさせていただき、ありがとうございますごさいます」

「うむ」

何とも思っていないような顔で頷くと、俺に手を翳した。転送の古代魔法だ。

この方にとって俺達『遣い魔』は代えの利く道具。道具を磨いたりどちらが優れているかを競い合わせることはあつても、代えがきくなら古く劣るモノはすぐに捨てる。

普通捨てるというならば、他の魔人は使い魔を「消滅」させるだろう。存在自体を抹消させる力を、主である魔人は持っているのだ。

だが、『享楽の魔人』と言われるこの人の場合、その捨てられる場所は『狭間』と呼ばれる亜空間である。理由は『万が一、私の遣い魔を召喚できるだけの人間が現れたら面白いから』。

主人の他は、ヒトの中で限られた者が干渉することが出来る。ヒトの言葉で言うならば、『召喚獣達の故郷』とでもいおうか。外からの力がない限り、永遠に孤独と闘うはめになる。時間も空間も何も無い、虚無。

俺の先輩の殆どが彼の地へ送られ、嘘か本当かその中で自我が崩壊し、ヒト型から基の魔獣へと姿を戻したと言う。遣い魔の強靱な精神をも凌駕する孤独と拒絶の白。ただそれだけがある世界。

(だが、俺は違う)

通常、使い魔は魔人の手から作り出される代物ではない。大抵は強力な同胞——魔獣達の形を変えて人型にするのだそう。別に人間を使い魔にしてもいいが、幾ら優秀と言われる者であろうと、人間は弱い。それこそ、よほどの物好き——『享楽の魔人』でもないかぎり、人をモデルには造らない。

だが俺は生まれた。一から魔人の手に寄って造られた俺の基本は、

人間だ。違う要素ももちろん入っているが。根本から違う構造である人間は、狭間に呑み込まれない。だからこそ、そうして人は狭間から召喚獣と呼ばれる名の魔獣を安易に喚び出せ、従わせられるのだ。俺の名前は、アシュレイーナ・ヴユラ。桃色の髪を持つ少女の魔人、ノーアーナ・ヴユラの遣い魔。人間族の男、22歳。やがて俺を取り巻きだした赤い光に、諦めたように俺は目を閉じた。

\*\*\*\*\*

あれからどのくらいの時がたったのだろうか。1週間か、半年か、ひよっとしたら10年以上経ったのかもしれない。完全に時間の感覚は無くなったが、俺はまだちゃんと自我を保っている。狭間では腹も減らないし、髪も伸びない。全ての時が止まったかのように、ただ、白い空間が広がるだけ。

視界の中にはぼつぼつと他の同胞達はらからもいるようだが、奴らの眼は無気力で、こちらを見ているのかさえ怪しい視線だった。たまにふつと赤い光と共にやってくる新入りも、はじめのうちは近くにいる奴らを攻撃するが、そのうちそれも面倒になったと言わんばかりに放置を始める。因みに、無気力な奴らも、攻撃されれば仕返す程度の自我はあるらしい。

(俺はアシュレイーナ・ヴユラ。桃色の少女の魔人、ノーアーナ・ヴユラの遣い魔。男22歳……)

方は越えたであろう眩きは、全て白い空間に呑み込まれる。が、この眩きが、俺の自我を保っているのも確かだった。

ふと、何処からか風を感じる。ハツとして右を見た。同胞はらからがいる。ヒトが『魔の眷族』と呼ぶものたち。対して強くはない、ドラゴン型の種だ。第八世代といったところか。魔人の血が強い程『一』に近づくと魔獣の中で、8番目に強い……つまるところ、『魔の眷族』最弱に位置する黒つばいドラゴンが、白の空間を割った黒い切れ目に吸い込ま



れていた。直感で分かる。あの孔あなは、外界へ通じている。誰かがあのドラゴンを召喚したのだ。

何も考えていなかった。無我夢中で、その黒い孔あなに飛び込む。

安らぎの黒が、俺の身を包んだ――。

## 2話 「蒼き森の神殿」

私は今、より強い魔力の波動が自然に発生する数少ない地、『魔サクの力クの聖域チュアリ』にいる。周りを見れば、どれも樹齢1000年を超える大樹ばかりだ。それが人の手に触れずに育ち続けているから、まるで密林のように生い茂った森である。

私が目指しているのは、この森の奥にあるという2000年前の古代遺跡『ノルテアレ遺跡』。今では抽出されなくなった、蒼い大理石で造られた、別名『蒼の神殿』だ。

周りの木々から洩れ出る魔力を微量ながらも吸い、一週間この清流の水とここで採れる食べ物しか口にしていない今、私の体内に蓄えられている魔力もまた、随分と透き通った物となった。質が上がった、といえば伝わるだろうか。

「よい、しょ……と。ついた……」

一般的な女性に比べればあるだろうが、冒険者としては足りない部類に入り、その上一週間大した量を飲み食いしていない私の体力がそろそろ切れる、といったときに、ついに視界が開けた。

目に飛び込んでくるのは、まさしく『蒼い』石造りの神殿。

「綺麗……」

なんともなしに眩きながら、疲れも忘れて建物内部へと向かう。もともとはあったであろう天井は、もう影も形も無くなり、青空が見えるばかりである。辛うじて床と柱が残ったのみとなった神殿は、それですら幻想的な力を発していた。

「……」

私はここで、最強の召喚獣を呼ぶ。何のためにか？ それは内緒。

私はこう見えて、実は召喚魔法の使い手なのだ。ランクはB+。伝わるかどうかは不明だが、実はこれ、結構凄い。今扱えるのはまだ3体の召喚獣だけだけど、これから最強の魔獣を召喚してみせる。そのために、私はここへ来た。強い魔を従えて、私はまた各地を旅する。追手に捕まらないように。

ようやくそれに相応しい場所を見つけた。広場のような場所だ。

ここなら、契約の魔法陣も簡単に書けそうである。

邪魔な小石や石の破片をどかすと、私は鞆から白いチョークを取り出して、確かな手つきで陣を書き始める。中心に月と太陽。周りには嘘か真か魔人が使うとされる絵のような文字を書いた（私自身、この文字は読めないから、これが何を意味しているのかわからない）。それらを二重の円で囲み更にダイヤ型の四角でつつむ。その周りに今度は神官のみが読める古語を書きまた円で囲んだ。鞆から2輪の白いハフリの花を陣の中心に置く。上から聖水と、ナイフで切った私の血を一滴おとし、準備は終了。

陣の前に立ち、膝を折り祈るような体制で手を組む。一陣の風が吹き、私の長い銀色の髪が舞った。

「祈りの言葉」と言われる（陣に使ったのとは違う）古語を呟く。

手をきつく握りすぎたせいで、先の傷口からの血が掌を伝わり石の床に落ちた。

「うう……」

陣が淡く光った——と思った瞬間、ぐいんと私の中にあつた魔力が吸い込まれる。ここに至るまでに溜めてあつた殆どの魔力を吸われ、精神的な苦痛に思わず声が漏れた。

「きやつー」

突然、魔法陣を中心に、眩い光と突風が吹き荒れる。契約召喚の魔法陣を発動すると、その陣を中心として異界の風が吹くのは分かっているが、未だかつて、これ程までに強い風を見に浴びたことは無い。思わず祈りの姿勢を崩して、お尻をついてしまった。

やがて魔法陣からの光と風が止む。目を覆っていた腕を離すと、そこには風の名残で砂煙が上がっている。私の足元に、黒焦げになったハフリの花びらが落ちていた。手に取ろうと触れると一瞬で灰の砂となり、風に散っていく。ハフリの花がここまで酷いありさまになるのを見たことがない私は、召喚が失敗したのではと危惧し、未だに収まらない砂煙を凝視する。

ゆらりと人影があつた。どうやら召喚は成功した——と安心する

間もなく、私はギョツとして前をまた見た。

人影がある？ 私は今、ありつただけの魔力を陣に注ぎ込んだ。だから、私が扱える最強の魔獣が表われる筈。それが……人型!?

まさか、魔の眷族でも召喚したか、と焦り始める。

魔の眷族は、何れも普通の魔獣では到底及ばない力を持つ。それは、この世で最強と呼ばれる魔神——もとい、魔人の血を有しているからだ。だが、その血は薄れるごとに、獣を異形へと変えていく。つまり、より人型に近くなれば成程、奴らは強くなるのだ。

そして、完全に人と見分けがつかない者が、この世界のヒエラルキーの頂点にいる、魔人。

しかし、一番の下っ端として知られる魔の眷族『グリッグ』でも、単体Bランク評定を受けている。仮にそれが来たとしても、今魔力がほとんど残っていない私では叶わない。

(しまった……!!)

たまにいるのだ。あまりにも必死に祈りすぎて、自らの力量を越えたモンスターを召喚してしまう召喚魔道士が。まさか自分がそんな駆け出しの召喚魔道士のような事をすると思わなかった。

「ギシャアアアアアアッ!!!」

耳を劈くような叫びが、静かな魔の力サックチュアリの聖域に響く。収まり始めていた砂煙は、中心にいた獣——魔の眷族第八世代、黒き飛竜「ジルニトラ」の羽ばたきによって散った。中にいたのが人型ではなく飛竜だった事にも驚いたが、そんな事を呑気に考えている場合ではない。

一般的に言われる飛竜「ワイバーン」の上位種であるジルニトラは、単体Aランク評定。グリッグなど、束になってかかってもこの竜には勝てまい。

当然、今の私が勝てる確率など、皆無に等しかった。

「……あつ」

立って逃げなければと思ったが、あまりのショックと恐怖、目の前の竜が放つ圧倒的な存在感に、腰が抜けた。じりじりと後退しながら、どうかこの竜が自分の事を見つけないように居てほしいと祈るばかり——が、長い長い間『狭間』に閉じ込められ、出てきた途端にい

沸いて出るこの空腹感の前で、目の前に転がる柔らかそうな少女を食わずに素通りするほど飛竜は甘くはない。何度か羽ばたきを繰り返すと、黒光りする甲殻に覆われた頭をこちらに向けた。横についている赤い目が、ぎよろりとこちらにむけて焦点を合わせる。

ついにがたがたと震えだした足腰は、もう後退することすら無理にさせていた。

「ギシャアアアアアアッ!!!」

再び頭がくらくらしそう<sup>!</sup>な叫びを上げると、一気に少女の元まで滑空する!

「いやああああ!!!」

「ちイツ」

思わず絶叫した時、誰かの舌打ちが聞こえた気がした——その途端。青い広場に赤い血がまき散らされた。

少女の物ではない。彼女はまだ、肩で息をしながら、それを茫然と見ている。が、やがてぱたりとその上半身を蒼大理石の上に沈めた。

\*\*\*\*\*

さて、この状況をどうしようか。俺は目の前で気を失った少女を抱えて、困っていた。

狭間にできた孔<sup>あな</sup>から飛び出た俺は、砂煙の向こう側に目の前で祈りを捧げている銀髪の少女を見つけた。慌ててその場から飛退き、取りあえず柱の影に隠れて状況を見守った。果たしてこの少女に飛竜は倒せるのか、無い筈の人の心が俺に『心配』という気持ち呼び起こした。

そつと見やれば、やはり少女にあの飛竜は荷が重過ぎたらしい。じりじりと後退してはいるものの、彼女から飛竜を『倒そう』という意志は見られなかった。そうこうしているうちに、飛竜が【威圧】の効

果を含んだ叫びを上げる。とうとう後退すらできなくなった少女が、絶叫した。

「ちィッ」

舌打ちをして腰から愛剣を抜くと、少女に向かって滑空する飛竜を、文字通り一刀両断する。鉄よりも硬い甲殻も、まるでバターのように滑らかに斬れた。

ビシャアツと嫌な音を立てて血が辺りに飛び散る。一瞬で跳びのき、帰り血は浴びない。ドラゴン属の血は総じて酷く臭う。見た目がどれ程美しいとしてもだ。人間の血が、一番マトモだと、俺は常々思っている。魔人の血は、知らない。彼らは強すぎて血を流さないし、そもそも本当に血は通っているのが不明だ。冗談ではなく。

そういうことに疎い俺から見ても美しいと思うこの少女に飛竜の血のにおいが付かないよう、取りあえず彼女の荷物ごと抱え上げた。神殿の奥に見つけた泉の傍まで来て、今に至る。このまま立ち去ってもいいが、見たところ彼女に残っている魔力では、この森を抜けた後がきつそうだ。魔道士にとって魔力が枯渇することは命にかかわると、どこかで聞いた。

なぜだろう。この時俺は、どうしてかこの少女を無視する事ができなかった。

青大理石の上に横たえてから、泉の水を汲んでくる。長年放置されていたにもかかわらず、天然の物だったからか、泉は枯渇することなく、呑める状態の水がこんこんと湧き出ていた。

近場の葉をうまく丸め、中に水を入れた。今は色を失っているが、本来は紅を差したように赤いのであろう唇に、水を流し込む。こくんと小さな音を立てて、呑んでくれた。ほっと息をつくとき、俺は立ち上がる。

少女の瞼が開いた。青空よりも蒼い——そう、蒼い海の様な瞳だ。年のころは俺より少し下……17か、18あたりか。銀糸の髪に深海

の瞳。色は白く、頬は普段は蔷薇色、唇も紅。眼鼻立ちも整っている。この世で最も見目美しい種族と言われるエルフに匹敵する美しさだと思った。

魔人に仕えていたこともあって、思わず敬語が出る。

「眼が覚めました?」

「え……へ、あつ! ジ、ジルニトラはっ!!」

「じる……? ああ、あいつならもういません。ここは神殿の奥。あの泉の水は呑めるから、呑んできたらどう?」

さっきの飛竜の事らしい。ただ簡潔にそう言くと、少女は喉が渴いたのか、こちらを少々警戒しながらも泉の淵へ行き、手ですくってそれを美味そうに呑んでいる。

どうやら死への恐怖やショックなどは杞憂に終わったようだが、さて、これからどうしよう。

まずはこの少女にここがどこなのか聞かなければいけないし、だが、それを聞くには色々と問題がある。

自分の身体を見下ろすと、狭間に閉じ込められた時と何ら変わりはない。ただ、腹が猛烈に減っているだけ。さっき水を数口呑んだのが、空きつ腹に堪えた。竜の一件で空腹感を一時的に忘れられていたものの、水が胃に刺激を与えたらしい。

ならば、その上少女に何か食べ物を貰わねばならない。だが、正体も不明な男に、果たしてはいどうぞと携帯食を渡してくれるだろうか。……普通なら、不審がつて真っ先に逃げるか攻撃してくるだろう。むむ……。

早くも首をもたげてきた問題を、少女の後ろ姿を眺めながら考える。やがて存分に呑み終わって帰ってきた少女は、言いにくそうに、あの、と口を開いた。まだ考えていた俺は、ハッとして彼女の方へ向く。少女は、羽織った魔道士の好む白いローブの土くれをぱんぱんとはたくと、言った。

「助けてくれたみたいで、ありがとう」

「ああ……いや、咄嗟に君を抱えて逃げてきただけだから」

「それでも」

相手は人間だ。あの飛竜が彼らの中でどれ程の強さを有しているのかは知らないが、無難にここは場を凌ぐ方を選んだ。どうやら意識を失う数秒前に見たジルニトラの最期の一件は忘れていたらしい。よかったよかった。

「不躱だけど……何故この神殿にいるの？　ここは一般人立ち入り禁止区域なんだけど……」

「え、そうなの？」

まさかそんな展開になるとも知らず、つい本音が出た。どうしよう、と考えた結果、一番怪しいが一番無難な方向に話を持って行った。嘘をつくのは少々心苦しいが、しかたあるまい。誰が自分は捨てられた遣い魔ですと言うだろうか。ここまできたら、もう人間の振りをするしかない。

「実はどうも俺記憶が何処か曖昧で……。ふらふらと当てもなく彷徨ってるうちにこの森に入っちゃったんだ」

「記憶喪失？」

全くその通りだと言うように頷く。少女は親切にも説明を始めてくれた。この子は人を疑ったりしないのだろうか。言動からしても、雰囲気からしても、どこかの貴族の令嬢、だったりするのかな。

「ここは青の森と言うの。通称：魔サンクチュアリの力の聖域。樹齢数千年を迎えた木々が、その身の内に精霊を宿して、自ら魔力を発していると考えられているわ。世界に4箇所しかなくて、全部その森を保有している国が立ち入り禁止にしている筈なの」

「へえ……。で、君はどうしてここにいるんだ？　許可を得た者なのか？」

得意げに説明していたのに、その問いを投げかけると途端に、目を右往左往させてまごついてる。……どうやら嘘がつけない性質らしい。

「君も不法侵入者、か」

「わ、私は強い召喚獣を得ようとして、魔力の満ちたこの森に来たのよ」

「ああ、それが行き過ぎて、さっきの飛竜ね」



それにしゅんと俯く。それが久しく見ていない、生まれたばかりの魔獣の仔を連想させて、思わず頭をぽんぽんと叩いた。

「ま、無事に逃げられたんだし、いいんじゃないですか?」

「そ、そうよね」

うんうん、とやや無理やりな気もするが頷いている少女を見て、俺は本題を投げかける。というか、そろそろ耐えられなくなってきたこの腹をどうにかするしかない。多分今俺は餓死寸前だ。いや、冗談抜きで。

「で、ちよつと、悪いんだけど……」

それを意識し始めるともう駄目だ。ずるずると崩れ落ちるようになってしやがみ込みながら、だんだん小さくなる声で言った。少女の顔がきよとんとする。どうも思った事をすぐ顔に出す性分らしい。

「ちよつと……何か…飯…くれないかな……?」

「は?」

### 3話 「煉瓦街ポルス」

今、俺はユリイことユーゼリア……つまるところ、先程の少女と共に、魔サククチュアリの力の聖域を抜けた先にあると言う最寄りの街へ向かっている。どうやらこの森には野獣も魔獣も、勿論同胞はらから——失礼、魔の眷族もいないらしい。

あれから。

『ちよつと……何か…飯…くれないかな……？』

『は？』

『いや、だから……』

『あ、ど、どうぞ。携帯食だけど…』

『どもですっ』

腹の赴くままに食いまくり、ハツと気が付けば彼女の持っていた干し肉も携帯食も全て俺の腹の中に収まっていたという事実。勿論彼女には土下座で謝った。食料が全て消えてなくなったと言うのに（実は結構な量あったのだ）、命を助けてくれたお礼と笑いながら言ってくれた。

だがそれでは俺の気が収まらない。もともと勝手に彼女を助けたのは俺の方なのだから。

いいのです、いや駄目だ、本当にいいから、いやならん。

幾らかの押し問答をした挙句、2人で出した結論は、取りあえず最寄りの街に寄り、そこにある冒険者ギルドで簡単な任務を行った後、報酬をユリイと俺で半分ずつに分けると言う話だった。それならば一文無しの俺にも多少の金が入るし、同時に彼女に恩も返せる。

『じゃ、行きましようか』

『ありがとう、ええと……』

『ユーゼリアよ。ユーゼリアⅡシャンヴリル』

『ユーゼリア…ユーゼリア……うん。ユリイって呼ばせて。俺はアシレイⅡナⅡ……アシレイⅡナヴユラだ。アツシユとでも呼んでくれ』

『？ じゃ、短い間でしようけど、よろしくね、アツシユ』

『ああ、よろしく』

いや、あの時は危なかった。思わず遣い魔としての名前を出しかけた。咄嗟に繋げたが、ばれてはいないようで安心だ。果たしてノーアⅡナⅡヴユラという魔人が何処まで人間に対して有名かは知らないが、用心しておいた方が良いだろう。

「でも、まさか今が何年かも忘れてるとは思わなかったわ。その上更に『冒険者ギルドって何』だもん」

「いやあ、面目ない」

頭をかきかき乾いた笑いを浮かべる。なけなしの良心がちくりと痛んだ。何せ、今、一体あれから何年狭間に取り残されていたのかを知る術は（荒療治ではあるが）これしかないのだ。だが、聞いてみて驚いた。彼女の言によると、今は公暦394年。因みに俺が飛ばされたのは、教歴2776年。暦の名前まで変わっているとは。

教歴は3411年で終わり、その理由は魔獣の大量発生及びそれらの襲撃が世界各地で起こり世界が文字通り半壊したかららしい。人が成す術もなくやられっぱなしだったのに、魔物たちは1年ほど経つと、森や谷、山など、もともとの住処へと引つ込み、それつきりこちらに干渉することは無くなったと言う。勿論、ある程度は人を襲いをするが。そして、そこから始まったのが、公暦という暦。

まさか自分が1000年も狭間にいたとは、夢にも思わなかった。

それから、公暦になってから新しく造られたのが、冒険者ギルドという制度。つまりは、腕の立つ傭兵もとい冒険者たちをギルドに登録させて、一か所に集めた依頼やらなにやらを討伐させに行くという制度。因みに、討伐する対象の定められたランクが高ければ高いほど報酬が増える。分かりやすい制度だ。大量発生した魔獣を駆除するのが目的で造られた組織らしい。本部は中央位置する宗教国家ルバリスにあり、支部は大陸中に散らばっており、大きな町ならば大抵あるという。

話がそれるが、なんと神国ルバリスには正真正銘の天使がいるそうだ。1000年前は、下界になど興味を持たなかったので（他の遣い魔達もそうだったし）、人間事情など全く知らないが、なんとなく我々

とは対極にいるような存在だと思われた。

さて話を戻そう。力を持たない者たちは、ギルドに討伐依頼とその場所、またギルドが提示してきた報酬を払う事で、あとは放っておくだけで何処かの強い戦士がそのモンスターを倒してくれる。世の中金が物を言うというのは、1000年前の人間達と大して変わらないうい。因みに、今の通貨はリールと言うらしい。価値の把握としては、普通サイズの林檎が1つ10リール程度だと。

「名前しか覚えてないって本当なのね。そういえば、あなたの苗字、ナヴュラ…だっけ？ 珍しい響きだわ」

「そうか？」

「ええ。私も勿論冒険者だから色々な国を回っているけど、珍しいと思う。…そういえば、アツシユ、あなたたつて戦えるの？」

「ああ。多少はね」

「じゃあついでにギルド登録しちやええ？ 今、身分証明書とか何も持っていないんでしょう？」

ギルド登録をすれば、五大国全てに面倒な手続き無しで入国できるらしい。これは便利だ。俺はギルドに着いたらついでに登録しようと心に決めた。身分証明書なんて上等なものを持っていない今、それらを必要とせずになれる唯一の職業だ。小銭稼ぎも同時にできるから、便利便利。

今いるのは魔獣にも通じるような兵器製造技術をもつという有名な五大国の一、バスカルグ同盟にいるらしい。だが五大国と言っても、つい5年前、魔法王国として大陸中に名を馳せていたナルマテリア王国がローズダウン皇国という魔獣を使役する技術を持つ国に滅ぼされたらしいから、今ではもう四大国となり、その上魔法技術まで手に入れたローズダウンが大陸を支配し始めているという。

残った三国も互いに連盟を組むなりして対抗すればいいと思うが、お上の事情はそう簡単にいかないらしく、それぞれが孤立してローズダウンに対抗しているらしい。

本当に、何時の世も人は愚かだ…と、今は俺も唯の人間か？ いや、唯のではない…か。

今まで明るく喋っていたユーゼリアが暗い表情になったからか、妙に場が暗くなった。なにか王国に所縁があつたのだろうか。木漏れ日があるのに何故か空気が冷たい。場の空気を和ませるように、俺は思っていたことを口にする事にした。

「そういうえば、最寄りの街ってどんなんところなんだ？」

「ポルスっていうの。煉瓦造りの家が立ち並ぶ街よ。…まあ、大きさとしてはそれ程でもないけど」

「へえ」

「特にこれといった特産とか有名なものとかはないけれど、町並みは美しいって言われているし、周りもそれ程強い魔物がいるわけでもないから、そこそこ観光名所として売れているかしら」

「どうやら話題の転換には成功したようだった。その後も何とは無しに会話をしながら山を下っていく。」

「……そろそろ着くわ」

その声を聞くと同時に視界が開けた。煉瓦造りの町並みが広がる大きな町——ポルスに俺達は着いた。

煉瓦造りの家ばかりの町、故に煉瓦街ポルス。

なんともまんまな名前ではあるが、まあそう言うのだからそう呼ぼう。全て臙脂とベージュで統一された町並みは、綺麗だなあと素直に感想が出た。これは確かにちよつとした観光名所になるのかもしれない。

「さて、と。まずギルドに行く前に武具店に行こうと思うんだけど……」

「なんで？」

「ギルドカードに必要な情報なのよ。……ほら」

そういつて見せてくれたユーゼリアのギルドカードには、確かに武器の欄があつた。他にランク、年齢（…は指で隠されている）、職、運勢、称号、祝福、装備、預金なんてものもある。

……え、預金？

「ギルドは銀行代わりにもなってるから。ほら、一度に大量に儲けちやう仕事じゃない」

「はあ」

そんなものか。

ところで祝福とやらは、自身が信仰してたりする神様の名前が出るらしい。ユーゼリアの場合は「女神ナルマテリアル」とあった。魔法の神様らしい。

因みに彼女のランクは、B+。ユーゼリアが言うには、Cで一人前と言われるらしいから、かなり上級者だ。そして視界に入った気になる預金額は……400,000リール。

「すごいな」

「え？ ああ、いや、まあ……ね」

曖昧に誤魔化して早速武器店に行こうとしたユーゼリアを、あわてて止める。先程から気になっていたことだ。

「あ、ユリイ。実は俺、金持っていないんだけど。本当に。所持金0リール。それに、俺にはこれがあるから、武器店へは行かなくても良いんじゃないかな」

そういつて背に腰に差してある剣の柄を手でたたく。一文無しという言葉に呆れた顔をした（いくらなんでも幾らかは持っていると思っていたらしい）ユーゼリアも、俺の剣を見ると、おや、と言った顔をした。気付かなかったのか。そこそこ装飾にも凝っていてお気に入りだったのだが。

黒字に金と幾らかの硝子玉の装飾が施された鞘に収まっている長剣と、似通った装飾の短剣は、遣い魔の頃から使っている相棒だった。

「あら、そう。じゃ、装備を買いに行くわ。お金は後で払ってもらうから、気にしなくて結構よ」

「そりやどーも」

結局連れて行かれた武器店。如何にもな重装備の鎧から、唯の服にしか見えない軽装備まで、多種多様だ。お金は見たところ……ま、ぼちぼちだな。平均して10,000リール。高い物は高く、安い物は安い。そんな感じ。

「剣を使うならこんな鎧なんてどうかしらっ」

「いや、俺鎧はちよつと……」

流石に恥ずいぜ、姉さん！

結局欲しいと思えるような良い装備はなく、とにかく形だけでもと  
いうことで軽装備に分類分けされる黒い長コートを買ってもらった。  
昆虫に似た魔物が紡ぐ糸で作られているらしく、並みの革よりは丈夫  
とのことらしい。ただ、魔法耐性、特に火と雷は非常に低いため、魔  
道士相手、あるいは魔法を使えるような高位の魔物相手に戦う時は注  
意しろと店主に言われた。ちなみにお値段は3000リールと少し。  
安物の中ではそこそこだと言えた。

ユーゼリアは防具も手に入れたことだと、足をこの町のギルドへ  
と向けた。素直について歩いて行く。

やがてに町の外れに、臘脂の煉瓦と少し色が違う、ベージュの煉  
瓦でできた大きな建物が見えた。あれが冒険者ギルド、ポルス支店ら  
しい。

#### 4話 「冒険者ギルドポルス支店」

ドアを開けて中に入ると、中はまさしく酒屋と言った様子だった。まだ昼前なのに、もう酒を飲んでいる者がいる。

入って手前に丸テーブルなどがいくつもあり、左の方に酒屋カウンター。正面奥にはギルド受付カウンター。酒屋カウンターにいるおじさんとは違い、忙しなく動いている受付嬢達がいる。右の壁には、巨大なコルクボードがあり、所狭しと紙がピンで止めてあった。「行くわよ」

「はいはい」

茶色い髪の受付嬢はニコニコと人の良い笑みを浮かべて挨拶してくれた。俺の仕草から分かったのか、冒険者登録の方ですか？ と聞いてくる。ユーゼリアが領いたので、受付嬢は少々お待ちくださいと、奥に引っ込んでしまった。

「お待ちせいたしました。では、こちらの紙に必要な事項をご記入ください。何か不明な点がございましたら、お気軽にお尋ねくださいませ」

そして受け取った紙とペン。名前と、職業（剣士とか、魔法士とか、そういうやつ）、年齢、性別、種族（人間種とか、エルフ種とか）、拠点の有無、などなど。

「んー、俺は……剣士……だな。で、22歳の男の人間……と。あれ、拠点の有無って？」

「貴方の場合は、『無』に丸をつけて」

「はい。冒険者として旅をされる方は『無』。一つの町、つまり、この場合ポルスに留まり、ここでずっとクエストの受注をされる方が『有』に丸をつけて頂くことになっております」

ふむふむと頷きながら、『無』に丸をつける。その他にもいろいろ尋ねながら、なんとか必要事項を書き終えた。

「では、このプレートに一滴で良いので血を流して頂けますか」

「はい」

渡されたナイフは無視し、歯で唇を噛み切る。ぷくりと出てきた血



を指ですくつて、鋼色のプレートとやらに落とした。少し待つようにと受付嬢がまた引つ込むと、今度はそんなに待たずにまた戻ってきた。

「はい、アシユレイーナヴユラ様の冒険者カードが作成出来ました。使用方法としては、ご本人が手に持つだけです。御覧の通り、今は私がお手にしているので何も表示されませんが：はい、ナヴユラ様がお持ちになりますと、このようにカードに冒険者としての情報が出るようになっております。仕組みとしては、体から発される微弱な魔力を感じること、表示非表示が切り替わるというものです。……さて、次は冒険者様への注意事項を御説明させて頂きます。

この度は冒険者ギルドと御契約頂きましてまことにありがとうございます。……さて、ごさいます。

つきましては、幾つかの注意事項を事前に御説明させて頂きます。長文になりますが、これらの規約のいずれか一つでも破約されますと、ギルドへの罰金、或いは除名処分を致しますので、御容赦ください。

まず、ひと月の納金義務についてです。

我々ギルドでは、冒険者様のランク別に月に幾らか以上の納金義務を課しております。これは、様々な特権が与えられる冒険者様においては当然と思われる義務ですので、悪しからず。尚、納金とは依頼の手数料と同意義ですので、別途納金手続きは必要ありません。

F系ランカー：1000 R E系ランカー：3000 R D系  
ランカー：4000 R

C系ランカー：10000 R B系ランカー：20000 R  
A系ランカー：30000 R

S系ランカー：50000 R SSランカー：100000 R  
また、冒険者様の『強さ』を表すランクをギルドでは用意しております。

ランクはFーからSSまであり、Fー、F、F＋、Eーと続き、Aー、A、A＋、S、SSで終わるものです。SとSS以外は＋とーが付く、と言う事です。お分かりと思いますが、Fランカーが駆け出し

の冒険者様で、Sに向かうにつれだんだん実力もついていくというものです。Aーランカー以上の冒険者様には二つ名がギルド本部から与えられます。特に、SSランカーの方は現在大陸に3名しかおらず、その強さも彼の魔人に匹敵するのではと噂されるほどです。一般的にはCランクで一人前のベテランと言ったところでしょうか。

モンスターの格は『クラス』と呼称されます。

高ランクの者には様々な特典が用意されます。Bー以上になるとギルドカードの提示で民宿以外の宿屋ならランクに応じた値引きをさせていただきます。Aー以上ならばVIPルームを通常価格で使えるという宿も少なくありません。同じくまたBー以上から、ギルド内の食事でも割引が有効です。S系ランク以上になるとギルドの宿泊施設、レストラン共に無料となります。

ただし、Sランクに認定されるには、ギルド側から提示される特定の魔物、ないしは魔獣の駆除を一定数以上、ギルド職員同伴の元行つていただきます。

またAーランカーになりますと、ギルド側からギルドナイトへの勧誘を行います。長くなるのでここでは割愛させていただきます。

次に、依頼に関してです。

冒険者ギルドでは主に民間人から依頼される雑用、魔物討伐や遺跡調査が基本となります。

ただし、Cーの以上のランクを持つ冒険者に限り、ギルド側から“指名”を受ける場合がございます。主にそれらは護衛系の依頼で、依頼主たつての希望の場合となりますが、それに応じてくださる場合は報酬に色が付くことが一般的なので、皆さん指名クエストは受けられることが多いですね。もちろん、強制ではありませんから、拒否することも可能です。それによって冒険者の評価が下がるといったことはございませんから、ご安心ください。

また、個人で依頼を受ける場合は最大でも自分のランクの同系――例えば、本人のランクがFーだとすればF系ランク、本人がCーであつてもC系ランクの依頼しか受けられません。ただ、例外として、

パートナーがいる場合のみ、そのパートナーのランクと同系の依頼を共に受けることができます。

ランクを上げる方法は、2つあります。

1つ、全ての依頼にはギルドが設定したポイントがあり、達成するとそれらがギルドカードに加算されるので、それを一定数以上稼ぐ。

2つ、魔物からはぎ取れる素材をギルドで売却することで、同時にポイントも稼げる。これはとの同時加算が可能だけでなく、依頼を受けずに個人で魔物を倒した場合にも有効である

これらの方法が一般的です。

依頼の重複は、他の冒険者への依頼が枯渇する恐れがある為、認められていません。また、連続していくらかの依頼を破棄したり失敗したりされますと、ギルド側から降格、あるいは罰金、除名などの処分がくだりますことを、事前にご了承ください

「ふむ。多分覚えた」

「分からなくなったら、その都度我々にお尋ねくだされば、御説明いたします」

そう言つて渡されたのは、さっき血を垂らした鋼のギルドカード、それと銀色のブレスレットだった。ギルドカードを受け取ると、先程記載した内容が浮かびあがった。左上に大きくゴシック体で『F』とある。これが今のアシユレイのランクらしい。

「それを手首に嵌めると、いつでも好きな時に空間拡張の魔法が施された鞆を呼び出すことができます。使用方法ははめた手首に意識を集中するだけです。魔法を扱える方なら、手首に魔力を集めるといいうい方でもよいでしょうか」

「慣れるとちよつと離れた場所でも鞆の入口を空けることができますの」

今まで黙っていたユーゼリアが頭上1mのところに鞆を出し、一瞬にして消した。慣れるまで多少の時間はかかるようだ。

「なるほど」

「注意点ですが、ギルドカードは一度発行されると一ヶ月間は再発行できません。もし紛失された場合、再発行されるまでの期間はギルド

の仕事を受けることができなくなります。ですので、なるべく紛失なさらぬよう心掛けてください。

そしてリングについてですが、こちらは大変貴重な品となっており、再度の供給には10,000リールの料金を頂きます」

「高い」

思わず漏れた言葉に、一瞬受付嬢が言葉に詰まる。左から突き刺すような視線が送られた。いや、だってユーゼリアが今までコツコツためてきたお金が、たった40回ギルドカード紛失しただけで全部パアになってしまおうと思うと……いや、普通40回もなくさないだろうか……

「……空間拡張魔法のエンチャントは非常に高度な技術ですから。紛失された場合、中身の保障は致しかねますのでご理解ください。

ギルドは基本的に冒険者と依頼主双方の自由な意思を尊重し、その内容に関しては一切干渉しません。

また依頼遂行に伴い、当事者間で何らかのトラブルが発生した場合にも、我々は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。ただし、ギルド所属の冒険者が著しく人道に反する行為を犯した場合に限り、我々の粛清対象となりますのでご注意ください」

「あいあい」

「それでは、冒険者アシユレイ||ナヴユラ様の御健闘を、お祈りいたします」

「そりや、ドーもイダッー」

ついに左からエルボーを喰らった。撃沈したアシユレイをひつつかみ、ずるずると引きずりながらユーゼリアが愛想笑いを浮かべる。そのまま2人はF系ランクの依頼ボードへとやってきた。

「もう、ちよつとは礼儀正しくしてよね」

「はいはい、ごめんなさいデデデ！ は、早く依頼を決めようか！」

「ええ、そうしましょ」

ヒリヒリする耳を押さえながら、所狭しと張りつけてある依頼書を見る。どうやらF系ランクの中でも半分のところまで2種類に分けられているようだ。向かって左が採取、右が討伐クエストらしい。C系

ランクボードからは更に護衛クエスト依頼紙が真ん中に陣取っていた。

「やっぱり、初クエストは討伐だな」

「そう？　ま、私もいるから大丈夫だろうけど」

「はははは……あ」

ま、俺の方が強いけど。

そこでハツと思いだした。それは、俺だからこそ憂えることだ。元とはいえ、俺は現在でもその存在は『魔人の遣い魔』なのだ。つまり、分類上ではアシユレイ||ナヴユラという男は魔族である。故に、その強さは人のそれを軽く超える。

そして、魔族と魔獣は遠いどこかで血のつながりがあるらしく、互いの存在をより鋭く察することが出来る。よって、本能のままに生きる魔獣は、その圧倒的強さに彼を襲う事をしなくなるのだ。

血のつながりがあるせいで、人間相手では感じない実力差に気付いてしまうのである。……余程怒っていたり腹が減っていたら関係ないが。

つまり、あまり弱いと戦う前に相手がガチガチと震えだす。だから人の中でも『弱い』Fランクなどだと戦いにもならない――

「――いや、違うー！」

「どうしたの？」

「あ、ああ……何でもない」

そうだ、どうも魔獣の下位種と会う機会がそうそうないから忘れていた。本能丸出しの脳筋どもも、あまりにも格差が広がりすぎるとその力量を読み切れないのだ。脳筋だから。

「よし、弱い奴にしようー！」

「た、確かにその方が始めは良いけど、あんまりそれを大声で言う物じゃないわ……」

結局、報酬はF系ランクにしては高い部類に入る、2600リールの「コボルトおよびゴブリンの巢の殲滅」のクエストを受ける事となった。因みに、このクエストでたまるギルドポイントは40。また、各魔物50匹を越えた後からは足が出た分だけ別途報酬があるら

しい。ギルドポイントを100貯めればFに昇格できるアッシュとして、中々に割の良い仕事だった。

「なになに、場所は……ヘステイ森林ポルス街寄りの外層部。依頼人は近場の猟師か。これって、この紙を受付に持って行けばいいんだっけ？」

「ええ、そうよ。依頼人にはギルドが責任を持って速やかに報告するわ。私達は依頼人を通さずに、さっさとこのコボルトやらゴブリンやらを倒しに行けるって寸法。ただ、別枠に書いてある契約金の欄を忘れずに見てね。この場合は、ギルドが仲介する代わりに、事前に100リールの契約金を払わなくちゃいけないの。その分、成功した時はその契約金も倍になって帰ってくるけどね。つまり、この場合だと成功したら報酬の2600リールの他に別途で200リールがもらえるってわけ」

ふむふむと頷くと、丸いピンで刺さっていた依頼紙を一枚だけ破り取る。先程と同じ受付に持って行くと、受付嬢は眉間に僅かなしわを寄せてこちらを見た。……どうやらアッシュがこの依頼を受けるのに不服らしい。

「あの、あなたまだ冒険者になって5分と経ってないんですよ？ 確かにこれは報酬もギルドポイントもFのランカーには魅力でしょうけど、生き急がずに、まずは契約金無しの依頼から始める事をお勧めします」

お勧めしますとは言っているが、声色を見ても、この受付嬢がアッシュレイにこの依頼を受けさせないことは明白だった。溜息をつきたくなるが、どうにかして説得しようと思いついた瞬間、思わぬところから助け船が来た。

「大丈夫よ、私が同伴するわ」

「…あなたは？」

「B+ランカーのユーゼリアーシヤンヴリル。召喚魔法士よ。これで彼がこのクエストを受けてもいいでしょう？ それにこれは元々F系ランクの依頼票。あなたが口出しすべきことじゃないわ」

その言葉にムツとした顔を作りながらも、茶髪の受付嬢は手早く手

続きを済ませた。「折角心配してやったのに」といった心情だろう。

因みに、先に受付嬢が言っていた「契約金無しの〜」というものは、報酬も3ケタという格安クエストなのだ。内容はというと、例えば討伐系ならばゴブリン3体の駆除。採取系で言えば、5km先にある丘のなんたら草を3束とってきてほしいとか。

要するに、簡単なものだ。はつきり言って、ゴブリン3体の駆除など報酬を出さなくても、最寄りの村の男衆10人が手伝えれば簡単に事は終わる。だが、そこを敢えてやるのには、ギルド側の思いやりというものがある。村人ならば少なくとも10名は必要であろうゴブリン3体を、1人でまずはやってみろというわけだ。ここで契約金などをつけてしまうと、逆にギルド側としても痛手となる為、また駆け出しの金がない冒険者の為に、こういった簡単すぎるクエストには契約金が全くついていなかった。

「さて。じゃ、いきましようか!」

「何で俺よりもユリイさんの方がわくわくしてるんでしょーかね」

「だって、なんかアッシュって強そうだし!」

「……どうしてそう思う?」

「勘!!」

拝啓、享樂の魔人ノーア!!ナ!!ヴユラ様。貴女絶対この子気に入ると思います。魔人の遣い魔の強さの判断に「勘」て……。ああ、ホント気に入るだろうなあ。美人だし。

何故か疲労を感じたアッシュレイだった。

ふと、手元のギルドカードを見やる。

アッシュレイ!!ナヴユラ。ランクFの剣士。22歳男。人間で拠点は無し。称号も無い。軽装備、預金ゼロ。祝福は……

「……享樂魔神ノアナヴェイラ」

あの、桃色の髪の少女の名だった。

## 5話「駆逐」

先程から、あたりには剣が空を斬る音、何か水が詰まった革袋が裂かれる様な音、そしてその中の水が辺りに飛び散る音と、お世辞にも美声とは言い難い何かの断末魔しか聞こえない。何とも耳に悪い四重奏カルテットである。

音の中心では、剣を手にしたアシユレイがいた。その動きはまるで、剣舞を舞っているかのようにであった。

「よつと」

軽い掛け声と共に、振り向きざま後ろに経っていたゴブリンを縦に斬る。飛竜ですらバターののように切り裂いた剣は、ゴブリンなど空気を斬るように軽く切れる。

勢いのまま一回転して、まわりのコボルトを上下に真つ二つ。木の上から錆びた短剣を構えて落ちてきたゴブリンに、拳を振り上げ同時に首をやや反り剣を交わす。

ちらと視界に、逃げるコボルトの背がある。顎骨が砕ける嫌な音が腕を伝って響くが、気にせずそのまま自由落下で落ちて来る錆びた剣の柄をつかみ、一瞬で投擲体勢に入った。

次の瞬間には逃亡を図ったコボルトの頭は見事パツクリと割れ、役目を終えた短剣はコボルトの頭蓋の固さに耐え切れず、金属音をまきちらしながら折れた。

「ほつ」

中距離から生意気にも初級魔法ファイアを繰り出してくるゴブリンメイジに、足元にいた違うゴブリンの死体を蹴りつけ、転倒させる。じたばたともがくゴブリンメイジの手から歪な木の杖を奪うと、脳天にその鋭い杖の先を突き刺した。

魔物特有の青い血をまきちらしながら、しかし自身に流れる赤い血は一滴も出さず、次々にゴブリンとコボルト達を屠っていく。全てが文字通り一刀両断され、一撃で殺された死体の山の中央に立つアシユレイを、ユーゼリアは思わず口を手で覆ってみていた。



そもそもここがこんな惨状になったのは、依頼に出されていたゴ布林とコボルトの巣が、双方思ったよりも近くにあったと言う事だった。1つ1つ潰していく予定だったが、思いもがけず2種の巣を同時攻略する羽目となった。

ユーゼリアも、これは致し方あるまいとして自らの召喚獣を呼ぼうと杖を手に取った。本来なら手を出さないでおこうと思っていたものの、なりたてホヤホヤの初心者Fランカーに1人で2つの巣はキツイから、後でまた少数相手の魔物とやりあえばいいとして。

だがそこで、アシユレイが思いもがけない事を言ったのだ。

『ちよつとお願いなんだけど。これ、俺1人で対処させてくれませんかね?』

思わずぽかんと口を開けてしまったのを覚えている。

通常、この状況にあつて確実にゴ布林、コボルトを殲滅できるのは、ランクDクラスのパーティーでないと無理だ。1人でやるなら最低でもランクはC。

かすり傷すらない無傷で行くならC+は欲しい。

『ちよ、アツシュ、貴方死ぬ気!!?』

『まだ死にたくはないから、死なないさ』

そんな軽い言葉の後に、無防備に、まるで散歩に行くかのような歩きで双方の巣の間に行く。腰からギルドの援助武器として貰った投げナイフを取り出すと、2本同時にそれぞれの巣の暗闇の中にナイフを投げ入れる。まさか、見えていたとでも言うのだろうか。一瞬にして彼の手から消えたナイフが、ゴ布林とコボルトの巣の、どちらからも聞こえる断末魔の声を作り出す。

数秒置いて、耳を塞ぎたくなるような奇声を上げながら魔物共が走り出してきた。身長は1メートル程度だが、その身に秘める筋力は成人男性以上というゴ布林が、怒涛の勢いで巣穴から出てきたのである。中にはぽつぽつと体格のいいゴ布林もいて、ユーゼリアにはそれがゴ布林達のリーダー、ゴ布林チーフだと一目でわかった。

一方コボルトの方の巣からも、錆びた剣や斧をかついだコボルト達

が、その犬の様な頭で低く唸りながら出てきた。そこにも一回り大きなコボルト——キングコボルトがみられた。

そして話は冒頭に戻るのである。

「なによ……これ……」

これは余りにも一方的な虐殺——駆逐だった。こんなのがランクF—の訳がない。軽く見積もってBは固いだろう。

ひよっとしたら、彼は高名な剣士だったのではないか？　だが、ユーゼリアは「アシュレイ＝ナヴユラ」という名の剣士など、噂に聞いたことも無かった。ランクBにもなれば、大抵異名などが着くのだが、彼を表したような二つ名など全く知らなかった。

グシャツ。

嫌な音と共に、その場に静寂がおりる。

「ふう」

自身の剣に付着した青い血糊を振り払って、アシュレイがユーゼリアへと向き直った。その身には魔物の青い血などは僅かたりとも着いていない。返り血すら浴びずに避ける技量。ユーゼリアは何故か、アシュレイに僅かな畏怖を覚えた。

「アツシュ……」

「お待たせ、ユリイ。この後はどうすればいいんだっけ？」

「……あ、うん。ゴブリンもコボルトも耳を持って行けばいいの。片耳だけで十分よ。ただし、右か左か片方にそろえてね」

「はいよ」

その後も何の躊躇もなく耳を斬り落としていくアシュレイの手が、どこか手慣れているのをユーゼリアは見た。が、なんとなく聞きそびれているうちに、5分もするとアシュレイは全ての魔物の耳を取り終わってしまったので、思考を戻す。

見れば、ギルドから貸し出された麻袋はパンパンに膨れていた。いくら小さいサイズのものとはいえ、一体アシュレイが1人で何匹屠ったのかが一目で分かってしまう量だ。100近くあるのではないだろうか。

「早いわね……」

「そうかな。どうやら思った通り、俺はどこかでこの剣をふるったことがあるみたいだね」

「……それにしても、生きているものを殺すことに躊躇が無かったみたい」

意識したわけではないが、どこか責めるような口調になったユーゼリアに対して、アシュレイは少し驚いたような顔をした後、苦笑してその言葉を肯定した。

そうだね。

その苦笑は、アシュレイ自身を嘲笑しているようだ、ユーゼリアは思った。

その後2人は無言で森林から戻ってきたわけだが、ふと思い出したようなユーゼリアの言葉で先ほどとはまた違った微妙な空気が場を流れていた。

つまり、

「そういえば、これを山分けしたらさよならなのよね」  
である。

アシュレイは内心で、

(ええええなんでそんな名残惜しそうに言われてるの俺!!? これは何か、「お前餓死しかけてるのを救ってやったのにこれっぽっちの金で足りるかボケェおいこらこの聞こえなさそうで聞こえる絶妙の音量で言った真意に気付けよゴルア」を遠回しに言ってるのか!? そうなのか!!?)

しかし携帯食料ってそんな高価な物なのか? いやだが1000年前では考えられないほど日持ちも良くなったと聞くしひよつとしたら俺はとんでもないことをしてしまったのかギリギリセーフなのかもしくはやっぱりギリギリアウトか。

しまった何て返せばいいのか見当もつかない! だって遣い魔にそんな資質いらねーし!! 俺悪くねーし!!!)

と混乱、恐怖、疑問、焦燥のすえ回り回って開き直っていたし、ユー

ゼリアはユーゼリアで

(どどどどどどうしよう言っちゃった言っちゃった思わず思ってたと言っちゃったけど小さい声だったし聞こえてないわよねそうだよね。ほらうんアツシユ無表情のままだしああでもこの場に流れる重い空気は何。私どうすればいいのああああやっぱいいわけ考えておこうしよう。)

ええと、『しばらく独り旅だったからアツシユといると楽しくて』ってこれ本音じゃないいい!!)

とまあ混乱のスパイラルに陥っていた。

ただ、2人とも過去に培われたポーカーフエイススキルを発動しているため、彼らはいたって普通の無表情である。無表情が普通かは知らないが。

しかし、2人の焦りや混乱のオーラが、何故か辺りを殺伐とした雰囲気に変えていた。

アシュレイは過去魔人やその他の遣い魔との対話でポーカーフエイスはなくてはならない物だった。

ユーゼリアの方は、まあ過去にそういう仮面が必要だったとだけ、言っておこう。

そんなわけで、実に第三者から声をかけにくい空気のままポルスに戻った2人は、この空気をなんとかせねばならぬと、とりあえず一時分かれてアシュレイが1人で達成報告をすることにした。

というのは、このまま2人一緒にいても、気まずい空気が晴れるわけがなく、むしろより一層凝り固まると互いに察したからである。

アシュレイがカウンターで手続きをしている間、ユーゼリアはギルドの外で壁にもたれながら空を見上げ、その整った眉を悩ましげに寄せていた。

(アシュレイ!!ナヴユラ……)

ユーゼリアは、これまでのかれこれ4年に渡る独り旅に、正直少々疲れていた。友人などほとんどいなく、そんな中偶然出会ったのは、

記憶喪失で常識に欠ける、だがなぜか放っておけない気持ちにさせる、自分より4つ年上の食の恩に関してちよつと強引な青年。

会話が楽しいと感じたのは、一体いつぶりだろう。

それ程多くを語ったわけでもなく、まだ名前を知って半日しか経っていないのに、ユーゼリアにとつてアシュレイとのこの僅かな邂逅は、それまでの日々を灰色と称せるほどに色鮮やかなものとなった。だが。

(だからこそ……巻き込んで、いけない)

ふと、太陽が雲に陰る。

「……ッ！」

次の瞬間、ユーゼリアの周りを5人の男達が音もなく取り囲んでいた。

直後、ユーゼリアの顔から色が消える。

「しまった……!!」

\*\*\*\*\*

「え、も、もうですか!?!」

あまりに早い帰還に吃驚している先の茶髪の受付嬢がわたわたとするのを目の端に、アシュレイは先程からのユーゼリアについて考えていた。

(あれは、食の恨みとかそんな事に対したものでじやなかったな。随分と思ひ詰めたように見えたが……)

帰り道に発した“もうお別れ”。

アシュレイとの別れを心底惜しむような響きだった。

が、アシュレイ自身自分で言うのもなんだが、身元不明な男にひよひよいよと情を移しては、特にユーゼリアのような美しい少女が旅をするのは危ないだろう。それも、ただの記憶喪失者ならまだしも、アシュレイはよりによって魔人の遣い魔なのだ。いくら“元”が付くとはいえ、魔に属するものであった——今も、そうであることに、変わりはない。

アシユレイは、純粋な“ヒト”ではないのだから。

こちらも久方ぶりにあつた人間で、まだまだ知りたいことも沢山あるし、ユーゼリアという人物が気に入つたのもあるから離れたいが、彼女を気に入つたのなら迷惑になるようなことは余計、すべきではない。

遣い魔など、共にいて百害あつて一利なし。そんなことは、自分が一番わかっている。

そこまで考えて、自分も案外情が移っている事に気付く。ひとり、苦笑した。

遣い魔だつた頃は見下し軽蔑こそすれ、自ら話しかけようなどとは微塵も思わなかつたのにもかかわらず、ついさつき、微妙な空気になつたとき、アシユレイはそれに慌てた。ユーゼリアとの会話を少なからず楽しんでいた事の証拠だ。

茶髪の受付嬢から渡された報酬金をバッグに入れると、後ろを振り向いてはたと脚を止めた。

(……5人か。良く気配を消しているが、魔力はダダ漏れだな)  
不穏な気配がした。

このギルドは町外れにある。時刻は夕方にさしかかろうかというところ。酒場も兼任しているギルドだから、本格的に混み始めるのは夜、もう少し後だろう。今もそこそこ広いギルドの中には3人組と4人組の7人しかいない。

そして何より怪しいのが、扉の外、ユーゼリアと思われる魔力の気配が慌てたように戸口付近から裏手に移動していったことだ。

それを5人が一斉に追いかけるのが怪しさに拍車を駆ける。  
彼女を狙っているのか。人攫いか？ その程度ならユーゼリアは1人で撃退できそうだが。余程の手練れかあるいは——“殺し”を生業とする者達か。

召喚魔道士である彼女は、基本遠距離攻撃型。接近戦に持ち込まれたら、しかもその相手が接近戦のプロならば、彼女に太刀打ちできるはずもない。今日見た限り、そんなに筋肉も無かつたし、体力も見ただ目相応だ。

ユーゼリアの事だから、他人に迷惑がかかるとかいう理由で裏手に行ったのだろうが、人に見られないことはつまり、誰からも助けが入らないことだろうに。

まさか目の前で襲われる知り合いを放置するほど非情ではないので勿論助けに行く。

外に出て数瞬。

戸口には僅かな砂ぼこりと落ちた溜息が残った。

## 6話 「襲撃」

「セフェリネ・ユーゼリア・イレllナルマテリア第二王女とお見受けする」

「今更何を」

「再三申し上げたが、我々は貴殿に害なそうというのではない。抵抗しないならば無理な拘束をせずに祖国までお連れする。そろそろ上の堪忍袋の緒も切れる。おとなしく護送されることをおすすめするが……」

「どの口が言う、この逆賊が！」

「……それは拒否ととって、構わないものだな？」

「当たり前だ！ ダランゼルなどに私は屈しないと当主に伝えるがいい、逆賊の狗！」

「バルメル様からは、次に抵抗した場合、武力行使もやむを得ないときれている。……骨の1本や2本、覚悟しろこの小娘が!!」

スツと慣れた様子で腰の後ろから短剣を抜くと、他の4人も一齐に刃を閃かせた。

「我が魔の盟約に答え……あつ」

咄嗟に召喚しようと杖を掲げるが、昼にジルニトラを召喚した時に失った魔力はまだ回復しきっていない。朝、サンクチュアリの清流の水と果物以外何も食べていないままでは、それも当然のことだった。

自分の空腹も忘れるほどアシユレイと共にいるのを優先していたことに、今更気付く。

「くっ」

それでも最後の悪あがきと、見事な杖術で短剣を1本、2本弾く。

ローブの袖に隠していた籠手で1本を受け止め、その細腕に響く衝撃に奥歯を食いしばりながら体に残る僅かな魔力を杖に込め、火を纏ったそれを横に薙ぎ払った。

男たちは余裕の面持ちで飛び退き、それを避ける。

「……ふん、余計な手間をかけさせおつて。誰かの助けが来るとでも？ 期待の人物は共に行動し始めたあの黒髪の男か？ だとしたら、そ



んな希望は早々に捨てることだな。ここには防音と不可侵の結果を張った。5人分の魔力を注ぎ込んだ魔道具だ。効果は明日、日が昇るまでだが、それまでは誰も来ない。それまでお前が持ちこたえられれば、話は別だろうがな」

勝利を確信しているのか、やけに饒舌だ。最後の嘲笑を含んだ言葉に、部下がゲラゲラと笑う。

だが、もしかしたら、と思っていた淡い期待も砕かれた今、ユーゼリアは手に持った杖を握り締めるほかどうしようもなかった。

先の炎を纏った杖は、所詮猫だましの奇襲作戦。威力も見た目に反してほぼ無く、本当にただ驚かすことしかできない。

魔力も残りは下位の魔法を1発打てる程度。

相手の男たちはひとりひとりは大体C以上の實力だろう。ユーゼリアはBーランクといえど、それも後衛職でのことだ。杖術に関して言えば、正直近接を得意とする者のDランク程度である。

——詰んだ。

思わずそんな言葉が浮かぶ。

(何か、何か策は……)

焦る頭で必死に考える。杖を持つ手に汗が浮かんだ。

どんどん青くなっていくユーゼリアの顔をにやにやと眺めていた頭が、短剣を握り直す。それを見た部下たちも顔を引き締めた。ユーゼリアの顔が、いよいよ危機迫ったものになった。

男たちの足に力が込められた、その瞬間。

「……やれやれ、まだ18の女の子に寄ってたかって大の大人が……リ  
ンチか？ カツアゲか？ わざわざこんな結界を張るなんて、最近の  
カツアゲは力の入れ具合が違うなあ」

その場にいたすべての者が街路方面に顔を向けた。男たちは驚愕の面持ちで、そして、ユーゼリアはどうして、という表情で。

「なっ……!! 結界は!?!」

「破られた感覚はなかったぞ!?!」

「くぐり抜けたとでも言うのか!?! 5人分の魔力だぞ!」

「嘘……アツシュ……?」

ユーゼリアは、こぼれ落ちるような蒼の瞳を限界まで見開いた。

「よう。ちよつとそこで観戦させてもらってたけど、なかなかどうして近接もいけるクチじゃないか。奴さん、気配は消していたとは言え、余裕かましすぎだろ。ずつとここに俺がいたつてのに。そんなに影が薄いかね? 悲しいこつた」

「……おいてめえ」

肩をすくませてユーゼリアに話しかけるアシュレイに、どすのきいた声で頭が喋った。すたすたと散歩をするようにユーゼリアのもとへ歩きながら、首だけそちらに向ける。

「なんだ?」

「…いつからいた?」

「そうだな。ユリイのことを『王女』って呼んだあたりから?」

言外に『最初から』と言われた頭は、グツと拳を握った。

「……結界はどうした」

「お前らだって馬鹿じゃないんだ。自分達の魔力で構成した結界が割れてないことくらい流石にわかるだろ? なら答えは1つだ」

「馬鹿な! 結界をくぐり抜けるなんて業、張った結界を構成した魔力の倍以上の魔力を必要とするんだぞ!」

部下がヒステリックに叫んだ。ありえないものを見るかのような目でアシュレイを見ながら。頭は無言のままだった。

「……どちらにしろ、俺たちの仕事は変わらない。多少やるが増えただけだ」

短剣を構える男達に、座り込んだままのユーゼリアを庇うように前に立つと、くいくいと、人差し指を挑発的に動かした。

「だ…だめよ。アツシュ、逃げなさい! いくらなんでもC相当の相

手を5人もなんて……」

後ろから響く声は、心なしか普段よりも震えているように聞こえた。無防備にも敵に背を向け、未だ立てないユーゼリアの頭をぽんぽんとたたく。蒼の双眸が、アシュレイの黒と交わった。

それだけして、また黒髪の男は前を向く。その表情は、彼の眼前の男たち以外見る者はいなくなった。

口角が釣り上がる。

その瞳は、ひとりでに爛々と輝いた。

まるで、獲物を狩る獣のように。

「やるのか？　ならお前らも殺<sup>や</sup>られる覚悟を決めな。……人の恩人に手え出した報い、受けてもらおうぜ？」

直後、

ドツツ

音を立てて“何か”がアシュレイから放たれた。

それは威圧。　　殺気。

それは、覚悟。

獲物を“狩る”ことを決めた強者の覚悟。

「……ひっ」

誰かが喉に空気を送る。本当に恐ろしいモノを前にしたとき、ヒトは声を出すことすらかなわない。

カタカタと、短剣が揺れる音がする。同時に、少しずつ、男たちとアシュレイの距離が離れていった。アシュレイはその場から1歩も動いていない。弱者の本能が、襲撃者達をアシュレイから遠ざけていた。

「……」

ふと、あたりを制するその威圧が僅かに軽くなる。

「あ……う……うわああああああ!!!」

部下の1人が短剣を放って逃げ出した。本能の赴くまま、少しでも速く。少しでも遠くに。竦んで動かない足を無理やり回して、度々転びかけながら、必死に逃げていく。

それが皮切りだった。

「うわああああ!!!」

「お、おい！ お前ら!!」

男たちが一斉に逃げ出していく。脳裏に浮かんだ“確実な死”を恐れた者たちが、我先にと街の中心へと駆け出した。そこには先程までの統率された動きの欠片もない。当然、頭の制止の呼び声も、彼らの頭を素通りするだけだった。

「……おやおや。残りはお前だけになったようだが……」

「くっ」

頭の男が舌打ちをした。だが、それも苦し紛れというのはやった本人が最もよくわかっていている。自分の力量が、アシュレイには遠く——足元にも及ばないということが。

歯ぎしりしながら、絞り出すように頭は言った。

「……今回は引く」

そのまま影のように掻き消える。

威圧がふっと消え去った。くるりと後ろを向き、しゃがんで、無意識にほっと息を吐くユーゼリアに視線を合わせた。

「……大丈夫だった？」

「う……うん……」

まだばくばくと音を立てる心臓に手を当て、肩で息をするユーゼリアをみやってアシュレイは立ち上がった。ユーゼリアの手を掴んで引き上げる。と同時に、

くうう……

「……ぷっ」

小さく音を出した腹に、顔をこれ以上ないという程真っ赤にせながらアシュレイを睨むユーゼリア。全く怖くなく、単に上目遣いで可愛いだけなのだが、そこを本人はわかってはいない。

とりあえず、

「飯にしようか」

「……うん」

## 7話「亡国の王女」

「さて……腹も膨れたことだし、本題に入ろうか」

目の前で美人が霞むほどボロネーゼをがつついていたユーゼリアが一息つくと、苦笑とともに切り出す。

自身のナポリタンはユーゼリアが3皿目を頼んだ時に食べ終わっている。ちなみに、彼女はのべ5皿のボロネーゼと2皿のサラダを食べた。

そこまで見事な食いつぶりを見せられると、いよいよ昼の自分の暴食の罪悪感が沸き起こってくるが、まあそれはおいておこう。

「ここは騒がしいから、誰にも聞かれないでしょう。で？ ユリイはどこかの王女様なの？」

「……ええ」

「ふむ。ナルマテリア、かな？」

「……分かってるみたいね。そうよ。第二王女セフェリネ・ユーゼリア・イレllナルマテリア。それが私の本当の名前。あの襲撃者たちは、元ナルマテリア王国貴族、ダランゼル家の私兵……いえ、雇いの暗殺者ね」

「なぜ追われている？」

「……」

しばらくユーゼリアは話すことを躊躇しているようだった。アシユレイが黙って待つと、やがてため息をつき口を開いた。

「……もう、関係者になっちゃったものね。言うわ。」

…私は戦争でローズダウン皇国に王都が攻め入られるとき、12歳だった。当時ナルマテリアに王子はなく、私よりも6つ上の姉である第一王女が第一王位継承権を持っていたの」

\*\*\*\*\*

ローズダウン皇国は先の貴族ダランゼル家と、他、いくつかの貴族に事前に使者を送っており、ナルマテリア王国は内外2つの勢力を相手にしなければいけなかった。奇襲も食らい、形成はナルマテリア軍の圧倒的な不利。

父王と姉は決意し、末姫セフェリネ——ユーゼリアを王の間に呼んだ。

皇国軍が王都に攻め入る、10分前だった。

「逃げるのです、セファイ」

亡き母に似て美しい姉が、諭すように愛する妹に言った。妹と同じ蒼の瞳は涙に潤む。

いやいやと首を振る妹に、姉は言った。

「王である父上と、第一王位継承権を持つわたくしがこの城に残れば、周りへの示しはつきます。あなたは早くお逃げなさい」

「私たちはな、セフェリネ。父も、姉も、お前にもつと生きて欲しいのだ。お前はこの城から出た事など、数える程しかなかったな。いつも庭で花遊びか、召喚を覚えてからは彼らとともに遊んでいた……」

父王は姉娘から話を繋ぎ、セフェリネの肩に手を置いて視線を合わせた。

「父は、娘にもつと世界を知ってほしい。生きるのだ。セフェリネ」

セフェリネの目は涙が溢れるほど溢れて、もう前を見ることすらままならない状態だった。

「……うっ……ひぐ……で、でもっ」

幼いながらに聡明だったセフェリネはわかっていた。これが避けられぬ運命なのだということが。

だが、理性では分かっている、感情がついていかなかった。ついでにいけるはずもない。まだ齡12少女が突然の父と姉との別れ——それも、この場合はまず間違いない死別——をなぜ受け入れられるだろうか。

泣きじやくるセフェリネを、2人は優しく抱きしめ、言った。

「わたくしの可愛いセフイ。お姉さまの分まで、しっかり生きるのよ」  
「セフェリネ。皇国に復讐などと愚かなことを考えてはいけないよ。私たちは、お前のその優しいところが大好きなのだからな。コルトを護衛につけてある。彼とともに旅をして、様々な生きる知識を身につけなさい。」

王国という形がなくなっても、お前とナルマテリアの民が生き残れば、それは王国そのものなのだ。国とは、すなわち民。民なくして国足り得ぬ。だが、王無くしての国も、また足り得ぬ。生きろ、セフェリネ。最後のナルマテリア王女よ」

その時、王の間のドアが乱暴に叩かれる。一人の兵士が、息も荒く口早に言った。

「へ、陛下！ 皇国軍が王都に侵入しました！ もうお時間がありません。この城で我々が足止め致しますので、陛下と王女殿下は——」

「——いや、私たちは逃げぬ」

「し、しかし——」

「既に数多あまたの兵がその命を散らした。今更私が尻尾を巻いて逃げるわけにはいかぬ。私たちは、城にて最後まで戦おう」

なおも言い募ろうとする兵士を、その眼光でもって抑えると、王は娘たちの方を向いて言った。

「共に来るか、火の海へ」

「はい、父上。わたくしの魔鳥で火を凍りつけて差し上げます。ご存分に、炎帝を召喚なさってくださいな」

「ふ、頼もしい限りだ……母に似たな」

「父上の魔法の才も受け継いでおりましてよ？」

「ははは！ 本当に、強がりなところまでよく似ている——」

不敵な笑みを浮かべながらも、不安と恐怖にわずかに震えている姉の頭を撫でると、今度は妹姫に向き直る。

「セフェリネ。これからお前は母上の旧姓を使いなさい。ユーズリアⅡシャンヴリル」。それがお前のこれからの名だ。……コルト！」

「はッ！」

「…頼む」



「はい！ 命に変えましても！ …ユーゼリアさま、参りましょう」  
「…あ、ちちうえ!! おねえさまあ!!」

近衛騎士のホルトに手を引かれ、裏道へと連れられながらも、幼いユーゼリアは必死に父と姉に手を伸ばした。だが、幼い手は宙を切るばかり。とうとうこぼれた大粒の涙が、幾重にも流れ落ちた。

「わたくしの可愛いセファイ…。どうか…元気で…」

「セフェリネ…セファイ。お前は私たちの誇りだ。…達者でな」

「怪我や風邪には気をつけるのですよ！」

そして、ユーゼリアの最後の記憶は、涙で霞む視界に映った大きく手を振る姉と、その肩を抱く父の姿だった――。

「そして私はホルトに守られて国を出た。いろいろな国を回ったわ。皇国を含めて他の五大国も回った。その周りの小さな国々にもね」

「皇国も？」

「ええ。何せ、私のことを知っているのは上の一部だけだから。別に犯罪も何も犯していない小娘に賞金をかけるわけにはいかないでしょ？ いくら元敵国の王女だからって、大っぴらにはできないわ。だって、5年経った今も皇国が責められていないのは、他国が皇国の魔法を得てさらに強さを増したその軍事力に恐れているのであって、本来不可侵の条約を破ったのは皇国だもの。それに、関門でチェックされるうのは、基本ブラックリストに載った人だけだからね。案外簡単に入れたわよ。むしろ、灯台下暗し？」

カラカラと氷が鳴るアイスティーをひとくち飲み、ユーゼリアは視線を落とした。

「以来、私は皇国からの暗殺者に狙われるようになったってわけ。反乱軍でも立ち上げられたら面倒なものね」

元王女が、元王国民を煽って反乱。ありがちな話だ。

だが、とアシユレイはユーゼリアに頷きながら考える。

（たかが反乱を防ぐために、6年間も暗殺者を送り続けるのか？ しかも今日見た限り、そんなに質が悪い暗殺者というわけではなさそうだった。こんな調子なら、さっさとユリイを殺すという手段があったはずだ。それが最も手っ取り早い。なのに…待てよ）

そういえば、と思い出した。

(彼らは始めユリイを説得しようとしていたな。抵抗するな、と……。ユリイを生かしておかなければいけない理由があるのか。ならばそれはなんだ？ いや、そもそもナルマテリア王国とは、どんな国だった？ なぜかの国は五大国とカウントさされていた？)

昼、下山しながらユーゼリアが言ったことを思い出す。

(…そう、魔法大国だ。1つ、魔法が発達した国。1つ、王女である。1つ、生かさなければ意味がない。これらをあわせて考えられることは……)

ユーゼリアはまた話し始めた。

「コルトは旅を初めて2年で亡くなったわ。追っ手の毒を受けて……私の身を庇って」

「……」

「それから私は独りになった。幸い、ギルド登録も済ませてたし、既に2体の召喚獣ももっていたから、とりあえずのお金には困らなかつた。コルトは、旅に出てからすぐく厳しく私に教えてたからね。1人で生き抜く方法を。…今思えば、彼は近いうちに自分が死ぬことを予期していたのかもしれない」

また、話を区切る。

アイステイーの氷が、カランと砕けた。

暗殺者たちについて思い返すうちに、ふと、アシュレイの脳にひとつの仮説が浮かんだ。

(何かの秘密が隠された財宝、はどうだろうか。例えば、王家に伝わる何らかの魔道具。魔道具は、使い方が特殊なものも多くある。そして、一般に魔道具は、仕掛けが面倒で値が張る代わりに効果は大きい。……そう、奴らが使っていた結界装置のように)

あの暗殺者たちが自慢げに話していた防音・不可侵の結界のことである。まあ、アシュレイにいつも簡単にくぐり抜けられた時点で、すべての労力は泡と化したのだが。

アシュレイは、頭の中で次々とパズルのピースがはまっていくのを感じた。

(使い方を代々お受けにしか伝えない、特殊な魔道具……。それをユリイが持つているとしたら。いや、聞いた限りだとそんな余裕はなかったな。ならば、皇国が物は持つている、が、使い方を知らないというのが自然な流れだ。一大国家が持つ魔道具だ、手順と違う起動操作をすると自爆なんかするかもしれない。王家の生き残りはユリイだけ……。だから生け捕りにしなければ意味がなかった。……。これかな) 我ながらこれ以上しつくりくる理由が思いつかない。

ならば……。この仮説が正しいとするならばだ。ユーゼリアが自身の追われる理由をアシュレイにはなさないのは、

(迷惑を、かけまいとしているのかな。これは)

思わず笑ってしまう。

今更だ。

どうせ、あの時追っ手をこれでもかというほど威嚇したのだから、今更他人面できるはずもない。それはもう遣い魔とか言ってる場合じゃないだろう。一国が相手なのだ。

そもそも、若い女性が一人旅なんてしていることを知った時点で、正直アシュレイは放っておけないと思っていた。不埒な理由ではない。これは単に、「女は守らなくては」というアシュレイの——否、もと主人の魔人ノーアに植えつけられた持論である。

閑話休題。

とにかく、ユーゼリアだって馬鹿ではない。既にアシュレイがこの件に勝手に片足をつっこんだと分かっているのにも関わらず、なお気を使っているのは、ユーゼリアに気に入られたと思っただけだろうか。

ひとりでに笑顔になったのをいぶかしむように、ユーゼリアがアシュレイの顔を覗き込んだ。

「ま、おかげでこうして今旅を続けていられるわけよ。……。何笑ってるの?」

「ああ、すまない、不謹慎だったな……。…なあ、ユリイ」

「なあに?」

「……。腹を割って、話し合おうぜ」

笑みを浮かべていた表情から一転、真剣な眼差しになったアシユレイに気圧されたユーゼリアは、無意識に唾を嚥下した。咄嗟に笑みを取り繕う。

「なんのことかしら。これ以上過去の傷を抉るの？ ひどいわね」

普段と同じ美しい顔だが、アシユレイは意味深な笑みを浮かべるだけだった。

「ユリイがまだ過去を引きずるような、そんな弱い女じゃないってことぐらいは、俺でもわかる」

立ち上がると、手を差し出した。

「まあ、今は静かな場所に移動しよう」

店を出てやってきたのは、町外れの森の入口。先ほどアシユレイが最初の依頼を受けたヘステイ森林の東部とは反対側の西部であった。

小さな丘になっているそこで、2人は腰を下ろした。

「ここは見晴らしもいいし、今は無風だ。誰かに聞かれる心配もない」「今更何よ？ もう全部話したはずだけど？」

「腹を割って」と俺は言ったぜ？ どうせ俺は既にこの件に片足突っ込んだんだ。さつき、奴らに喧嘩売った時にな」

「それはッ！」

「まあ話は最後まで聞け。それから、夜は声が響く。あまり大きな声は出さないほうがいい」

その言葉で、ユーゼリアはアシユレイに詰め寄っていたのを草原に座り直した。ちらとアシユレイを見やることで話の続きを促す。

「先の襲撃で分かったと思うが、俺はそこそこ腕が立つ」

「……そこそこなんてモンじゃないわよ」

拗ねたような口ぶりに、思わず笑みを浮かべて続ける。

「それはどうも。俺の腕っ節にユリイの箔が付いたところで——ユーゼリア」

「な、なに」

真面目な声と改まった言い方に、知らずユーゼリアの背筋が伸び

る。

ニヤリ、とアシユレイの口角が吊り上がった。といっても、襲撃者に向けたようなものではない。悪戯いたずらの種明かしをする少年のような笑みだ。

「俺を護衛に雇わないか」

「……………は？」

「雇い賃は必要になった時の常識の教授と3食に宿泊費」

「へ？」

「昼寝が付けばもつといい」

「…………」

「どう？ ついでに話し相手も増える。今ならもれなくさつき稼いだ賞金がついてくるぜ。つっても、大した額じゃないけど」

「…………アツシュ」

「なんだ？」

戸惑った声を上げていたユーゼリアも、仕舞いには俯いてプルプルと震えていたが、ガバツと顔を上げると、どこか得意げな顔をするアシユレイに畳み掛けた。

「あなた何言ってるかわかっているの!? 亡国の王女についていくのよ!!?」

「お静かに、王女さま」

「ツ!! いつ来るかもわからない暗殺者の影に、夜も眠れない。来たら来たで、数で押し切られる前に早く空に逃げなくちやいけないのツ。下から花火のように上がる魔法の的になったこと、あなたはあ  
る!?!」

「それが今更なんだよ、ユリイ」

穏やかな笑みを浮かべたアシユレイは、視線をユーゼリアから藍色の空に向けた。その先には、白い点のような星と、満月より少し欠けた月が浮かんでいる。

「暗殺者の影に怯える夜も、死角からの花火の的にも、だが1人で逃げ延びてきたんだらう？ なら的が2人になればどうなる。単純に、1人に回す戦力が分散される。それにな、ユリイ」

「……」

「まだ若い女の子が、1人で4年も一人旅だ？ 却下だよ却下。まだ20にもなっていない少女が、ひとりでいろんなものを背負うな。大人を頼れ」

今日何度目だろうか。潤んだ瞳が零れ落ちそうなまでに目を真ん丸くしたユーゼリアが、無意識に握った拳に力を込めた。

「俺のことを心配してくれてありがとう。だがな、俺の意志は固いぜ。ただ……」

困惑気味にユーゼリアがアシュレイの目を見つめる。

「まあ今日会ったばかりの素性も知れない男だ。信用ならないのもまた事実。嫌なら、まあ年長者の戯言ざれごとと思ってくれ」

「そんなことツ」

「まあ本人の前じゃあ言えないわな。お前の性格じゃ」  
「……ツ」

言葉に詰まったユーゼリアに、それでいいと銀色の頭をぽんぽんと叩く。

立ち上がり、大きく伸びをすると、言った。

「まあ、一晩考えてくれ。今じゃまだ混乱してるからな。とりあえず、今は宿に行こう」

「……ええ」

歩き出したアシュレイの後ろから、ユーゼリアがゆっくりとその背を追う。

そのまま気分よく鼻歌なんぞ歌いながら頭に腕を組み、ユーゼリアの5歩先を彼女に合わせたスピードで歩いていたアシュレイだが、つと足を止めた。後頭部に手を乗せたまま後ろを振り向く。

「そーいやユリイさん。宿ってどこ？」

それに一瞬きよとしたユーゼリアも、次の瞬間には盛大に吹き出していた。

「ああもう……ほんと、締まらないわ、アツシユ。せつかくあんなシリアスな雰囲気だったのに」

「光荣だね」

ツボに入ったのか、腹を抱えてうずくまるユーゼリアが落ち着くまでのあいだ、アシユレイはひとり鼻歌を口ずさんでいた。

## 8話 「安価な珍味達」

「今日からよろしく」

「改めまして、アシユレイⅡナヴユラだ。よろしくな」

ザワザワとした食堂で、改めて握手を交わす。

ユーゼリアはアシユレイの護衛を受け入れた。翌朝共に朝食を取ったとき、開口一番にだ。

夕べ遅くまで考えていたのか、その顔には少しの疲れが見えたが、よろしくという表情は晴れやかで、正直さらなる重荷を背負わせたかと少々不安だったアシユレイはほっとした。

「呼び方とかは今ままでおりでいいからね。それから約束通り、報酬は3食と常識講座……でいいの？　ほんとに？」

「ああ。こつちから言ったことだ。…昼寝は？」

「旅は歩きよ？　言っておくけど、召喚獣なんてのも却下だからね。あれ呼び出してるあいだずっと魔力を持っていかれるんだから！」

「なら馬車を買おう」

「お金がかかるけど……でも移動も楽だし、逃げるとき速いわね。幸い貯金に余裕もあることだし……」

「それにいざというときの盾にもなる」

「うーん、今まで1人だったからなあ。必要なかったんだけど……買うかあ」

ユーゼリアは椅子を斜めに天を仰ぎながら、何か吹っ切れたようだった。コップで買った何やら赤い果汁を一気に飲むと、言った。

その顔には満面の笑みが浮かんでいる。昨日までにはなかった穏やかさと楽しそうな表情も含んだそれは、食堂にいる多くの人の視線を容易に集めるものだった。周りの男どもが息を呑むのがわかる。

「んじや、お邪魔虫が寄る前に行きましようか、お嬢さん」

「突然、何？　お邪魔虫って？」

「いーえ別に。お邪魔虫はお邪魔虫だよ」

「なんなのよ」

まあまあとユーゼリアの背を押しながら食堂を抜ける。後ろに軽



く殺気を漏らしておくことも忘れない。

美しい少女を目で追っていた男衆は、その殆どが冒険者だったにも関わらず、突如我が身を襲った悪寒に皆総じてフオークを取り落としたそうなの。そしてそれが誰がやったものなのかを見ていた女将は、ひとりで豪快に笑っていたらしい。

\*\*\*\*\*

さて、ポルスを出た2人は、とりあえずの進路を公益都市としてそこそ有名な町、シシムムへと向けていた。昨晩過ごしたあの小さな丘を越え、ヘステイ森林西部を通るルートである。シシムムに至る前に1つ小さな町があり、そこも通る予定であった。

「おや」

「どうかした？」

森に入って数時間。昼を回り、そろそろ昼食にしようかと言っていと、アシユレイが声を上げた。

「何か近づいている。速いな」

「魔物ね。ヘステイで足が速いというところ：ウルフ種かな」

ユーゼリアが言い終わるとほぼ同時、道の脇から灰色の毛並みのオオカミが出てきた。ぼたぼたと涎を垂らし、2人を前後で挟むように道に立つ。その数15。

貴族に飼われているような大型犬よりふた回りも大きいオオカミが15匹も唸る様子は、女子供や一般市民が見れば腰を抜かすこと必至。

だが、オオカミ達にとっては運が悪いことに、獲物と狙った2人の人間は、一般市民とも、普通の女ともかけ離れた力を持つ者だった。

「グレイウルフ。単体クラスE、6匹以上の群でDクラスの魔物ね」

「御説明ありがとう。物知りだな」

「6年も冒険者やってれば、知らないうちに頭に入るものよ。ちなみ

に、グレイウルフの舌は安価な珍味として知られているわ」

「なにそれ。俺食いたくない」

「激しく同意。意見があつて良かったわ。これから料理に関しての感想は一緒になりそう」

そしてアシュレイは前方の8匹、ユーゼリアは後方の7匹にそれぞれ得物を構える。

「それから、総じてウルフ種からはぎとれる素材は毛皮と牙。綺麗なままなら買取価格も上がるから、傷をあまり付けないでね」

「りよーかい」

「グワアアアッ！」

1匹のグレイウルフがアシュレイに飛びかかると同時、2人が動き出した。

「……」

アシュレイは無言のまま横に1歩。ウルフを避け、そのまま剣を斜めに振り上げ首を落とす。

続けざまにウルフ達が飛びかかってくる。

後ろに半歩下がり、空振ったウルフの頭を前方に蹴った。後ろに弾丸のような速さで吹っ飛んでいくグレイウルフは4匹のウルフを道連れにしていた。

一発の蹴りで、大型犬よりだいぶ大きいオオカミが5匹も10m後方に吹っ飛ばすその様は、明らかにアシュレイを人外と思わずに容易く、ちよつと失敗だったかなとアシュレイは内心で反省した。

難を逃れた残りの2匹は、計算外に強い獲物に向かって同時に牙を向けた。

片方は下から強烈な蹴りをお見舞いする。人外のそれで蹴られたウルフは断末魔を上げる暇なく頭蓋を潰され、天に飛ばされた。

もう片方は先ほど振り上げた剣の柄を勢いのまま下に叩きつける。ベシヤリと嫌な音を立てて地面と熱烈な接吻を交わしたグレイウルフが、再び目を開けることはなかった。

飛ばされていたウルフが、直に蹴られた1匹を残してうなつている。直撃は流石に内臓破裂か、と思いつつ、チラリと視線をユーゼリ

アに向けた。数匹のウルフに連撃され、地面を転がりながら避けている。こちらを見ている余裕はなさそうだった。

(それはそれで、拙いが……この場合は好都合か)

一瞬で10mの距離を詰める。魔物であるグレイウルフでさえ見えない速度。人間が見たら、瞬間移動をしたようにも見えたかもしれないが、実際は走っただけである。正確には、地面を「跳んだ」だが。護衛対象が若干追い詰められ気味であるのは頂けないが、こちらを見る余裕がないのはありがたい。

グレイウルフの後ろに移動したアシュレイは、目標を見失い、だがおいで分かったのだろう、後ろを向こうとするウルフ達の首に迷いなく剣を突き立てた。

その頃、ユーゼリアはその見事な杖術でウルフ達1匹1匹捌いていた。身の丈の半分はあるだろう長い杖は、嵐のような風をまとっている。

ヴウンとという鈍い唸りと共に荒れ狂う嵐を纏ったその杖は、グレイウルフという下級の魔物を一撃の後に葬り去るのに有り余る力を有していた。

「ギャンツ」

転がったウルフの眉間は明らかに窪み、脳を突き破られた魔物は脳漿を撒き散らしながら倒れることしかできない。

まだピクピクと四肢を痙攣させている仲間を踏み台に、飛びかかってきたウルフを前に前転して避け、振り向きざま杖を横に薙ぐ。決して良いとは言えない感触と共に、ウルフの首は折れた。纏った風でその毛皮が傷つき赤く染まった。

無意識に顔を歪めながらも、背後からくる2匹を横に飛び退き避ける。

2匹の追撃をまた避けるに避け、1匹が口を大きく開けた瞬間、後ろに飛び退きながらその口に杖の宝玉部分を突っ込んだ。ガチンと牙が硬いものを噛んだ音がする。

左のウルフはユーゼリアの柔らかい喉笛に狙いを定め、後ろ足に力を込めている。

「フレイム」

一言。

次の瞬間、杖を加えたグレイウルフの体が火に包まれた。

「ガアアア!!」

目にも止まらぬ速さで杖を放り出したウルフはなんとか身を包む日から逃れようと地面を転げ回るが、毛皮が丈夫なばかりにウルフは火達磨になって尚その強靱な生命の火を苦痛と共に燃え上がらせた。

解放された杖は、半透明の宝玉が魔法の余韻が僅かに赤く染まり揺らめいている。

もう片方は先日也使ったあの籠手を噛ませその隙に詠唱。

「【出でよ風刃】ッ」

杖の宝玉が今度は緑に染まる。

と同時に、宝玉から風の刃が飛ばされた。螺旋を描くそれはウルフの顔面に炸裂し、その顔を切り刻む。悲鳴を上げたウルフは、ようやく自分の危機に気づき撤退しようと足を向ける。

逃げようとしたウルフは4匹。しかし、

「逃がさないわよ。【連なれ疾風】！」

風刃が一度に3連射された。すべてが足を狙っており、命中した3匹のグレイウルフは転んだ瞬間また風刃の追撃を受け、地面に倒れ込んだ。

そして足への攻撃を免れた1匹が森に入る直前。

その背に、嵐を纏った杖が突き刺さった。

「よし」

小さくガッツポーズをとったユーゼリアが、得意気な顔をして振り向くと――

「油断大敵」

肩を押されてよろめく。と同時に、

「ガアアア!!」

あの火達磨と化したウルフが首を寸断された。

青色の血が、ユーゼリアが立っていた場所めがけて吹き上がる。

「あ、ありがとう」

「ん。やっぱり近接は苦手だね。次からは俺が前で、ユリイは後方支援の方がよくないか？」

「でも、それじゃアッシュユが…」

「俺の心配はいいの。杖術は俺はよく知らないけど、近接戦闘に慣れたいなら俺が練習台になるから」

「うー……」

言おうと思ったことを先回りされ、思わず唸るユーゼリア。

「これは護衛としてのお願いでもある。俺が護衛をするからには、ユリイには毛一筋でも傷を受けて欲しくないからな」

「……」

思わず顔が赤くなるのを、ユーゼリアは抑えられそうになかった。

咄嗟にうつむき、深呼吸を数回。怪訝そうに首を傾げるアッシュレイへ向き直ると、自分のバッグから取り出した刃渡り30cm程のナイフを押し付けた。

「素材剥ぎ取り用のナイフ。私の予備だけど、渡しておくわ。これで毛皮とか牙とか剥いできて頂戴」

「なんか言ってることが怖いな」

ぶつぶつ言いながら自分が倒したウルフの死体へと歩いていくアッシュレイを、なんとなく目で追って、ユーゼリアははたと気づいた。

彼が向かっていているウルフたちが、皆一撃で屠られている。数匹は打撃系でやられたようだが、基本アッシュレイはグレイウルフの首を切り落としている。

6年間で血生臭い戦いに慣れているはずのユーゼリアでも、そうそうお目にかかれない光景だ。よほど剣の質がいいのか、アッシュレイが並々ならぬ腕前なのか、それとも、その両方か。

(……考えるまでも無いわね)

その両方だ。

10匹には満たなかったとは言え、8匹のグレイウルフを帰り血も浴びず、自身も少しの怪我もなく、首を落とす。クラスDを超えるそれを軽く行い、なおかつ息をかけらも乱さないアッシュレイは、一体どれほどの強さなのだろう。

そういえば、このグレイウルフ達の気配に気づいたのも、アシユレイが先だった。

自身もウルフの牙をナイフで少しずつ切りながら、ふとため息をつく。

“アシユレイ||ナヴユラ”という人物が、いったいどういう男なのか、わからなかった。

## 9話 「魔力過多症」

「とりあえず、血の臭いに他の獣がやってくる前に退散するわよ」

ユーゼリアの言で、2人は剥ぎ取った素材をそれぞれのバッグに入れると、そそくさとその場を立ち去った。

アシュレイが最後の素材をバッグに放り込むとき、数頭の「なにか」が2人のもとに向かっているのを感じたので、ちょうど良いタイミングだったと言える。

「血がついたままだったけど、いいのか？」

「ええ。バッグに入れておけばね。腐ったりとか、そういう問題は気にしなくていいのよ。事前に入れておいた毛布とかに血がついちやうこともないから、安心して」

「ならよかった」

今更血臭などに嫌悪感はないが、それでも好き好んで血みどろの毛布に包まれたとは思わない。

嘗ての同輩の中には、好き好んで血みどろの生肉を主食にしていた輩もいたが、やはり彼はマイノリティだった。ちなみに、彼の同志はまだ遣い魔になったばかりの魔獣上がりどもである。

(そういえば、奴の好みの肉は、魔力の高い若い女性の肉だったな)

奴曰く、処女だと尚良いらしい。

あれから1000年たったが、まだ生きているだろうか。

前を軽やかに歩く銀髪の少女を見る。彼女は人間で見れば驚く程の魔力を有していた。ざっと3倍はあるだろう。よくこれだけの若さでこの量の魔力を暴走させずに制御しているものだ。

普通、身に余る魔力は——特に、それが幼い子供だったりすると、自力で押さえ込むことができず、それをそのまま力の奔流として外に解き放ってしまう。それは花瓶や皿、窓ガラス程度ならヒビが入ったり、最悪碎け散ることもある。

ところが、ユーゼリアは実に上手く魔力を抑えていた。微塵も外に滲み出していない。昨日は単に魔力が無くなったからかと思っていたが、どうやら違うらしい。

(……ま、1000年も経てば変わっているだろう)

それに、この広い大陸の中、ピンポイントでユーゼリアに狙いが定められるなんて、そうそうない。

そうこうするうちに、川の音がし始めた。

ユーゼリアが少し道を外れると、そう遠くないところに小川が流れていた。魚の影も見られる。川底の景色が綺麗に見えるほど澄んだ水だった。昨日の神殿の泉を思い出す。

「お昼にしましよ」

そう言つて、ユーゼリアはバッグから携帯食を取り出す。アシュレイもそれに習つて自分の分の食料を取り出した。

小さい鍋とスタンドをまた自身のバッグから取り出す。鍋に川の水を入れると、ユーゼリアは杖をスタンドの下に入れた。

「フレイム」

グレイウルフを火達磨にした先ほどよりも威力は大分抑えて、宝玉から火が出た。

「……便利だな」

アシュレイがやろうとすると、鍋ごと燃えるだろう。人間は魔力の総量が少ないため、そういう——つまり遣い魔達の間接からすると、「みみっちい」——作業ができることが、「便利」だ。そう言う意味で言つた言葉だが、ユーゼリアには「魔法」の存在を忘れたアシュレイが、「魔法の存在と使い道」という意味で「便利」と言つたと勘違いし、やや得意げにした。

「ふふ、そうでしょ？ アッシュはスープ飲む？」

粉末状のスープの素をコップに入れると、鍋からお湯を注いだ。

「はい」

「ども。……あつづ!!」

「あ、熱かった？ ごめん……て、あれ？ そんなに熱い？」

川に顔面ごと突っ込んでいるアシュレイに、不思議そうに声をかけた。熱いには熱いが、そんなのたうちまわるほどではない。

その「のたうち回っていた彼」は顔を水面から上げると、恨めしげに言つた。



「…俺、猫舌なんだよ」

「……………アツシユが？」

「なぜそんなに意外そうな顔をする！」

俺にだって苦手なものくらいある。

無然とした顔で言うアシュレイに、ユーゼリアはいい繕った。

「なんかアツシユってなんでも出来そうな気がするんだもの」

「情けなくて悪かったな」

「もう、そんなのじゃないってば」

ぶすつと言い返すと、アシュレイはちびちびとスープを飲み始めた。

相変わらず熱い…が、旨い。簡易食にありがちなしょっぱすぎる味でもなく、寧ろ野菜の甘みが引き立てられている。

「……………旨いな」

「え、ほんと？ 嬉しい。それ私が作ったのよ」

「ほう。器用なもんだ。しょっぱすぎなくて美味しいよ。どうやるんだ？」

「ふふー。それは企業秘密である」

アシュレイの気を悪くしたかとおろおろしていたユーゼリアだが、その言葉に気分を良くし、鼻高々に胸を張る。案外あっさり引き下がったアシュレイに、もしや自分の気をそらすために言ったのかと少々不安になったユーゼリアだが、少しずつではあるがひと口ひと口を本当に美味そうに啜るアシュレイを見ると、まあいいかと笑みを浮かべた。

(思惑通りになるのは癪だけど、いいわ。今回は乗せられてあげる)  
アシュレイが何を思っさっきの台詞を言ったか知らないが、それを聞いてユーゼリアが嬉しくなったのに間違いはなかった。

「じゃ、さっきの素材出して。洗いましょう」

「洗う？」

「ギルドの受付嬢の身にもなってみなさいよ。血みどろの毛皮なんて、いくら仕事でもできたら触りたくないでしょ？ それに臭うしね。だから洗うのがマナーよ。まあ、たまにそのマナーの悪い冒険者

もいるけど」

「ギルドに渡すのか」

「フブリークエスト」っていつてね、特に掲示板に張り出したりはしないけど、殆どの魔物の素材はギルドが買い取ってくれるの。ま、グレイウルフなんかはどれも大した額にはならないだろうけど。弱いし」

「なるほど」

川で地を洗い流してから、バッグにまた放り込む。

その後も他愛ない話をしながら食事を終え、道に戻って森を進んだ。

「……そろそろ暗くなってきたわね。もう少し進んだところにキャンプ地があるから、そこまでいきましょ」

「キャンプ地？」

「1日じゃ抜けられないような森とかには大抵あるの。といっても、そんな大層なものじゃなくて、ちよつと見晴らしがいいように木とかが伐採されてるだけなんだけど」

「へえ」

言われるまま歩き続けると、突然広場のようなスペースに出た。確かにここの方が魔物への警戒がし易いだろう。

他に今日キャンプ地で泊まる旅人はいないようなので、円形に整えられたその中心に火を熾した。火の番は交代で行う。

「じゃ、この水時計が10回ひっくり返ったら交代ね。お先に、おやすみ」

「おやすみ。いい夢を」

「……あ、ありがとう」

狼狽しながら毛布にくるまって横になったユーゼリアと、焚火を挟んで座った。足元にはポタポタと中でゆっくり水が垂れている水時計がある。

なんともなしにそれを眺めながら、天を見上げた。ここだけ木が周りにないので、星が驚く程たくさん見える。多分、焚火を消したらもつと沢山あるのだろう。

「はあ……」

ゆつくりと、息を吐いた。

見上げた天は、1000年前とまったく変わらずに瞬いていた。

\*\*\*\*\*

パチパチと火が爆ぜる音が響く以外、その場には静寂が落ちていた。

いや、ひとつ音——声がしている。

「…すう…すう…ふふー」

一体どんな夢を見ているのか、時折笑みを浮かべるユーゼリアの寝顔を見て、アシュレイは微笑んだ。

そのまま自身の手のひらを見つめる。

(もう、溜まってきているな)

彼の目には、渦巻く魔力が今にも自身の制御を外れて、手のひらから外へ流出してしまいうそうに見えた。”狭間”にいた影響だろうか。そろそろ猶予はない。

”魔力過多症”

アシュレイが生まれてからずっと付き合い続けている病の名だ。これは彼に限ったものではなく、少数だが人間やエルフなどの亜人も現れる症状である。

保有する魔力が、肉体の限界量を超えて、暴走する。暴走すれば、まづ間違いなく患者は死に、それと共に周りへの被害も相当なものになる。

もともと人体というのは、魔力のもとである魔素を空気中から取り込み、体内で魔力として生成する器官を持っている。それは魔法を使ってもしばらくすればまた減った魔力がもとに戻ることも分かるだろう。

ユーゼリアが、昨日あれだけへろへろになっていたのに、一晩寝た今日、全開とは言えないものの、ほぼ魔力が戻ったことから言える。通常、減った魔力の分だけ体は必要な魔素を取り込み、満杯になったら無意識に取り込みを止める。

ところが、それを止められない個体が稀に存在する。

必要な魔力は既に十分あるが、体がそれに気づかないのである。そしてどんどん魔素を取り込み、ついには体に抑えこめる魔力量の限界を超える。

体中が裂け、血と共に解き放たれた魔力が暴風となって放出される。そこらの竜巻よりも凄まじい魔のうねりである。

それが”魔力過多症”であった。

アシュレイは魔人ノアに一から作られた”人間”である。その脆弱な体で遣い魔としての力量を備える為、様々な改造を施された。そのうちの1つが、人為的な”魔力過多”である。

この病は魔法では治らない。外傷はないからだ。だが、魔法の力に頼り、医療技術の進歩が滞っている今、それを根本から治す薬は見つかっていなかった。

よって、魔力飽和による爆発を防ぐ手立ては1つ。

先延ばしではあるが、原始的故に速効性もある方法である、”魔力放出”。

つまり何なのかというと、魔法を使いまくり、体内にある魔力を減らせばいいじゃないかということである。

当然アシュレイもまだ遣い魔だった頃から、週に一度くらい戦術級（最上級の更の上）の魔法をそこらに打っていた。一般には月に一度、下級魔法を打てば十分なのだが、そこは他にもいろいろと文字通り魔改造をされている身、月に一度では足りないのである。

再びユーゼリアに視線を向ける。安心しきった顔で寝ている彼女をみると、ここで巨大な魔力をぶっ放すのには躊躇する。

一般人や新米剣士ならともかく、魔道士は魔力の動きに敏感なのだ。

周りに魔物がないのを確認してからゆっくりと立ち上がり、足

音をたてずに森の中へと歩いてゆく。

しばらく歩いてから、小さく声を出した。

「風よ我が身を運べ」

直後、小さな竜巻がアシュレイを呑み込む。竜巻が収まる頃には、その場には注意しないと分からない程の僅かな魔力の残照しか残っていないかった。

風属性最上級魔法のひとつ、いわゆる”瞬間移動”である。

最上級だけあってこれだけでも大分魔力を削りとってくれるが、まだまだ足りない。

キャンプ地からは1キロほど離れた森に移動したアシュレイは、空に狙いを定め、少しの逡巡の後に水属性戦術級魔法を放った。

「白魔の女神」

キ——ン……

瞬間、耳鳴りがするような静寂に包まれる。生命の鼓動も、皆時をわすれたかのように、動きを止めた。

スウつと、大気が冷たくなる。

ピシ……ピシツ……

溜まった水が桶から少しずつ筋になって零れるように、何かかひび割れるような音が、妙に大きく響く。

そして、それ……は爆発するように起こった。

ピシ……バキバキバキ!!

数秒とたたずに、狙った空から雹が降る。空気中の水分が凝固したものだ。

間をおかずに、今度は狙った点の真下から、木が凍りついていった。そのままバキバキと音をたてながら、その冷気の塊は円形に広がってゆく。

木も、草も、寝ていたグレイウルフも。

中心の点から半径約200mの球状。その中にあった全ての”水”は、凍りつき、氷像と化した。

ビュウウウウウ!

凄まじい風が吹き荒れる。

体から魔力が減るのを感じ、ほつと息をついた。魔力が充満してくると体中が熱くなり、何もしないでも疲れるのだ。

風が止んでから一步を踏み出す。氷の草を踏みしめると、硝子が割れるような音をたてて砕け散った。

「……寒いな」

満足げながらも小さく身震いし、早くこの場から立ち去ろうと早口に呪文詠唱をする。

「風よ我が身を運べ」

気温はマイナス20℃。

5日後、未だに氷が溶けないこの場所が発見され、ポルス他近くの町、村で怪奇現象と良い景観から観光ツアーが計画されるのは、また別の話である。

## 10話「けもの」

翌日、2人はポルスと交易都市シシームの間にある小さな町について。森の中でやや開かれた平地にあるこぢんまりとした町だ。

「とりあえず食料の補充と、あと、グレイウルフの素材を売りましょ」  
「はいよ」

ギルドはポルスよりも小さかった。むしろ、ぱっと見ではただの一軒家だ。人伝に聞かないと、また家の前の看板がないと、まず分からないだろう。

扉をくぐると、ちょうどカウンターからローブをすっぽりとかぶった冒険者とすれ違った。濃い茶色のローブで、中が男性か女性かすらわからない長い長い裾だ。ちらりと覗いた前髪は、薄めの浅葱色だった。

(この魔力は…)

「ようこそ、冒険者ギルドへ！」

思考が傾いたとき、笑顔の可愛い受付嬢が出迎える。流れのまま鑑定を依頼すると、グレイウルフの毛皮はここまで綺麗に断られたものは滅多にないと誉められた。

「血も綺麗に洗ってあるし、これ15枚で7500リールで買い取らせていただきますね。牙の方は…んー、これとこれ、あとこの3つはヒビが入っているので、除外させていただきます。で、牙が…1350リールなので計8850リールです」

毛皮1枚500リールとは、グレイウルフの毛皮としてはとても高額らしい。

アシユレイとユーゼリアは事前に、これから報酬は自分が狩った分のものを貰うと決めていたので、迷うことなくそれぞれの分け前をギルドカードに入れた。

「じゃ、何かめぼしい依頼がないか、見てみましょうか」

「2人で一緒にするのか?」

「ううん、アツシユには今度は採取に行つてほしいの。冒険者として、いつ何時どの薬草が必要になるか分からないから、その練習。私はその間、町で食料調達をしてくるわ」

「……なるほど、分かった」

少しの間顎に手を当て考え、アシュレイは了承の意を述べた。ユーゼリアをひとりにしていいかどうか、悩んだのだろう。

「んじゃ……どれにしようかな。このバルバズのはちみつとかは？」

「いいんじゃないかしら。バルバズは何かは……わからないわね。その名の通り、バルという木に好んで巣をつくる巨大な蜂よ。体長は大体1メートルで、尾にある鋭い針からは麻痺毒が出されるの。刺さったら3分後にはもう動けなくなってるわ。それにDクラスの魔物にしては動きも素早いから、冒険者たちの最初の難敵ってところかしら。ま、一撃必殺の武器は持ってないから、滅多なことじゃ死にはしないわ」

「ふむふむ。つまり、避けるってことだろ。じゃ、これでいいや。場所もヘステイだし。来た道をちよつと戻ればいいんだな？」

溜まるギルドポイントは50。手にギルドから支給された規定量の瓶をぶら下げて、意気揚々とユーゼリアに別れを告げた。

散歩に行くかのような気軽さで森に消えていったアシュレイを見送り、ユーゼリアは苦笑した。

(……アッシュユって、なんだか猫みたい)

ふつと現れたと思えば、気がついていたら一緒に旅をしている。かといつてずっとひつついているわけでもなく、今みたいにふらりと離れていく。

まるで気まぐれな、猫のようだと、ユーゼリアは思った。

「今度はちよつとくらい美味しいご飯を食べさせてあげたいな」

ここから交易都市シシムまでは、昨日のスピードで大体2日半。途中また川もあるだろうし、なら多少贅沢をしても大丈夫だ。貯めた貯金を少しくらい切り崩しても問題ない。もともと使い道などなかったのだから。

「……ふふー」

いいことを考えたと、スキップをしそうな勢いで市場までゆく。

お花のオーラを撒き散らしながら嬉しそうに笑みを浮かべ、バスケット片手に食材を買う姿に魅了された店員(主に男性)から次々と



おまけを貰ったのは、言うまでもない。

\*\*\*\*\*

バルバズという巨大蜂の蜜をとりに来たアシユレイは、途方に暮れていた。

「……………そういや、バルの木ってどんなのか、聞きそびれたな」

意味もなく瓶をぶらぶらさせてあてどなく歩き続けると、ふとアシユレイの耳が、小さな音を拾い上げた。

ヴヴ…ヴヴヴヴ

昆虫の羽音のような音だ。方角はポルスよりやや北、距離は600mといったところか。

瓶を上になく軽く放り投げ、バッグにいれる。音をたてないように気をつけながら走り始めた。

ストツと太い木の枝に足をつく。そのまま枝から枝へと飛び移った。気配を沈黙させ、音という音は全て殺す。足だけでなく手も使って、4本の足としているかのようにだった。

その動きは、完全に人間とは思えないものだった。  
しなやかで無駄がなく、なめらか。

それはまるで、獲物を追う獣のような――。

ヴヴヴ…ヴヴヴヴ

耳を塞ぎたくなるような無数の羽音。

「……………これか」

気配を表し、足を止めたアシユレイが見下ろす先には、上の方が完全に包まれた、赤っぽい木がある。

丸い巣のまわりでは、先程からアシユレイを警戒するようにバルバズたちが飛び交っている。攻撃してこないのは警戒心が強いだけ

なのだろう。必殺となるような攻撃もないとユーゼリアも言っていた。

(……ならば、威嚇してみるか)

黒の双眸を鋭くする。

そして、その喉から出たものは——うなり声。

ピタリ。

羽音が、止まった。

「グルルルルル……」

ふと、日が陰る。

辺りに一瞬落ちた静寂。

影に佇むその瞳は、

金色に輝いていた。

ヴヴヴヴヴヴヴ!

巨大蜂が、一斉に逃げ出した。

目を黒に戻したアシュレイが満足げに巣へ向かおうとしたとき、辺りに耳障りな音が響き渡った。

ギチギチギチギチ!

アシュレイにはそれが何を言っているのかは分からない。だが、すぐにそれは知れる。

逃げた筈のバルバズが一斉に飛びかかったのだ。

溜め息をつき、アシュレイは魔法を放った。

「吹き荒れよ矢の嵐!」

次の瞬間、彼に迫っていた全てのバルバズは赤い塵と化す。風属性上級魔法である。魔法の矢を多数、任意の的に発射させる高等魔法

だ。

(これだから脳筋は……。女王蜂がこれじゃ駄目だろう。いや、むしろ仕方ない……か?)

女王蜂は、何が起ころうともその場から離れてはいけない。卵を置いて逃げ行くことはないのだ。故に己の息子達に命令をして、侵入者を襲う。それしかししない——できない女王蜂が、アシユレイはなんだから哀れだった。

数で押してきた巨大蜂全てを駆除すると、静かになる。目の前にこれほど大きな蜂の巣があるのにも関わらず、風に揺れる木々の音しかないのは、妙に思えた。

「さて、と」

枝に飛び乗り、巣の一部を剣で切り取った。瓶を取り出して、ところと溢れる黄金色のはちみつを入れる。少し考えてから、切り取った巣のかけらも中に入れた。

「ふむ。なかなか見栄えがするじゃないか」

満足げに瓶を眺める。

先程から巣の中からギチギチと音が聞こえるが、黙殺した。多分中では一生懸命女王蜂が卵を産んでいるのだろう。

(この手の魔物は2〜3時間で孵化するからな…撤退つと)

また音もなく地面に飛び降りると、今度は走らずにゆっくりと歩き始める。その足は迷うことなく町の方を向いていた。

\*\*\*\*\*

「あ、巣の欠片もありますね。じゃあこれは別な素材として換算しますね。このサイズだと、6000リールになります」

紙面に何かをさらさらと書き込みながら、受付嬢が慣れた手つきで素材の鑑定をする。

「にしても、仕事早いですね。まだF—なのに……あ、失礼しました。

もしかして、ギルド登録する前に何かしてらっしゃいました？」

「ん、まあ…な。かれこれ5年やってた」

「え、あなたの年齢で5年、ですか？ なんだろうー」

「楽しみに頬に指をあてながら考える素振りを見せる。」

「そういうえば、依頼受けにいらっしやった時、滅茶苦茶美人な女性と一緒にでしたよね！ 恋人ですか!？」

苦笑していると、別のカウンターから先輩と思われる受付嬢が声をかけた。

「こら、あんたまた仕事サボって！ 人の過去を聞くなんて失礼でしょー！」

「えー」

「”えー”じゃない！ 申し訳ありません。この子、去年からこの仕事してるんですけど、仕事は早いのにサボり癖とお喋りが凄くて。何度も言ってる聞かせているのですが…」

「ああ、いや、構わないよ。…君、名前は？」

怒られてしゅんとなっていた受付嬢が、顔を上げる。

「あ、メリアといます」

先輩の方にも目で催促すると、彼女はサラと名乗った。

「そうか。…メリア、俺は気にしない質たちだから問題ないが、聞くなから相手を見て聞かないとメリアが危ないぞ。面倒なことに巻き込まれたり、な」

「…あ、はい。申し訳ありませんでした」

少しの間ぼけっとしていたが、サラに肘でつつかれるとハツとして返事をした。

「ただ——…」

「”ただ”？」

続きを急かすメリアに、微笑を浮かべながら言った。

「俺はそういう人懐っこいところは長所だと思ってるよ。こと、自分がそういうのとは無縁だからな。…ひどく、人間らしい」

最後の言葉は、メリアとサラの耳には届かなかった。

“人懐っこい”という性格は、魔人社会の中ではありえないもの

だった。

魔人は、孤高の存在である。

皆総じて矜持が高く、自らにまわりに置くものは、侍る遣い魔だけ。そんな彼らは、自らの周りに「他人」がいることを厭う。それが例え、自らの兄妹だったとしても。

魔人と魔人が接触でもすれば、まず間違いなくその地はすべてが無に帰す。互いに強大な力を持っているがゆえに。

よって、彼らは数人で生活をしている。といっても、魔人はただ起きて、食べて、遊んで、寝るの繰り返しだ。

魔人は、無駄なことを嫌う種族だった。

だから、「世間話」なんて代物は、魔人にとっては単なる雑音にしかない。いらぬ話は彼らを不快にさせ、話をした者達など一瞬で殺されるのがオチである。

それは遣い魔なら皆生まれながらに知っていることなので、魔人の前でそんな無様なことをすることはない。そしてだんだん、遣い魔も話をする相手聞く相手を限るようになる。

つまり、主人或いは自分にとって、必要な情報のみを選別して生きていくのだ。

ゆえに、アシユレイは、人間が生活する上での、その他人と他人の距離の近さに、ひどく違和感を覚える。

なぜ人間は許可もしていないのに、勝手に自分の領域の中に土足で踏み込んでくる？

なぜ人間は接点も何もない他人にそれほど興味を持つ？

なぜ、人間は不自由で生きにくいであろうに、他社と集団で行動し、生活をする？

そしてそれを——”何故人間は”と考えること自体が、アシユレイが人間ではないことを物語っていた。

最早自分は主人に捨てられた身。ならば、このままユーゼリアについて少しずつ人間として生きてゆくしかない。そう思っていた矢先

に突きつけられた。” どうあつたとしても「遣い魔」である” という事実。

人間になりきれないことには、この世界で生きて行くには厳しいだろうか――。

「それから、同伴していた彼女は、言ってみれば師弟関係だ。俺が弟子だな。俺の前の仕事は、ある方の道具となることだよ。……鑑定ありがとう。じゃあな」

言外に”これ以上聞くな”という牽制をかけ、出口へと向かう。ユーゼリアとは、討伐に出る際に落ち合い場所を決めていた。壁にかけてある時計を見やる。時間はちようどいい。

僅かに軋む扉をあけて、時計台の下へと歩き出した。

アシユレイが去ったギルドにて。

「……サラ先輩」

「なに？」

「私、聞いちやいけないこと、聞きました……？」

誰もいなくなつたギルドの中で、手元に視線をおろしながら尋ねる可愛い後輩の頭を撫でると、明るい声でサラは言った。

「そんなことないわよ。良かったわね、長所だつて褒められて」

「……そうですね！ ていうかあの人かつこよくありませんでした!？」

あんまり見ない黒髪とか、『ある方の道具となることだ』……とか！ 影があるイケメンとか、ちよ、どストライクなんですけど!!」

「前言撤回。あんたやっぱりしばらくしよんぼりしてなさい。うるさい」

「もうあの人行つちやうのかなあ。うちの実家の料理屋紹介したかつたなあ」

「うるさいっての」

こんな会話が繰り返されていたことを、アシユレイは知らない。

\*\*\*\*\*

「良かった、無事に終わったみたいね」

「ああ…」

「私の方もね、食材たくさん買ったわ。色の良い野菜が一杯あって—」

「……」

「—それからね、凄く美味しそうに熟れてる果物があつたから、買い込んだ。私の知らない旬の果物もたくさんあってね、店員さんがおまけに1つくれたの」

「そこまで一気に喋り終わって初めて、薄い反応しかしないアシユレイの異変に気づいたようだった。」

「アツシュユ? どうかした? …もしかして今更バルバズの麻痺毒が効いて—!?!」

「いや、違う」

顔を真っ青にしてバッグから麻痺回復薬を出そうとするユーゼリアを、逆にアシユレイが慌てて止めた。

心配そうにアシユレイの顔を見やるユーゼリアに苦笑をし、宿に向けて歩き出す。目星は既にユーゼリアがつけていた。

若干の不満顔を無視して歩き続けると、ふと、思いがけず言葉が口をついた。

「ユレイが」

「え?」

心の中で言ったつもりだったアシユレイも少し驚いていたのだが、今更引っこめるわけもなく、仕方なく—その割には彼自身気づかず静かな熱が籠もっていたが—続きを口にした。

「ユレイが、例えばただの農民の次女だったとして、もし隣に住んでいた何の変哲もない隣人がヒトの皮を被った化け物だったと知ったら……どうする?」

「なに、急に？」

「いいから。例え話さ」

不思議そうな顔をしつつ手を顎にあて、足は止めずに考えこむ姿勢をとりながら、ユーゼリアは言った。

「そうねえ、やっぱり怖いけど、今まで仲良くしていた普通の隣人だと思っただら……」

「いたら？」

「あなたは私達の敵ですか」あなたに私達を殺す気はありますか”って聞くわ。それで敵意がないなら、今まで通り接する……かなあ？ 実際そういう状況になってみないとわからないけど」

その答えに、アシュレイは自身がいくらかほっとしたこと気づいた。

「…そう、か。変なことを聞いてすまなかつた」

「いえ、別に？」

謝ると、先ほどより軽い足取りで宿へと向かう。

「……やっぱり猫みたい」

気ままなアシュレイの見えない行動に首を傾けながらも、とりあえずその背を小走りで追いかける。

ところが、思いの外彼の足が速く、なかなか追いつかない。

ユーゼリアは、アシュレイの背に誰かが重なって見えた。

「コ…アツシユ！ 待って…置いていかないで！」

「ん？」

無心で歩いていたアシュレイは、必死な声に足を止めた。ヒステリックな叫びに、周りの町民もユーゼリアを見やる。

「…はあ…はあ。や、宿の位置を知ってるのは私なんだからね。次を左に曲がるわ」

「悪かった。ちよつと速かったな」

精神的なものと肉体的な疲労にゼエゼエと息を荒くするユーゼリアにアシュレイは声をかけた。



並んで歩き始めると、ぽつりとユーゼリアが口を開いた。

「アツシユは…」

「ん？」

それきり押し黙ったユーゼリアに、前を向いたままアシユレイは言った。

「置いていかないよ」

「ッ」

ハツとこちらを見上げてくるユーゼリアにちらりと視線を送ると、再び前を向いて言った。

「独りにはしない」

ユーゼリアはうつむいていた。涙を浮かべたまま下を向き、先ほどの恐怖に、その華奢な肩を震わせる。

ぽんぽん

ユーゼリアの頭に、大きな手のひらが乗った。

（あたたかい…）

そのぬくもりを、手放したくない。

前を向いたまま、アシユレイはもう一度言った。

「独りには、しないから」

## 11話 「グラウンドウルフ戦」

それは日が傾き始めたころだった。アッシュレイは無言でむくりと起き上がった。

(……来る)

魔物の群だ。

もう今日は何もする予定はないので、2部屋を取ったあとは2人も部屋でゴロゴロとしていたのだが、そうもいかなかったらしい。

すぐにユーゼリアに知らせようとして、ふと思い留まる。

(普通人間にこの距離から魔物の感知なんてできるか?)

答えは否。

アッシュレイが察したのは、町の外周より更に200m以上遠くである。他には目もくれず町へ一直線に向かってきていた。200m程度ならば町の遠見もすぐに気づくだろう。

(警告が来てからの方が、良いか)

人が周りにいる時は力を制限しよう決めていた。事実あのグレイウルフ戦でも力はセーブしたつもりだったが、比較対象がユーゼリアの杖術だった為、あまり分かっていない。彼女のランクはB+だが、それは召喚魔道士としてであって、近接ではないからだ。

まもなく、町に大きな鐘の音が響き渡った。何度も何度も続けて鳴り、拡声魔法による警告が告げられた。

『町より西南西方向に魔物の群を発見。繰り返します。西南西方向に魔物の群を発見。警備兵及び町に滞在中の冒険者は至急西門前広場に集合せよ。町民は落ち着いて屋内に待機してください。繰り返します。町より西南西方向に――』

バンツ

「――アッシュユ！」

「ああ、行こう」

勢いよく扉が開かれ、ユーゼリアがローブに杖を装備して叫んだ。

チン、と小気味良い音をたてて剣を腰に差す。

階段を駆け下りて西門前広場へと向かう。途中数人の冒険者ら

しき人影が、同じく広場の方へと走っていた。

「以上、解散！」

そこではもう説明は終わったようだった。ユーゼリアが解散と言っていた人物に話しかける。

「すみません、冒険者の者です。説明お願いします」

「ああ、やっと来てくれたか。西門方向から魔物の群だ。遠見がいうには、グレイハウンドの群と、奴らを率いるグランドウルフが1匹。グレイハウンドは20匹もいるような大群らしい。正直、ここにいる警備兵達だけでは厳しい。手伝ってくれないか」

「もちろん。そのつもりで来たわ」

その後、他の冒険者達が質問や作戦を話し合っているうちにユーゼリアに聞いた。

グレイハウンドはグレイウルフの上位の魔物で、より強靱な毛皮や牙を備えもつ。単体でDクラス、6匹以上の群の場合Cクラスとなるらしい。それが今は20匹。小さな町の警備兵達だけでは荷が重い。

それに加え、グランドウルフは単体Bクラスの大物だった。

（果たしてBクラスになれば、俺が『隠れた同族』だということに気づくかな）

アシュレイがそんなことを考えていると、ひとりの大柄な冒険者がアシュレイ達の元に寄ってきた。彼の後ろには30過ぎと思われる長剣を差した男と、先ほどギルドで見たローブの冒険者がいた。

「お前ら、ランクと武器を教えてください」

槍を担いだ、如何にも屈強そうな男だ。浅黒い肌には過去の消えきらなかった傷痕がいくつも見えた。

「俺は槍使いのガーク、Bランカー。そこのが今パーティを組んでる、剣士C＋ランカーのアズルと、魔道士Bーランカーのクオリだ。クオリは回復魔法も使える。ちょうど3人であのグランドウルフの討伐に来ていたところだ。Bクラスの魔物だからな。まあ、魔獣じゃないのが救いなんだが」

「そうね。魔獣と魔物じゃ相手の仕方が違うもの。よろしく、私はユーゼリア。B＋の召喚魔道士」

「ユーゼリア…って、あんた【孤高】か！ こいつは心強い。そっこの顔の良い兄あんちゃんは？」

「彼はアシュレイ。訳あって今一緒に旅をしているの。剣士でまだF—だけど、実力はC以上なのは確かよ」

「おいおい、まだこんなに若い。剣士」が実力C以上？ そりゃ流石に冗談キツイぜ、【孤高】さんよ。魔道士じゃあるめエに」

後に聞くには、魔力の量と才能でもものが決まる魔道士なら兎も角、剣士などの自分の腕で戦う近接系は才能も必要だが、余程の天才でない限りは、何より経験が大切なんだとか。

故に、ランクC以上の近衛職は年齢も上の方が多く、30歳前でBやAランクになっているのは珍しいらしい。

「だが…」

ガークが続けた。ニヤリとアシュレイに笑いかけながら言う。

「【孤高】が太鼓判を押すなら、いいだろう。Cランカーとして扱うぞ。

…本当にだな？」

「ええ。もちろん」

「カツ！ 随分信頼されてんなア！ え？ 兄ちゃんよお！」

ドストドス肘鉄を喰らわせながら、耳に顔を近づけて早口に言った。

「だが俺は完全に信用したわけじゃ無エからな。悪いが一番キツイ役を回させてもらうぜ」

「構わない。死ぬつもりはないからな」

その言葉に驚いたような顔をしながらも、豪快に笑いつつバシバシと肩を叩いた。

「ガハハ！ 死ぬなよ、アシュレイ！ 前途ある若者ンよ！」

苦笑を返しつつ西門の外へと向かう。

アシュレイの担当は、グラントウルフ。ユーゼリアが召喚をするまでの間、時間稼ぎをすることだった。ガーク、アズル、クオリの3人は、グレイハウンドの掃討を担当する。終わり次第援護に来るらしい。

これは確かに難しい、とアシュレイは腕を組む。

(手加減の仕方の良い練習になるかな)

目視できる程まで近づいたオオカミ共を見て、そう思った。

\*\*\*\*\*

「囮ですって!?! アツシユを!!?!」

凄まじい剣幕でユーゼリアはガークに詰め寄った。彼女の豹変ぶりにガークはたじたじになりつつも言う。

「お、囮じゃねえって。『足止め』——」

「同じことでしょう!?!」

「悪かった。悪かったってば。だがな、ランクC以上と言ったのはそっちだぜ? グランドウルフは確かにBクラスだが、魔物だし、その上『倒せ』つつってるワケじゃねえんだ。逃げ回るくらいなら、Cランカーでもできる」

「うっ」

その言葉に思い当たる節があったのか、押し黙るユーゼリア。やれやれとガークは溜め息をつき、そして言った。

「それに、俺の勘だが、あいつは死なねえな。さつきも奴ア言ってたぜ。『死ぬつもりは無い』ってな」

「死ぬ、つもりは…」

それは昨日、ゴブリンとコボルトの巣を殲滅するときと言っていたこと。

そのことを思い出すと、不意に大丈夫だと思えてきた。

(そうね。きつと心配するだけ損するわ。だってアツシユだもの。ケロツといつも通りの余裕の顔で…もしかしたらグランドウルフを倒しちやったりして。それは無いかしら。でもアツシユだもの、ありえるわ)

一体ユーゼリアの中でアシュレイはどういう評価をされているのか、やがて白くなっていった頬に赤みが戻り、微笑が戻った。

「頑張らなくちゃー!」

「警備兵はグレイハウンドの掃討を手伝ってくれ！ グランドウルフはこっちの腕利きがやる！」

「わかったー」「頼む！」

周りの警備兵達が返事をするとはほぼ同時に、Vの字になったウルフ達が突っ込んでくる。

「アシユレイー！ 10分だ！ 10分持ちこたえろ！」

「わかった」

事前に拾っていた握り拳大の石を、鋭くグランドウルフの赤い目に投げる。寸前で瞼を閉じられ、ウルフに傷を負わすことは出来なかったが、それで良い。

今回のアシユレイの役目は、グランドウルフを足止めすることなのだから。

「グワアアアー！」

進行の邪魔をされたウルフが咆哮する。その憎悪の眼差しは、足元にいる小さな人間に注がれる。

(どうやら俺が魔のモノだとは気づいていないな)

腰の剣を抜こうとして、思い留まる。

アシユレイのこの長剣は特別製だ。たかが力を抑えた程度で同族に気づかないような小者など、真つ二つなのである。むしろ、斬れないように剣を振るう方が難しかった。

「やれやれ」

空から落ちてくる脚の動きを先読みし、避ける。少しは必死さを醸し出したほうが良いだろうかと考えるが、服が汚れるのも嫌なので却下した。

その大きな前脚でもってアシユレイを叩き潰そうとするグランドウルフは、自分の獲物になぜか攻撃が当たらないことに戸惑っていた。

それは後ろのグレイハウンドを相手していた警備兵とガーク達も同じだった。

本人とユーゼリアにはああ言ったものの、流石にBクラスの魔物を

C相当とはいえ1人に全て任せるなんて、思っではない。さつさとハウンドを蹴散らして援護にまわるつもりだった。

警備兵達も同じだろう。ガークやアズルのような貫禄のあるオジサンなら兎も角、一番危険で厄介なグランドウルフの足止めという役割を負ったのは、まだ20もそこそこの青年。下手をすれば息子と同年である。

ところが、今、彼らはまるでそんなことを考えていなかった。否、いられなかった。

「…なんだ……あれ…」

思わずハウンドそっちのけでグランドウルフとアシュレイの攻防を見入ってしまう。

「あいつ、単に歩いてるだけだぞ……?」

アシュレイは、グランドウルフの足下を歩いていた。ウルフの周りをぐるぐると。

「ウォ——ン——……」

グランドウルフは高く長く遠吠えする。

「なんだッ!」

アズルがハウンドの牙に剣を弾き返されつつ声を上げた。

「グレイハウンドが…」

ハウンド達は撤退し始めていた。町に侵入しようとしな。

どういことかとガーク達が頭を捻ったその時。ついに、最初の1匹が身を翻す。

翻し、そして——

「ガアアッ!」

アシュレイに牙を向けた。

「んなッ!」

「危ねえ!!」

\*\*\*\*\*

ユーゼリアは震えそうになる手を必死に抑え、祈りの言葉を捧げていた。

(アツシユ……！)

つい先程、門の外で聞こえたグランドウルフの遠吠えと”危ない”という声。

男達の声色で、アシユレイが危ない状況にあることが分かった。早く早くと、ユーゼリアの心が急かす。

だが、そういうわけには行かない。

安全な門の内側の広場で彼女は魔法陣を描いていた。白いチョークで描かれたそれは既に完成しており、後は祈りの言葉を捧げるのみ。魔物の襲来に静かになった町の中では門の外の戦いがいやに耳についた。

”……

あと少し。?????

???????

?????

?????

?????

?????

???

???::”

”

”

”

”

”

召喚獣は強力だが、喚び出すのにいちいち時間がかかるのがネックだと言われている。

魔法大国に生まれ、数年ではあるものの姫として最高峰の教育を受けたユーゼリアだからこそ10分で終わっているが、これがなりたてだったり、ランクの低い召喚魔道士だったりすると、20分も、下手をすれば30分かかることもあるのだ。

ゆえに召喚魔道士は人数がそれ自体希少であり、また前衛とパーティを組むのが当たり前だった。ソロの召喚魔道士というのは自殺行為であるというのが一般的な考え方だ。

それを、ユーゼリアは今までソロで生き延びてきた。これが彼女がB+ランカーである理由であり、また彼女が未だB+であるのにもかかわらず、「孤高」という、冒険者にとっては名誉な”渾名”がついている所以である。

”……

?????

???????

?????

L a f l a n g e !



魔法陣が淡い青緑色に光る。召喚の前兆だ。

突如、陣が渦を巻くようにして黒く染まった。否、奈落の穴が開いた。そこから漏れ出る空気は、冷たい。

アシュレイが1000年の時を過ごした“狭間”に繋がる孔である。

「ギイイイイ!!!」

鋭く高い声と共に突風が吹き荒れる。

「ラフランジエー！」

孔の中から何か弾丸のように天へと飛び出した。

乳白色の嘴と緑色の目。太い縄のような尾と、嘴と同色のコウモリのような翼膜をもつそれは、全体的に薄緑の色合いをしていた。

風を纏う魔鳥。Bクラスの魔物だ。名はグアー。風属性の魔法を操る高位の魔物である。

「ギイイイイー！」

翼を広げて滑空し、ユーゼリアの目の前に着地する。ユーゼリアは風が収まるまでの時間も惜しく、その背に飛び乗った。

「飛びなさい、ラフランジエー！ 門の向こう側にいるグランドウルフが敵よ！」

召喚魔道士は、狭間から呼び出した魔物に名をつけることで、その力を縛り、操る。ラフランジエー風に舞う者へと名付けられたグアーは、翼をはためかせると、上空に飛び上がった。風圧に、木箱や道端に転がっているごみが、勢い良く家屋にぶつかる。

「なッ!？」

堀の上空から冒険者達を見たユーゼリアは、目を疑った。

確かに、激しい戦闘を想像してはいた。が、目の前で行われている戦闘は——これを戦闘と呼べるのかも怪しいが——とにかく、ユーゼリアの想像を超えていた。

警備兵とガーク達は合わせて30人くらいいる。だが、誰ひとりとして戦っていないかった。皆、呆然という表情をしている。だが、それも致し方ないだろうと、この時ばかりはユーゼリアも思えた。

ならば、彼らが戦っていたはずのグレイハウンドはどこへ行ったの

か。

それは、防壁より少し離れたところにいる、彼の元。

グレイハウンドを率いるグランドウルフの足元にいるアシュレイに向かって、ハウンド達は攻撃を繰り返していた。

だが、すぐにユーゼリアもその光景に絶句する。20匹ものハウンドの攻撃に加え、自身の3倍以上ある巨躯のグランドウルフの攻撃は、だが一撃もアシュレイには当たっていなかった。彼が避けているような素振りはない。普通に、まるで散歩にでも出かけるように、グランドウルフの足元をぐるぐると歩き回っているだけ。

だが、それは確かに、オオカミ共の攻撃を避けているのだとユーゼリアにはわかった。おそらくガーク他数名もわかっているだろう。アシュレイが一步左に動けば、次の瞬間彼がいた場所にはグランドウルフの鋭い牙が突き刺さる。少し歩みを遅くしたら、その目の前をハウンドが空に体当たりした。

兎に角躍起になってアシュレイを狙っているオオカミ達は、まるで何かを恐れているようだと言った。その時、下からガークの声が響く。

「は、早くあいつを助ける！」

その言葉にハツとして、ユーゼリアもラフランジェに指示を出す。

「ラフランジェ、オオカミ全部に【逃れえぬ突風】!!」

「ギイイ!!」

「そのままグランドウルフに【連なれ疾風】!!」

ひとときわ大きくラフランジェが羽ばたくと、目に見える程の風の刃がオオカミだけを的確に狙って放たれた。ほぼ一撃で、グレイハウンド達は首を刈られる。僅かに生き残ったハウンドは、警備兵たちの弓矢によって止めを刺された。

灰色の毛が風の刃を守ったグランドウルフは、上空に突如現れた強敵に、唸り声を上げた。が、その顔面にも風の刃は襲ってくる。息もつかせないような連射に、グランドウルフは森へ逃げ出した。

「もういいか」

アシュレイは、自分の役目は終わったとばかりに、駆け足で警備兵たちの元へともどる。それを見届けたユーゼリアは、ラフランジエに攻撃を命令した。

「一撃で終わらせなさい、ラフランジエ。【きざめ斬撃の暴風】！」

途端、グランドウルフを中心に、風が爆発した。風属性中級魔法である。大きなカマイタチが直撃したグランドウルフと、その周りの木々が倒れる。中の惨状は推して知るべし。おそらく血が飛び散っているであろう止めの刺し方に僅かにユーゼリアが罪悪感を覚えたが、過ぎたものは仕方がないと水に流す。

しばらく皆睨みつけるようにして森の方を見ていたが、やがて何の音もしないとわかると、警備兵達がワツと湧いた。

「倒したぞー！」

「うおおおお!!」

「ふう…」

ユーゼリアも、ほっと息をついた。

ゆっくりと下降してラフランジエの背から飛び降りたユーゼリアは、そのまま一直線に走り出した。役目を終えたラフランジエが、再び地面に空いた孔に溶けるようにして吸い込まれる。

「アツシユー！」

「ユリイ、お疲れさグエツ！」

走ってきた勢いそのまま抱きつかれたアシュレイは、その身体を受け止めつつも首を絞められたニワトリのような声を出した。

「もう、馬鹿、馬鹿ッ！　なんであんな危ないことしてるの！　怪我は!?!」

「それは無いが…今回の俺の役割は足止めだったから——」

「ああいうときは逃げてもいいの！　それにアツシユだったらグレイハウンドくらい倒せたでしょう！」

「えーと……すみません」

もう何を言っても怒られそうで、でも泣きそうな顔をしたユーゼリアに何か言える訳もなく、気の利く言葉を思いつく程人間慣れしてい

なかったアシュレイは、とりあえず謝った。ユーゼリアはアシュレイに怪我がないことを確かめると、ほっと息をついて一步下がった。途端に、今まで周りで見ていただけの警備兵他数名の冒険者達が2人の周りに集まる。

「兄ちゃん本当に怪我はないのか？」

「あなた、若いのにすげエな！俺なんか何が起こったか全然わかんなくて…」

「怪我人が少なく済んだのも、結果的に全部あなたとお嬢さんのおかげだ！ありがとう！」

「にしてもこの子可愛い…って、どっかで見たことあるぞ」

「もしやお嬢さん召喚魔道士の【孤高】さんですか!? ファンなんです、サインください！」

「やべエ本物?! 【孤高】さん、握手してください！」

一気に黒山の人だかりとなったその場で、話題はだんだんユーゼリアに移行し、困った顔をしつつも1つ1つ丁寧に応じる彼女を見て、アシュレイは苦笑しつつもその場を抜け出た。近寄ってきた人物に目を向けると、小さくお辞儀をされた。

「怪我、してますよね。掠っただけみたいですけど、耳の後ろ」

「え？」

自分でも気づかなかった。確かに触ってみると、少しヒリヒリする。どうやら1匹目のグレイハウンドの初撃を避けた時にやられたらしい。この程度の相手に一撃でも喰らったのを知って、自分で自分に驚いた。

(流石に侮りすぎたか)

グランドウルフの攻撃を避けながら、アシュレイは考えていたのだ。先ほどのバルバズのはちみつをユリイへの土産にしたら、美味しいご飯となっていただろうか、とか。そういえば自分もいくら料理はできるが、1000年前のレシピは果たして現代人の口に合うだろうか、とか。

限りなくどうでもいいことを考えていたため、予想外の方向からの初撃を逃げそこねた。

にしても、目の前の濃茶のローブ——魔道士のクオリが、なぜ本人も気づかないような怪我を知っているのか、気になった。

「よく分かったな、こんな怪我ともいえないような怪我」

「そこから魔力が零れでてるのが、見えますから」

「……それはまた」

どんな視力の眼だ？ 言葉を飲み込んで、声を小さくしていった。数メートルも離れていないところで、未だユーゼリアに詰め寄っている男共が騒いでいるから、声はほぼかき消される。ガーク達冒険者は町長の元へと連絡に行つて、この場にはいない。

「エルフは、耳だけでなくそんなに目も良かったか？」

「ッ!？」

ザツとクオリが距離をおく。全身でアシュレイを警戒していた。

「なぜ、わかつたのです？」

「素直だな。しらばつくれればいいものを」

「……」

「まあ、俺の場合しらばつくられても意味がないが。…魔力の質が違う。並の人間よりももつと透き通っていて、濃い。にしても、珍しいものだな。滅多に故郷の森を出ないのではないのか？ まあ、色々事情はあるのだろうが。聞かないから、安心しろ。ついでに誰かに言うつもりもない」

「……」

まだ警戒したようにアシュレイを見ていたが、ふっと息を着くと、スタスタとよってきた。

「貴方は、警戒しても意味がないようです。わたしの敵う相手ではありませんね」

「本当に、随分と良い眼をお持ちのようで。怪我については大丈夫だ。放っておけば勝手に治る。ありがとう」

「いえ。あの、一応紹介させていただきましたけど、Bーランク魔道士のクオリ・メルポメネ・テルプシコラです」

「Fーランク剣士のアシュレイIIナヴユラだ。またどこかで会ったらよろしく」

「は、い。あの……エルフに興味はないんですか？」

僅かな逡巡の後、思い切ったようにクオリが問うた。

今はどうかしらないが、昔——1000年前は、エルフはその美しい容姿から、奴隷商人の格好の的だった。大枚を叩いてでもエルフを欲しいという金持ちがいくらでもいたのだ。エルフは1人1人の魔法の才が高いが、それでも、1対多数で攻められれば手も足も出ない。その為エルフたちは仲間と共に森の奥地に強力な結界を張って集団で暮らすことにより、その身を守っていた。希少性がより一層高くなり、奴隷商の買取価格がより一層高くなったエルフが、一攫千金を狙う一般人に狙われることも、少なくない。

「いや。……まあ、美しいものを見たいという気が無いわけではないが、どうしてもというほどではない。金に困っている訳でもないから、お前を狙う理由もないわけだ」

アシュレイの腕があれば、目の前のクオリなど苦もなく捕らえられるのにも関わらず、その問いを一瞬でスツキリバツサリと切り捨てた。

素でそう言っているのが分かり、クオリは思わず苦笑する。僅かに嬉しそうな声で「そうですか」といった。

「じゃあ、またな」

「はい。また」

横の男共の様子をちらちらと見ていたアシュレイが、そろそろ潮時かとユーゼリアの元へ行く。

アシュレイは人だかりの中へ入っていった。

「……あんな人、初めてですね」

残された濃茶のローブからは、風に浅葱色の髪が柔らかく揺れていた。

グランドウルフの来襲があったとは思えないほど、穏やかだ。 00

000000000000

## 12話 「貿易都市シシム」

グランドウルフ討伐から4日目の朝、2人は目的地である貿易都市シシムに到着していた。石を積み上げしつかりと固めた城壁と大きな門の前には、武装した兵が昼夜問わず常に町の安全を守っていた。ギルドカードを見せて身分証明をするというのは、アシュレイにとって新鮮な体験だった。

無事町中に入れた2人だが、馬車を売っている区域を先程からうろろとしていた。ユーゼリアが腕を組んで唸っている。

「うー、丁度良い値段とサイズのが売り切れてるわね…」

「何か馬車が入り用なことがあった、とか？」

「さあ、特別なことはなにも無いと思っただけど…何かあったっけ？」  
「いや俺に聞かれても」

首を傾げつつアシュレイを見上げる青玉サファイアの双眸に、苦笑した。

それもそうね、と再び立ち並ぶ店に視線を戻す彼女に、貯金の余裕を聞くと、暫く考えた後に答えが返ってきた。

「一応、余裕が無いわけでは無いのよ。まあ、4人乗りを買って、だいたいあと4分の1つてどこかな」

「なるほど」

暫く考えた末、またじっくり探すことにし、とりあえず今は宿屋でゆっくり休むことにした。

「急ぐ旅でもないし、誰かさんのおかげで追っ手も怖くないしね」

「それは良かった」

宿代は一泊2部屋で360リール。ユーゼリアはBーランクなので2割引だった。

自分で言ったものの、この先ずっと宿代を彼女ひとりに任せ続けるのは、結構気がひける。アシュレイ自身は別にランクの如何に興味はないが、たしか冒険者登録をしたとき、ランクが上がれば上がるほど宿代その他が色々安くなると聞いた。

(なら、ランク上げに勤しむとするか)

アシュレイとてユーゼリアに負担をかけたわけではない。面倒

であるといえれば確かにそうだが、彼一人の我慢（というほどでもないが）でこの先ユーゼリアの負担が小さくなるなら、やらない理由もなかった。

部屋を確認すると、アシユレイは隣の部屋のドアをノックした。

「なあに？」

「ギルドに行ってくる」

「私も行くっ」

ドアの向こう側、固い簡易ベッドでごろごろしていたユーゼリアが飛び起きた音がした。ドアが開くと、しっかりとフードをかぶったユーゼリアが迎える。

「お待たせ」

「そんなに慌てなくても…」

部屋の鍵を閉めると、階段を下りて店主に鍵を預ける。

「お夕飯はいっ？」

「18回鐘が鳴ってから、次の鐘が鳴るまで。遅れたら食いっぱぐれるから、気をつけるよ、嬢ちゃん」

「わかった。ありがとう」

さつき15回鐘が鳴ったばかりだから、近場の依頼があれば余裕のある時間だろう。

そして歩くことかれこれ20分。

シシームのギルドは大きかった。前の町と比べてしまうと余計に大きさが際立つ。建物自体は先日のポルスにあったギルドと同じ造りだった。レンガ造りの頑丈そうな建物。

だが規模は倍以上だ。馬車をしまう専用の木造施設や、馬小屋もある。それらを囲むように塀があり、それがギルドの威圧感を煽っていた。

「大きいわね…。流石『貿易都市』」

本館には木製の看板に『シシーム総合ギルド』と達筆に書かれていた。ユーゼリアに尋ねると、

「ああ、言ってなかったっけ。ギルドって、いくつか種類があるのよ。私達が用があるのが『冒険者ギルド』。その他には商人が大抵所属



する「商人ギルド」とか、公にはされてないけど、どの町にも必ずあると言われている「盗賊ギルド」とか。商人ギルドではどの町では今何の売れ行きがいいとか、何が不足してるとか教えあうのよ。商品を配達人に届ける商人も、受け渡しはギルドで行うの。他にもあるわよ」

「ほう、なるほど」

中は外観でわかるとおり広く、並んで置いてある丸テーブルでは既に多くの商人が食事をしていた。冒険者よりも上等な布地の服を着た彼らは、ワインを片手に何やら商人同士で交渉をしたり、トランプをしているようだった。側にはうずたかく積まれたコインがある。

それらを縫うように通り抜けると、随分と横に広いコルクボードの前に立った。

「すごい熱気ね」

ふうと息をついたユーゼリアが、彼女の背丈よりも高い場所に貼つてある紙に目をつける。

「あれとか、どうかしら」

一生懸命手を伸ばして背伸びする背中の上から、アシユレイがひよいとその依頼書を引き抜く。ぷうと膨れる薔薇色の頬を無視して一通り詳細を見終わると、やっと少女にその紙を渡した。

「…うん、これなら近くの森に生えてるからお夕飯までには帰れそう」  
鎮静剤になる薬草を20束納品するという町医者への依頼だ。カウンターに渡せば冒険者側は終わりである。溜まるギルドポイントは20。フランクに上がるのにちょうど良かった。

手続きを受けると、早速2人でその森に向かう。門兵に再びギルドカードを見せ、町を出たあと歩くこと10分。

「ここまでくればあると思う」

そう言つて道を外れて森に消えていったユーゼリアを追い、森に入った。

依頼はサクッと終わった。ユーゼリアにどんな特徴なのかを教えてくださいらえば、あとは探すのみである。所詮フランクの依頼でもあるし、別段難しいということはなかった。目的の薬草が比較的群生して

いたというのもある。

「これで最後……」

ユーゼリアが最後の1束を引っこ抜くと、土を払って袋に入れた。日もだいたい傾き、辺りは薄暗くなり始めていた。少し離れたところで鐘がなったのが聞こえた。18回鐘だ。

「早く帰らなくちゃ！」

急かされるままギルドに戻り、カウンターで手続きをする。受付が薬草の種類と数を確認しているとき、後ろから「あれっ」と素っ頓狂な声が聞こえた。ユーゼリアである。

「あ」

遅れて聞こえた、どこかで聞いたことのあるような声に振り向くと、数日前にほんの数分話した、あの濃茶のローブが立っていた。今日もエルフの特徴である耳を隠すため、すっぽりとフードをかぶっている。なんとなく目があつたような気がする、ちいさくお辞儀をされた。

「あなた、えつと、えー……」

「……クオリ、です」

「そう！ クオリさん、あの、彼らは？ えと、ガークさん、だっけ」名前を覚えていなかったユーゼリアに苦笑しつつ答える少女とは、数日前、あの小さな町でのグランドウルフの襲来の後、別れたはずだった。その時彼女にはガークという槍使いと、あともう1人、剣を使う男性とパーティを組んでいたはずだった。

クオリは苦笑して答えた。

「いろいろありまして……パーティ解約されちゃいました。あはは……あ、いいんです。元から臨時パーティということだったので、合意の上ですから。それにしても、ユーゼリアさんが2人のパーティを組んでいたなんて、驚きました」

相手には名前を覚えてもらったことに少々恐縮しながらも、だがユーゼリアはクオリが話の話題を変えたことに気づいた。ちよつと考えた後に、ローブの少女の手を取る。クオリの方が随分と背が高い為、なんだか妹が姉に甘えているように見えた。

「ねえ、このあと暇？ よかったら一緒にお夕飯食べない？ 同じ死線をくぐり抜けた仲間として」

「え、いや……」

「夕飯ぐらいなら、いいんじゃないか」

報酬とランクアップしたギルドカードを片手に、アシュレイが口を挟む。彼の言葉に、クオリは未だ逡巡しながらも、小さく頷いた。

3人で外に向かいながらアシュレイがユーゼリアに言う。

「やっとランクFになった。いつぞやのハウンドの毛皮で実は結構稼いでたらしい」

「やったじゃない。次は何ポイントだっけ？」

「1000かな」

「え、F!?! あなたがですか!?!」

突然横から叫ばれて、さしものアシュレイもびつくりしながらクオリを見ると、彼以上にびつくりしたような顔で見返された。

「……あれ、最後挨拶の時に言わなかったっけか。ええと、たった今Fランカー剣士になりました、アシュレイⅡナヴユラです。…どうぞよろしく」

「……あの時はそれどころじゃなかったんですっ」

クオリを連れて宿屋に帰ると、今度はクオリが「あれっ」と声を上げた。

「私もここに泊まっているんですよ。一緒だったんですね。気づきませんでした」

「あれ、そうなんだ」

そのまま食堂へと向かう。既に18回鐘がなつてから随分時間が過ぎていたので席はあまり空いていなかったが、偶然食事が終わって帰る客がいたので、そこに座る。食器を片付けながら店員にメニューを聞いた。

「今日はレグーのステーキがおすすすめです。仕入れたばかりなので、まだ柔らかいですよ。あとは、豆スープが値段の割に美味しいと人気ですね」

アシュレイとユーゼリアはレグー肉のステーキを、クオリは豆スー

プを頼んだ。エルフはあまり肉を食べないのだ。まだユーゼリアは気づいていないようだが、特に疑問にも思わなかったらしい。

「ま、こんなもんね」

ユーゼリアの批評はぼちぼちだったが、アシュレイの舌にはそこそこ美味に感じられた。クオリも残さず食べ終わり、ほっと息をついている。

「ねえ、クオリはどうして臨時パーティを組んだの？ それってつまり、もともとソロってことでしょ？」

ずっと聞きたかったことをユーゼリアが訊ねた。組んだ手の上に顎をのせ首を傾げるその瞳はきらきらと輝き、教えて教えてとせがんでいた。クオリが苦笑して「そうですね…」と虚空を見つめる。なんと説明しようか迷っているようだった。

「詳しくは言えませんが…：…そうですね、わたしをパーティに加えると、もれなく厄介事がついてまわるんですよ」

冗談交じりの声で言った台詞だが、〃厄介事がついてまわる〃の言葉に、ユーゼリアは思わず「え」と漏らした。

「あ、いや、なんでもないの」

ごまかしの笑顔と共に無意識に両手を振る。クオリの言い方に、アシュレイも少し意外な顔をしていた。ちらりと彼と目を合わせると、再びクオリに向かって言った。

「そういうえば、クオリって魔道士なのよね。何魔道士？」

一口に〃魔道士〃といっても、その種類は色々だ。例えばユーゼリアのような魔物を使役する召喚魔道士や、味方の補助・回復などサポートに徹する補助魔道士、攻撃魔法を用いて遠距離から火球や雷撃を浴びせる攻撃魔道士などがある。

クオリはこの攻撃魔道士に当たるのだが、彼らにももちろん個人で得意不得意な属性がある。火属性が得意な攻撃魔道士は水属性が苦手なのが一般的だし、また火属性が得意ならばそれに近い雷属性もそこそこ得意であったりするのだ。その逆もまた然り。

それらを踏まえて、攻撃魔道士たちは自身のことを炎魔道士や水魔道士、風魔道士などと呼称する。ユーゼリアが訪ねているのは、この

ことだった。

「特にこれといつて得意な属性もはないんです。全属性同じくらい行けます…が、よく使うのは、そうですね、やっぱり火でしょうか。威力も高いし」

「すごいわね！ 私は風しか使えないのよ。…ねえクオリ、魔法教えてくれないかしら」

「構いませんよ。じゃあユーゼリアさんは水にも適正がありますね。明日、少しご教授します」

「ありがとう！ 旅路でこつこつ覚えてたんだけど、独学じゃ全然うまくいかないの。それから、私のことはリアでいいわ。ユーゼリアの愛称だから」

「はい。任せてください、リアさん。こっちは本職なので、色々教えられることもあると思いますから」

「ほんとに“さん”もいらないんだけど…まあいいわ。よろしくお願ひします！」

そんな会話が繰り返されている間、アシユレイはというと、(そういえば俺が魔法使えること、ユリイは知らないんだったな…。どうしよう。言う機会を逃しているが、これは言わない方がいいのだろうか…)

ひとり悶々と考えていた。

ふっと顔を上げると、ユーゼリアと目が再び合う。その目にまたねだるような光が浮かんでいるのを見て、苦笑とともに肩をすくめた。好きにしろ、という意味である。

「ねえねえ、クオリ。ものは提案なんだけど…」

「なんででしょう」

「これから先、行くあてもないなら、一緒に旅をしませんか？」

「えっ」

飲んでいたコップの水が、揺れた。その目に僅かな動揺が走る。

「……それは、臨時で、ですか」

「違うわ。ずっとパーティを組んでいたいの。もちろん強制じゃないし、抜けたいと思っただらいつでも抜けて構わないけど…でも1つの依

頼を受けるだけのパーティとか、そういうのじゃなくて。気が合うなら、ずっと」

クオリが水を飲み込んだ。静かにこちらを見つめる。その瞳はアシユレイに「なぜ貴方は止めないの」と語っていた。

「何故か？ それは反対意見が特にないからさ」

「わたしはっ」

ガタツと立ち上がると、周囲の視線を集めた。もう客の多くは食事を終え、談笑しているのみだ。突然大きい声を出して立ち上がれば、周囲の目を引くことは必然だった。それにクオリも気づくと、アシユレイに目で問いかける。

「ああ。ユリイは信頼に値するよ。真面目だからな」

「……分かりました。信じましょう。リアさん、貴女に見てもらいたいものがあります。私の部屋に来ていただけませんか。パーティの誘いは、それを見てから考えて欲しいんです」

固くなった雰囲気飲み込まれないよう、ユーゼリアは静かに頷いた。

### 13話 「エルフ」

クオリにあてがわれたという宿の一室に入ると、彼女は前触れもなしにその身に纏っていた濃茶のローブを脱ぎ捨てた。現れたのは、肩まである絹のようにさらさらとした美しい浅葱色の髪と、それに逆らうようにして生える、長く尖った耳。悲しそうにこちらを見つめるその眸は、金色だった。

「エル…フ…」

ユーゼリアの声が震える。目をまんまるくして驚いていた。

エルフは、森の奥の結界の中から外にでることはまずない。それが、女のエルフであるなら尚更だ。ゆえに、その存在を目にしないまま死ぬ人間がほとんどである。見られるのは、ほんの僅かいる幸運の持ち主か、あるいは奴隷商人、また、腐るほど金をもつ一部の貴族のみだった。

だから、ユーゼリアのこの態度も、仕方ないことなのだ。

「綺麗…」

ほう、と息をつくユーゼリアに、クオリは静かに言った。

「見ての通り、わたしはエルフです。わたしを旅の連れとするなら、同時に奴隷商を相手にしなくてはいけませんよ。悪いことは言いませんから、わたしを勧誘するのは止めなさい」

その言葉に、ユーゼリアがハツとクオリを見つめる。その動作をどう取ったかはわからないが、クオリは話を続けた。

「ユーゼリアさんも、大変お美しい方です。一緒にいれば、わたしだけでなく貴女も確実に狙われますよ。アシユレイさん、貴方もです。ひどく女性受けする顔立ちですから、貴族の奥方が欲しがるでしょう。…貴女だって、奴隷商人に追われるなんて、嫌でしょう？ 今のうちに手を引きなさい」

クオリの言葉に、ユーゼリアは即答した。

「嫌よ」

「なっ!?!」

「…アツシユ。余裕?」

「もちろん」

目の前で交わされる意味の分からない会話に、クオリは声を上げた。

「あ…貴方達、分かってないですね！ 奴隷商人はしつこくて、陰湿で、卑怯な、人を人とも思わない連中なんです！ 追われたこともない方々は分からないでしょうけど——!!」

「——あるわ、追われることなら。現在進行形で、ね」  
「え？」

次の瞬間、窓ガラスが音をたてて碎け散った。同時にドアも蹴破られ、雪崩れ込むように黒い服の男達が部屋に入ってくる。

「聞いていたかのように間がいいな！」

咄嗟に右腕にユーゼリアを腕に抱きかかえ、ぽかんとしているクオリも反対側の肩に乗せると、割れた窓から飛び降りた。

「ぎゃああつ」

「ぐえ」

左右から悲鳴と反射的に首を強く締められる。変な声が出たが気にしている場合ではない。2階ではあったが余裕をもって着地すると、2人を抱えたまま走り出した。

「ちよ、ア、アツシユ！ どこ行くの！」

「郊外だ。町中で戦闘は目立つ。舌を噛むぞ、喋るな」

後方からは足音が十数人分。大きな荷物を揺れに気を配りながらもしかも2人も抱えたままでは、流石のアシユレイも追いつかれるのは時間の問題だった。やろうと思つてできないわけではないが、そうすると2人が酔うだろう。

「ううう……」

「大丈夫か？ 悪かったな、突然2階から飛び降りたりなんかして」  
「だ、大丈夫……うえ」

どうやらこれでも気分が悪くなったらしいクオリを、ユーゼリアが介抱する。そうこうするうちに、周りは完全武装した男達が取り囲んでいた。人数はポルスの時の倍である。

先頭に立つのは、その際逃げたあの頭かしらだった。



「また会ったな」

「今度こそ捕まえさせて貰おうか。今度は油断などしない」

「せいぜい頑張れ。俺はユリイを守らなくてはならんからな、負けてやるつもりは微塵も無いが」

そう言つて腕を振り上げる。次の瞬間、頭のすぐ横に控えていた男が崩れ落ちた。

「ぐあああー！」

のたうち回る男を、誰もが呆然と見る。

「手の甲の健と、足首の健を断たせてもらった。回復魔法でも1、2時間間は動けまい。……さあ」

次は、どいつだ？

——ゴクリ。

誰かが唾を呑みこんだ音が、聞こえた。辺りにアシュレイへの殺気が満ちる。それを一身に受けているはずの当の本人は、まったく意に介した様子はなかったが。

「うおおおおお!!」

一斉に男達が襲いかかってきた。ある者はナイフを、ある者は弓を、またある者は魔法を。最早味方に当たつても構わないという意気込みだった。

「っ、杖がー！」

ユーゼリアが魔法で応戦しようとするが、媒介となる杖——厳密に言えばその宝玉——が手に無い今、人間が自力で魔法を放つのは至難の業だった。

そう、人間ならば。

「【我請う。数多生命<sup>いのち</sup>支えし大地の君、天穿つ杭とならんことを】！」  
突如として3人を中心に、同心円状に地面が鋭く突き上げた。一瞬

にして、地面は巨大な針山地獄となる。逃げ遅れた何人かが、背中な  
り足なりを土の杭で貫通され、悲鳴をあげていた。

「クオリ！」

「エルフは精霊魔法の遣い手。ここは任せてください」

「ふむ、なら実力拝見といこうか」

腕を組んでクオリを見下ろしたアシュレイに笑みを返し、クオリは  
再び声を張り上げた。

「我請う。大気に遊びし自由なる君よ、生を喰らう龍とならんこと  
を！」

目の前で風が渦巻いて、やがて龍を形作る。風の龍は咆哮すると、  
土の杭をなぎ倒して男達に向かっていった。腕や脇腹を食い破り、最  
後にまた咆哮し、拡散して消え去った。

「……すごい」

ユーゼリアがこぼす。

エルフのみができる精霊魔法は、世間一般に知られている魔法に比  
べて、威力は桁違いに大きかった。その変わりに、事前に精霊に自身  
を認めてもらい、契約をしてその力を分けてもらう必要があるのだ  
が。だが残念なことに、精霊を肉眼で見れるのはエルフのみで、会話  
ができるのもまた、エルフのみだった。これがあるから、エルフは未  
だに森の奥地で生き延びていられるのだ。

「くそつ。弓だ！ 弓を引け！ 魔法を放てる者はソレでもかまわん  
！」

頭が怒鳴る。びゅつと飛んできた矢は、だが1本も3人に掠ること  
もなかった。クオリだ。

「【風よ】！」

しかし、突風程度では飛来してくる魔法を抑えることはできなかつ  
た。クオリが詠唱に入ろうとする。しかし、その必要はなかった。

「悪いが、そうはいかせないな」

再びアシュレイが腕を振り上げる。そのまま右に左に不規則な動  
きで腕を動かした。その様子は、指揮者に似ていた。

アシュレイが腕を一振りする度、風龍で薙ぎ倒された土杭の向こ

うからザシユツという音と悲鳴が聞こえる。3人の中で最も背が低いユーゼリアだが、その生々しい音から、アシュレイが戦っているようであることは分かった。

「くそつ。総員、撤退！ 撤退だ！」

襲撃は、再びアシュレイ達の勝利となった。

「……立ち去ったな」

追撃せず気配だけを追ったアシュレイが言うと、女性陣がほっと息をついた。

「あの、今のは……？」

「そのことなら私が答えるわ」

遠慮がちに尋ねると、ユーゼリアが前に出た。躊躇うように視線をさまよわせた後、クオリの金色の眸を見つめる。

ユーゼリアは、とある事情から彼女も追われる身の上であると語った。アシュレイは彼女の護衛であるとも。元王族であることを明かさなかったのは、クオリもまた全てを言っていないからだろう。

「…そう、でしたか……」

「一応弁明しとくけど、私達犯罪者じゃないからね？」

「ふふふ。分かっています。エルフはそういうのに敏感ですから」

ユーゼリアの小さな冗談に場が和む。その目に僅かな期待の色をのせて、ユーゼリアが再び問いかけた。

「どう？ 一緒に旅しない？」

「リアさん……」

「人数が多ければ多いほど、1人あたりの負担は軽くなるわ」

その言葉に、アシュレイがおや？ とユーゼリアに視線をやった。目が合うと得意げな顔でウィンクされる。この言葉は、アシュレイの受け売りだった。

「それに、遠距離攻撃が可能なあなたが入ってくれると、私達も攻撃の幅が広がるし」

浅葱色の髪の毛のエルフは、じつと何かを考えているようだった。

「何より、せつかく友達になったのに、すぐお別れなんて寂しいじゃない」

(これが本音かな…)

フツと笑みを零しつつ、ユーゼリアの説得に耳を傾ける。すっかり暮れた夜空には銀色の星が瞬き、月は青白く浮かび上がっていた。

「……友達」

「だめ、だったかな?」

それでも反応を示さないクオリに、ユーゼリアは肩を落とした。

「もちろん無理は言わないが……」

そこで初めてアシュレイが口を出した。2人の視線がこちらに向くを感じながら、だが自身の視線は夜空に向けたまま。

「俺達の心配をしているなら、それは無用だ。確かに俺は先だってFランクに上がったばかりだが、前衛として2人を守るだけの力は持っている」と自負している」

「アッシュユさん……」

クオリとて分かっていた。つい先日のことだ、グランドウルフとハウンド相手に1人で完全に“足止め”を試みたアシュレイをこの目で見たのは。彼は言われた通り、“足止めを”した。恐らく1人で倒せと言われていたら、できたのだろう。

クオリはエルフだ。エルフは、魔の力に敏感である。中でもクオリは魔力を視覚的に見る事ができる。ゆえにクオリは、あくまでなんとなくではあったが、彼——アシュレイが人でないことを、本能的に感じ取っていた。

「どういう事情か分からないが、そんな彼が旅の連れとなるのだ。1人旅よりも危険性は格段に減る。」

それに正直、クオリもユーゼリアと離れたくなかった。とある事情でエルフの里を出たクオリだが、以来友人と呼べるような人間関係は築いていなかった。ガーク達のような臨時パーティを組むことはあっても、すぐ解散されるのがオチだ。せつかくできた友人、それも自分がエルフと知った上で、その厄介さを理解した上で、仲間になってくれようとするユーゼリアに、離れ難いという感情が芽生えるのは、当然といえた。

だが、それでも迷った。それほどに思う相手だからこそ、共に行

くことに迷いを感じた。

「……とりあえず、宿に戻ろうか。冷えてきたし、何も今すぐ答えを出せというわけでもない」

「そうね。そうしましょう」

「…はい」

ユーゼリアを中心に、横になって歩く。しばらくして、ふと思い立ったようにクオリが言った。

「そういえば、アッシュさん、わたし達を抱えてよくあんなに速く走れましたね」

「ああ、あれくらいの重さなら余——ぐえっ」

余裕、と答えようとしたアッシュレイの脇腹に、ユーゼリアの肘鉄が炸裂した。

「…こういうときは、〃軽さ〃って言って頂戴」

「え、別に同じ意味ぐほえっ」

「……」

「……………ハイ」

そうか、これが女性への気遣いか、と彼は悟った。2回連続で綺麗に入った脇腹は、ジンジンとまだ痛みの余韻が残っている。

「で?」

「あ…ああ。いや、何でも……」

今更蒸し返すほどのことでもない。というか言い直す方が恥ずかしい。

ふふんと笑った後に、ユーゼリアが言った。

「私の常識講座その2。女の子に体重の話は、禁物よ」

「ハイ……」

なんだか言い負かされた感がある。が、

「ふわあ、リアさんって…強いんですね!」

「……………ぷっ」

「……………くっ」

クオリの感嘆の言葉に、2人で吹き出す。

「くははは…っ」

悪い気は、しなかった。

## 14話 「スレイプニル (1)」

「さて、じゃあまずは馬車を調達しましょう！」

「随分と機嫌のよろしいことで……」

宿を出るユーゼリアの後ろを苦笑しながら付き添うアシユレイ。その横をさらに行くのは、濃茶のローブを羽織ったクオリがいた。今日もぼつちりフードを目深に被り、前髪しか見えない。

「そんな……わたしまだ迷っているのに……」

「いや、それは気にしなくていい。彼女は、昨日君が2度目の誘いを受けたとき、最初みたいに逡巡の余地無く断られなかったのが嬉しいんだろう」

「え……」

「もう1つは、単純に、昨日良い馬車を手に入れることができなかったからな。今日こそはとか燃えてるんじゃないか？」

自分の早とちりに少々恥ずかしげに頬を染めたクオリは、慌てて銀髪の少女の後を追った。

「リアさん、ちよつと待ってくださいー！」

「あ、ごめんごめん」

相変わらず馬車は在庫切れだった。ユーゼリアが店主に聞くと、大笑いされながら教えてくれた。

「そりゃあ、武闘大会に決まってんだろ、嬢ちゃん。シシームから馬車で7日の闘争の町ファイザルで行うあれだよ。開催は今日からちよつど6日後だからな。このあたりで旅路に遅れた連中が慌てて馬車を買って行くのさ。おかげさまで商売繁盛繁盛」

「武闘……ああー！ そういえばー！」

「そういえばそんな大会ありましたね……」

2人とも忘れていたらしい。

2年に1度、冒険者ギルドが主催する武闘大会。確か、入賞者には賞金が出るんだっただか。

「おいおい、あんたらもそれを観にここに来たんじゃないのか？ あれは公に賭けが許されている数少ない娯楽だぜ。俺もそろそろ行か

ねえと間に合わねえな。…ああ、悪いが4人乗りは売り切れだ。6人乗りならいくら残ってるが」

「え、あ、まあ、馬車を買いに来たのは事実です…けど」

ユーゼリアがどもりながら言うと、店主はカウンターの内側から鍵を取り出して3人を手招いた。断る理由も無いためついていくと、奥の倉庫に入れてくれた。

「外に置いてある安物じゃない、頑丈なやつだ。まあ、その分ちと高値だが…」

ぐるりと見回すと、確かにどれも作りはしつかりとしているようだ。ユーゼリアが礼を言いつつ物色し始めた。手もみをしながら店主が馬車の特徴と値段をつらつらと述べていく。

(よくまあ全ての馬車の特徴を覚えているものだな)

どんなものかいいのかアシユレイには分からないので、入り口で待つことにした。クオリは迷った末、彼の隣に立ち、閉まった扉に寄りかかる。あれこれと店主に尋ねるユーゼリアを眺めながら、アシユレイは静かに問うた。

「決めかねるか?」

「……はい。やっぱり。エルフであることを知って尚、金銭目的ではなく『わたし』を仲間に入れてくれる…それも、誘っていた方がいいなんて、すごく嬉しいです。けど、だからこそ…」

「人間相手には疑い深いエルフが、たかが半日共にいただけで、旅の仲間だろうか迷うのか。そのまま捕縛して売り払うかもしれないのに」「そんなことしないでしよう。少なくとも、貴方は」

自信あり気に——寧ろどこか開き直った感で、クオリは言った。

「——なぜ?」

「わたしも一エルフとして魔法の腕に自信はありますが、そんなもの関係ないほど、貴方は強いです。わたしなんかより、遥かに。次元が違うと言っているでしょう」

ちよこまかと動くユーゼリアをなんとなく目で追っていたアシユレイが、驚いたようにその目を見開いた。クオリに顔を向けると、そのまま真意を探るように2人は見つめ合う。



アシユレイの横顔を見つめる金色の瞳は、まるで全てを見透かしているかのような色を秘めていた。多くの時を生きてきた、老獪な獣のようだ。

「クオリ、ちよつと聞きたいんだが…」

「なんでしよう?」

「…随分綺麗だが、歳はいくつぐえふお!」

右を見ると、いつの間に戻ってきていたユーゼリアが、正拳突きのみ構えでぶるぶると震えていた。

(けっこう今のは効いたな)

「女の子に年齢を聞いちやいけません!!」

「え、あ、り、リアさん——」

「クオリは黙ってて!」

「あ…はい」

申し訳なさそうにチラリと視線を向けられたので、気にするなという意味を込めて肩をすくめた。ユーゼリアの後ろでは店主が乾いた笑いを浮かべていた。

「あのねえ、アツシユ。これは記憶がどうか関係ないことだけど、一応『常識』だから、教えとくわ」

(そんなに悪いことだったかな、クオリに年齢聞いたこと)

(別に年齢を気にするほど若くないので気にならないのですが…今のリアさんには通じなさそうですね。わたしの為に怒ってくれているのでしようか…)

こめかみに青筋を浮かべて怒るユーゼリアに申し訳なさそうな表情を取り繕いつつ、内心でここまでガミガミ怒られることに疑問を抱いたアシユレイであった。

(…あれ?なんで私こんなに苛立ってるんだろう?)

その真意は、まだ誰も気づかないまま。

「まだまだ行くわよ…90万!」

「こつちも商売なんでねえ、妻子にメシ食わせてかなきやいけないもんで…115万!」

「あら、大会のおかげで繁盛してるんじゃないかかしら…95万5

「000!」

「そーうだったつけえー? 最近おじさん耳が遠くなってきたみたいで…113万3000!」

熾烈な争いはかれこれ半時間にも及んでいた。

「すごいですー」

「よく粘るもんだ…」

ユーゼリアは、連れ2人をドン引きさせつつ、その出生からは信じられないような守銭奴っぷりを発揮していた。

(個人的には、元値150万をここまで落としたので十分だと思うが…)

「96万」

「くつ…110万」

「96万」

「……」

「…ふー。ま、いつか。別に? 他にも馬車を売ってる店なんてそこら中にあるし?」

「……」

「アツシユー、クオリー、他の店行こうー」

「……ダァー!! 分あかった!! 馬1頭付けて150万! これどうだー!」

「のったー!!!」

したり顔で叫ぶユーゼリアに、店主はがつくりと肩を落とした。

「おお、元値で馬1頭ぼったくりやがったぞ、あの姉ちゃん」

「やるなあ」

周りで様子を窺っていた野次馬がどよめいている。だが、店主もただで馬を手放したわけではなさそうだった。

「だがな、嬢ちゃん。俺がいう『馬』はただの馬じゃねえ。ヤツを手懐けられたら、150万で馬1頭つき、懐かなかったら150万で馬車だけ…どうだ! 俺にも懐かなかった馬だが、能力はそこの馬とは比べものにならない。まともに買ったなら1頭300万するぞー」

「のったー!!!」

おおおっ！

野次馬が再び盛り上がる。

「ようっし、そうこなくっちゃ」

いそいそと倉庫の奥へと向かう店主。最後にキラリと勝ち誇ったような光をその目に見いだし、アシュレイはふと気づいた。

(……あれ、これって今までの交渉が全部無駄に……?)

「すごいです、リアさん」

「ふふー、これくらい朝飯前よー」

横目でユーゼリアの様子をうかがうが、どうやら気づいていないようだった。

(……)

流石根っからの商人。1度負けて相手を油断させてから、お得に見える条件で勝算の大きい商売をするとは。

まだ18のひよっこより一枚も二枚も上手のようだ。あの自信あり気な目を見る限り、随分な暴れ馬なのだろうか。

そうこうしているうちに、店主の準備が整ったようだった。

「こつちに馬小屋がある。来てくれ」

外見はなんの変哲もない、ただの馬小屋だ。だが、クオリとアシュレイは小屋を見た瞬間、ピタリと足を止めた。アシュレイは驚いたような、クオリは僅かに青ざめてすらいた。

「どうしたの？ 2人とも」

「……いや、何でもない」

気づかないユーゼリアが声をかけると、アシュレイだけが普段の微笑を浮かべて返した。クオリは不審げに店主を見る。店主は扉の前で立っていたが、内心ひやひやしていた。

(まさかあの2人、気づいたのか？ ……いや、まさか、な)

馬小屋は予想外に大きく、10頭分くらいは余裕で入るだろう大きさだった。木製の扉には、鉄の鎖が巻かれ、南京錠で止められていた。

「……」

バレないように辺りを見回すと、ちょうど店主の立っている向こう、角に、同じような鉄の鎖がジャラジャラと捨ててある。思わず溜

め息をついた。

(どうやら、嫌な予感は当たったようだな)

思ったより重々しい音をたてながら開いた扉の奥は、真つ暗だった。中の空気はひんやりとしており、どこか薄気味悪く感じた。ユーゼリアが戸惑いの声をだす。

「あの……っ？」

「まあ待て。今窓を開ける」

錆びた鉄がこすれる音と共に暗闇に光が差した。他の窓も次々開き、やつとすがすがしい風が頬を撫でる。

「やはり……」

「これって……」

クオリの呟きは、ユーゼリアの声にかき消された。

中にいたのは、たった1頭の「馬」。だが、ただの「馬」ではない。「これって……魔物……っ？」

大きさは普通の馬より一回り大きいくらい。シルエットも確かに馬ではあったが、日の光の下にでると、それは明らかに一般的に指す「馬」とは違った。

まず、皮膚が鱗だった。それも、ただの鱗ではない。質は竜のそれと同等だ。生半可な剣では、逆に剣が砕けるであろう硬度である。色は紫がかった銀色。身体全体を隈無く覆う鱗は、日光に照り輝いていた。

尾は、ふさふさの毛ではない。蛇のようにしなやかで長く、先端には一瞬ただの真つ直ぐで艶やかな毛のように見えるが、その実鋼鉄のワイヤーよりも頑強な剛毛が、柔らかく垂れ下がっていた。スナツプを利かせれば、岩をも砕く破壊力を持つ。たてがみもこの毛が生え、首もとを保護していた。

そして何より目を引くのが、頭にある鋼の塊である。あたかも死神の鎌のようにも見えるそれは額から生えており、目はなく、目隠しをするように鎌に繋がるプレートとなっていた。

さしものアシュレイも、思わず目を見開いて固まった。クオリなど青ざめるを通り越して白くなっている。思わずアシュレイのコート

を握ったのも、多目に見てやってほしい。

なぜなら、この「馬」は――

(なぜ同胞が、ここに!?)

――【魔の眷属】第六世代「スレイプニル」なのだから。

## 15話 「スレイプニル (2)」

その『馬』、魔獣スレイプニルは、食い入るようにじつと3人を――否、アシュレイを見つめていた。スレイプニルと4人を隔てるものは、木製の柵だけ。スレイプニルの後ろ脚には極太の鎖と重そうな鉄球が置いてあったが、そんなもの魔獣の前には僅かな足枷にすらならない、羽毛のようなものだ。

「なんで……あ、貴方、これがどんな存在か分かっているのですか!？」

クオリが店主に詰め寄るが、店主は飄々と答えた。

「分かっているとも。Dクラスの魔物さ。だが大丈夫。こいつは生まれてすぐ人に育てられたから、襲ったりしない。自分より人の方が強いと思っっているからな」

(なるほど)

どうやらこの店主、全く気づいていないらしい。この『馬』は、魔物でなく魔獣で、人語を解す知性を持ったけものであるということに。

(つまり、親元から仔を攫ってきたというわけか。……下衆が)

当然クオリは気づいているから、真っ赤になって怒鳴ろうとしたが、それは寸でのところで止められた。ユーゼリアが店主に、今にも飛びかからんとする勢いで尋ねたからだ。ずり落ちかけたフードを、アシュレイが止める。クオリが慌てて深く被り直した。

「じゃ、襲ってこないのね!？」

「おう。だが、長年世話してる俺も、いまだヤツに懐かれていない」  
(そりやそうだ)

誰が格下に懐くものか。そもそも、本能に従う魔の者が、今までこんな閉鎖された空間で暴れださなかつただけで奇跡だ。それも【魔の眷属】ともなれば、彼らが首をたれるのは、圧倒的な実力差を持つ相手のみである。

アシュレイが元・魔ノ者として、目の前の人間に対する内心のイライラを、深呼吸でどうにか処理しようとしている間も、魔獣はじつと彼を見つめていた。

「ヤツが頭を撫でることを許したら、お嬢ちゃんの勝ちだ。兄さんたちも参加権はあるぞ」

「ようし、じゃ、私から行くわ!」

「ッおい、ちよつと待て!」

アシュレイが慌てて止めるも、時既に遅し。ユーゼリアは柵の向こう側へいつてしまった。

「リアさん!」

クオリも悲鳴をあげるが、そのとき既にユーゼリアは、スレイプニルの頭に手を伸ばしかけていた。

——手ヲ出スナ

びくりと、魔獣が震える。

——彼女ヲ襲ツタラ、貴様ヲ殺ス

そのまま、ユーゼリアの手がスレイプニルの頭に触れる——直前、スイツと頭が手をよけた。

攻撃は、しなかった。

ユーゼリアは諦めきれないのか、再度手を伸ばすが、全て避けられる。いつそ抱きついてやろうかと身構えた瞬間、ぐいつと後ろに引つ張られた。

「ぐえっ」

乙女らしからぬ声を上げると共に、フードを引つ張られたのだの知ると、ユーゼリアは軽く咳き込みながら引つ張った犯人——アシュレイに文句を言おうとした。が、言えなかった。

「いい加減にしろ。危ないだろう」

アシュレイの目は本気だった。初めて彼に本気で怒られたユーゼリアは呆然としつつも、手を引かれ柵から抜けた。その間、まるで守られるようにして彼に肩を抱かれながら。

夢心地のまま柵を出たユーゼリアだが、そうさせた張本人の、押

し殺した声で、再び現実に戻る。

「いやあ、残念でしたね。これで兄さん方も駄目でしたら——」

「——店主」

「は、はい!？」

自分の思惑どおりに事がすすみ、良い気分であらうと喋っていた店主も、アシュレイの声に、悲鳴のような声で返事をする。気のせいか殺気の籠もった睨みに、青ざめた。

「……あれは、Dクラスの魔物ではない。あれは【魔の眷属】第六世代、スレイプニル」

「……は?」

「だから、あの馬は魔物じゃない、魔獣だと言っている。それも、よりによって第六世代の」

ようやく理解し始めたのか、店主の顔色が先のクオリと同様白くなってきた。

「…そ、そんな馬鹿な……だって、あの紫銀の鱗と、灰色のたてがみは…ッ!」

「まあ、分からぬのも無理はない。あれはまだ幼体だからな」

「何!？」

腕を組んで壁に寄りかかるアシュレイの言葉を、クオリが引き継いだ。

「スレイプニルの最大の特徴は、魔獣特有の単独行動の他に8の眼と8の脚を持つことですが、それは成体の特徴となります。生まれたばかりのスレイプニルには、脚は通常の馬と同様4本しかありません。成体になると、脱皮と共に脚が8本に増えます。それまでは、自分と同種でただ能力的には格下の魔物に擬態して、群に紛れて過ごします。そして偽りの母親に狩りを教わり脱皮して成体となってから、独り立ちし、単独行動をとるようになるのです。」

脱皮するまでは、確かに外見で判断するのは難しいですが…これはなんとも、運がいいのか悪いのか……」

確かにその通りだが、よくここまで詳細を知っているものだと、少々感心した。



「ば、馬鹿な。なら何故今までこいつは暴れなかつたんだ!? そもそも魔獣だつていうことが何故わかる!」

「……それは」

「それはわたしがエルフだからです」

アシユレイがどうかかわそうか思案していたとき、クオリがフードを下ろした。浅葱色の髪を耳にかけ、それを証明する。

「エ、エルフ!」

「これで信じていただけでしようか?」

店主は惚けたようにクオリを見つめたまま、夢現で頷いた。

「しかし、現時点でスレイプニルが人間を敵対視していないと思われ  
るのもまた事実。かの魔獣の撲滅を推奨します」

「問題点がいくつあるな」

「はい。まず『誰がやるのか』また、『その際出るであろう被害を――』

「ちよ、ちよつと待つてくれ!」

ボロ儲けをする予定だったはずの『馬』が、とんだ災厄の塊である  
と知り、店主は混乱状態にあった。

「…何か?」

「お、俺がどれだけの金をこいつにつき込んだと…!」

「ならば死ぬか? 妻子と共に、まわりの人間を道連れに?」

間髪入れずに帰ってきたアシユレイの言葉に、店主がうつと詰まっ  
た。クオリが静かに諭した。

「命あつての物種です。暴れる前に正体が分かつて良かったと、今は  
思いましょう」

「……」

いまだ諦めきれない様子ではあったが、店主は緩慢な動きで渋々、  
頷いた。

「では話のもとに戻りますが…」

「俺がやろう」

「そうですね」

その時完全に置いてきぼりを食らっていたユーゼリアが、やっと再

起動した。慌てて会話に割り込む。

「ちよ、ちよつと待って！ アッシュがやるなんて、危ないわ！」

「だが事は急を弄する。それに、この中では俺が一番適任だろう。唯一の前衛職だからな」

そう言われるとユーゼリアには何も言い返せなかった。

確かに、今までおとなしかったが、いつなんの拍子で暴れ出すか分からないのだ。被害を最小に留めるには、剣でバツサリといった方が確実だった。

「……わかった」

本当はそんな危険なことはしないで欲しいのだが、そうすればこの先何人に被害が及ぶとも限らない。だだをこねてアシユレイに呆れられるのも嫌だった。

ユーゼリアが口をへの字にしなごら承すると、アシユレイは馬小屋から3人を追い出した。

「クオリ、一応魔法の準備をしておいてほしい。何かあるか分からないから」

「分かりました。お気をつけて」

それに頷いて小屋の中に戻ろうとすると、つとコートの端を引っ張られた。

「アッシュ、あの……その……無理は……しないで」

ユーゼリアの、何かを耐えているかのような様子と、僅かに震える握りしめた手に一瞬きよとんとすると、アシユレイは微笑を浮かべ、俯いている頭をぽんぽんと撫でた。

「あ……」

覚えのある感覚に顔を上げる、と同時に、髪を今度はぐしやぐしやと撫で回された。

「きや、ちよつとアッシュー！」

怒って慌てて手櫛で髪を梳いていると、くすりと笑う声がユーゼリアを更に怒らせた。

「自分でやっておいて笑うなんて——！」

「大丈夫。言っただろう？ 独りにはしないさ。すぐ戻る」

再び優しげに頭を撫でられると、今度こそアシュレイは小屋の中に入った。

立ち尽くしたユーゼリアに、そつとクオリが寄り添う。まだちよつと乱れているユーゼリアの柔らかな美しい髪を整えながら、クオリは小さく、不安に包まれている銀髪の少女にだけ聞こえる声で言った。

「リアさん、大丈夫です。アツシユさんはお強いですから。わたしなんかより、ずつと。本当ですよ。だから、すぐ帰ってくるに決まっています。だって彼、貴女の護衛なんでしょう?」

「…うん。そうね」

静かに頷いたユーゼリアは、自分にも何かできるかも知れないと、魔法陣を馬小屋前の空き地に描いて、いつ何が起こっても大丈夫なようにスタンバイした。店主は一番離れたところで壁から頭だけを覗かせて、馬小屋の様子をうかがっていた。

——ごくり。

この一帯だけが妙に静かで、後ろの騒がしい市の雑踏が、なんだかユーゼリアには別世界のように感じた。一体誰がこんなところに魔獣がいると考えるだろうか。

何分たつたか分からないが、それはちようど、彼女たちの緊張が頂点に達した瞬間だった。

——ギイイ…

重たい音をたてて、馬小屋の扉が開く。

はつと2人は身構えた。が、すぐあとに見えた人影に、肩の力を抜く。

「アツシユ——…て、きゃああああ!!」

彼に駆け寄ろうとしたユーゼリアは、何かに気づくとズザザザともといた場所まで後ずさった。クオリも顔を引きつらせて一步退く。2人の気持ちを、意外なことに店主が、遙か遠いところから叫んだ。

「なんで生きてんだあ!!?」

アシュレイの後ろにはスレイプニルがその頭を（もちろん鎌は避け

るようにして）彼の肩にすりよせていた。アシュレイ自身も困ったような顔をしている。

「いやあ、なんていうか………懐かれた」

「うそおおお!!?」

アシュレイの思いもよらない台詞に棒立ちになった女性2人は、そろそろと視線だけを鋼の馬に向けた。

（まさか、ばれるとは思わなかったな……）

アシュレイもびつくりだった。

確かに特別気にして力を抑えていたわけではないが、まさかひと目で見破られるとは思っていなかった。今回は、スレイプニルという種が特に知能が高いということもそれに加担していたのだろう。

アシュレイが剣を手に柵の中に入ると、スレイプニルはいきなり立ち上がり、首を彼に向かって下げたのだ。紛れもなく魔獣の最敬礼。

『……お前、気がついていたのか』

アシュレイが声をかけると、ブルンとひと鳴き。未だ無い瞳は、だが優しく彼のことを見ていた気がした。アシュレイは初めからスレイプニルを殺そうなど考えていなかった。例え魔獣と恐れられる者であっても、生まれたばかりの仔は無力なのだ。そんなときに連れ去られて、こんなに狭く暗いところで鎖に繋がれ育てられたこの仔馬が、アシュレイには哀れでならなかった。ゆえに、転移の魔法でどこかへ送ろうと考えていたのである。

『……そうか。先程は彼女に牙を向かないでくれて感謝する。不意に脅したりして、悪かった』

ユーゼリアのことだ。スレイプニルはまた優しく嘶いた。

『お前は狩りをしたことがあるか? ……無い、か。ならば自力で覚えてもらうしかあるまい。悪いが、俺ができるのはここから逃がしてやることくらいだ。本能のままに生きろ、我が同胞よ』

そのまま馬に手のひらを向け、詠唱にはいろうとした途端。スレイプニルはその頭をアシュレイの手のひらに押し付けた。驚いて詠唱を止めると、仔馬の意志がアシュレイに流れ込む。

『何? 俺についていきたい? 馬鹿を言うな。お前は人形ヒトガタになれな

いだろう。それとも何か、馬車馬としてでも働くのか?」

魔獣は基本的にプライドが高い。当たり前だ。強靱な肉体とそれに見合う力を持っているのだから。ゆえに、ここまで言えば諦めるだろうとタカをくくっていたアシユレイだが、それでかまわないという馬の意思に思わず面食らった。

『……お前、わかってているのか。重い馬車を、お前1頭で運ぶんだぞ。首に縄をかけられて、身体を鞭で叩かれて。……本気か?』

——傷ついた貴方も、同族がいることで少しでも傷を癒せれば。

アシユレイには、スレイプニルがそう言っているように感じた。馬は気づいていたのだ。人と、魔の者の狭間に立ち、苦しんでいたアシユレイのことを。

これにはさしものアシユレイも叶わなかった。

『……そう、か。なら、共に行つてくれるか、同胞よ』

スレイプニルが首を擦り付けてくる。この仕草は、親に甘えているのと酷似していた。本来、魔獣が遣い魔にそんなことをしようものなら、一瞬で首をはねられるだろう。だが、アシユレイはユーゼリアに、人に触れることで、良くも悪くも甘くなつた。ユーゼリアのことを格下の魔獣に感謝など、普通しないものである。気づかぬうちに、アシユレイは偽りの優しさを、本物に変えることができたのだ。そして、それを本能的に悟つたスレイプニルの知性の高さにも、感嘆するばかりである。

「兎に角、俺が柵の中に入ったら、こいつが鼻面を押し付けてきたってわけだ」

「私には触れさせてすらくれなかったのに……」

恨みがましい目で馬の頭を睨むユーゼリアだが、全く相手にされていなかった。

「まあそういうわけで……こいつ、俺らが貰い受けるって形でどうよっ……」

「え!? 魔獣よ!」

「だってもうペットみたいなもんだろう」

「でも……」

渋るユーゼリアに、クオリが追い討ちをかけた。

「いいんじゃないでしょうか。どういうわけかは分かりませんが、スレイプニルがアッシュユさんに懐いているのなら。魔獣は一度懐を見せた相手には決して襲いかかりませんし」

「うう…わかったわよ。2人が、そんなに言うのなら……」

話がまとまりかけたところで、再び空気と化していた店主が割り込んできた。思わずアッシュレイの機嫌も悪くなる。今まで美女美少女と話していたのに、いきなり生え際が後退したおっさんが会話に入ってきたのだから、まあ当然といえば当然かもしれない。

「お、おい！ あんた、奴を殺すんじゃないか!? 危ないんだろ!?」

「事情が変わったな。ま、もともとこの3人の中の誰かに懐いたら、こいつはタダで譲渡してもらおう約束なんだから、あんたには問題ないだろう？ 被害を被るのは俺たちなんだから」

「ぐっ」

奥歯を噛み締め店主は引き下がった。

(やれやれ、諦めの悪い……)

ふうつとため息をつく、再び2人の方を向く。

「じゃ、そういうわけで、いいかな。とりあえず馬車と同時に馬もゲツトした、ということ」

「もつちろん！ これでお金が浮いたわ！ ただでさえ6人乗りを買って、ちよつと心もとなかったのよね」

「じゃあ、この先行られるという武闘大会に出ませんか？ 賭けが公式にあるそうですよ。勝てば一攫千金も夢じゃありません」

「それはいいわね！」

「期日に間に合えば、選手として登録もできるかもしれません。もし優勝できたら賞金がもらえますよ」

最後はこちらに顔を向けて、にやりと笑った。「貴方なら勝てるでしょう？」と喋っている顔だ。そこまで言われれば勝つてやろうじゃないか、という気になる。

「まずは、馬車ね。おじさん、あの馬車買うわ！ 150万でいいのよね！」

「……くそッ。もってけ泥棒！」

「ありがたくいただいたいきますね」  
「るんるんとスキップをしながらギルドに向かうユーゼリア。お金を一旦おろしてくるらしい。」

アシュレイはというと、スレイプニルの背中に早速またがって、高くなった視界に感嘆の声を漏らしていた。おもわず脱力するクオリ。

「中々の景色だな。お前、飛べるのか？ ……まだ無理か。ま、仕方ないか。そう落ち込むなよ」

「……魔獣と意思疎通ができるだなんて、規格外ですね。一体何者ですか？」

「なんだろうな。俺が聞きたいよ」

「ちよっ」

はぐらかされたと思ったクオリが文句を言おうとアシュレイを見上げると、彼はスレイプニルの背にまたがったまま、遠くの空を見つめていた。その横顔に、ほんの僅か、*「寂しさ」*が宿っているような気がして、クオリは口をつぐむ。

「さてと。ユーゼリアがすぐに来るだろうから、馬車のところに行つて待ってよう」

「あ、はい」

ぶすつとしていた店長をスレイプニルが急かした。頭のその大きな鎌をちらつかせるだけで、情けない声を出しながら店頭にダッシュで戻っていく。思わず吹き出した。

「アツシュさん！」

「ん？」

「わたし、暫くお世話になりますね！」

「おう。よろしく、クオリ」

「はい！」

なんだかこの2人といると、自分を偽らずにのびのびできると、クオリは思った。

\*\*\*\*\*

一晩馬車倉庫と馬小屋を借りることになった宿屋にその旨を伝えると、スレイプニルについて随分驚かれた。

「あ、あれが馬車馬かい!? 襲ったりしないんだろうね!」

「問題ない。何もしなければ、な」

「ちよつとアツシユ! 怖いこと言わないの!」

にやりと笑いながら言うと、慌てたようにユーゼリアがフォローを入れた。アシュレイは腹をバシバシと遠慮なく叩かれ、ちよつと痛がっていた。

「じゃ、行きましようか。次の目的地はファイザル! 武闘大会へ!

急げば2日目からの試合には間に合うわ。お金稼ぐわよ!」

「それから、新しい仲間に、乾杯」

「よ、よろしくお願いしますっ」

その晩、クオリは初めて翌日が楽しみで眠りに就けない、という現象に出会った。

(何もかもが、この2人といると新鮮ですね……)

楽しい旅になりそうだ。ファイザルでは一体何が起きるだろう。

(きつと、アツシユさんがまたすごいことをやらかすんでしようね)

想像は尽きなかった。

暁の空に、雲は一つも見えない。

宿の天井には降り立った一羽の黒いカラスが、赤い目を朝日に照らされていた。



邂逅<sup>かいこう</sup>  
”

【了】

——  
C  
h  
a  
p  
t  
e  
r.  
1  
”

## Chapter 2 武闘大会

### 16話「胎動」

満月の夜のことだった。

彼女の足元に、ある人影がかしずき、その名を読んだのは。

「ノーア様」

桃色の髪を持つ少女は、硝子の盃に注がれた酒を月に掲げ、その色合いを楽しんでいた。膝を組み、薔薇の香りのするそれをクイツと飲み干す様は、人間離れた艶やかさと妖しさを持ち合わせ、愛らしい姿とは似ても似つかぬアンバランスさを秘めていた。

再び人影が声を発する。

「ノーア様」

少女は煙たげにそちらへと目を向けた。

「私<sup>わし</sup>は今、ひとりでいたいのだ。去<sup>い</sup>ね、シファア」

「アシユレイ<sup>ナ</sup><sup>ヴ</sup>ユラの消息を掴んだとの報告がありました。：  
あぐツ」

バシツ

少女の細い腕からはとても考えつかないような強い力で頬を叩かれる。叩くなんてやわな表現では足りない。文字通り、女性の身体が十数メートル吹っ飛んだ。

シファと呼ばれた妙齢の女性は、それでも月明かりに照らされながら顔を上げた。地に垂れた長い黒髪は、立ち上がれば長身の女性の膝までもあるだろう。髪に対比するように白い雪のような肌と、ルビーよりも紅い瞳は、少女をまっすぐと見上げていた。赤くなつた頬が痛々しい。少女と同じく人間離れた美貌であった。

「去ねと云っておる」

そんな眼差しには一瞥もくれず、再び盃にボトルから酒を自ら注ぐと、少女は香りを燻らせた。

「……が、そうか」

盃の向こうの赤い月を見て、口元を歪ませる。ノーアは、歪に嗤つ

ていた。

あまりにも無邪気に、恐ろしく。

それは、新しい玩具をみつけた幼い少女のように。

「楽しくなってきたじゃないか」

月明かりに照らされた少女は、囁く。

## 17話「とある旅の日常」

とりあえず金を手に入れるため、10日後に始まるという武闘大会に出場することに決めた一行は、買ったばかりの馬車の上ではしゃいでいた。

「すごい！ 速い速い！」

「1頭しかいないのに、力持ちですなぁ」

馬車の窓から頭を出して外の景色を見ている銀髪蒼眼の美少女の名は、ユーゼリアⅡシャンヴリル。先の戦争で敗北を喫した魔法大国、ナルマテリア王国の元王女である。年の頃は18。唯一の王族として生き残り、身を守ってくれていた従者も死んだ今は、ソロの召喚魔道士とそこそこの名の通った冒険者として生活していた。

おっとりとした喋りで感心しているのは、クオリ・メルポメネ・テルプシコラ。こちらも人間離れた美貌を持っている。短めの浅葱色の髪から覗く耳は長く尖っており、人間では見られない黄金の瞳と共に、彼女が本来辺境の森に住まう種族、エルフであることを物語っていた。身長は人間の女性にしては長身だが、エルフの中では至って平均、ついでに顔もエルフとしては一般的だった。骨格から何からエルフと人間では違うのだから、当然といえば当然である。彼女は সেইで度々奴隷商に追いかけてまわされ、同じような境遇のユーゼリアに誘われて、彼女達と共に旅をすることにしたのだった。

「頭出すと危ないから、気をつけろー」

そして御者台に寝っ転がっている男の名は、アシユレイⅡナヴユラといった。ほんの1000年前まで魔人の遣い魔だった彼は、主のもとでヘマをやらかし狭間の空間に捨てられたのを、たまたまユーゼリアに召喚して貰ったという経歴を持つ。遣い魔だったことはまだ誰にも言っていないが、その人外の醸し出す雰囲気は既にクオリにはバレているようだ。黒髪黒眼という、人間にしてはそこそこ珍しい外見の上、長身、身につけているコートとブーツも黒という、かなり目立つ要素を持つている彼は、下界に出た現在、ユーゼリア(とクオリ)の護衛という立場で落ち着いていた。初めは多少の不安もあったもの

の、今では人間との旅も馴染み始めていた。

「そう言うアツシユだつて、御者台で寝転がつてるなんて危ないわよ」

「そいつは大丈夫。シユラは賢いからな」

背中に向けたクツシヨンの位置を調節しながら、アシユレイは寝返りをうった。

シユラと呼ばれた彼は、6人乗りの馬車を1頭で引いているとは思えないスピードで道を駆け下っている馬のことだった。会話が聞こえたのか、ヒヒンと嬉しそうに嘶く。その鞍の乗っていない背中をアシユレイがよしよしと撫でると、しなやかな尻尾がブンブンと左右に振れた。蛇のような尻尾は、馬車と馬を繋ぐ頑丈な綱にぶつかりそうだった。

「ここら、お前が力を込めたら馬車が壊れるだろ」

アシユレイが苦笑しながら注意すると、みるみる尻尾がしょんぼりと垂れる。心なしか馬車のスピードも落ちた。

この馬車馬もただの馬ではない。皮膚は紫銀の鱗で覆われ、尻尾の先とたてがみは鋼鉄のワイヤーよりも硬くしなやか。頭には鋼の鎌のような角が顔ごと覆っていて、眼はなかった。

正体はスレイプニル、魔の眷属第六世代である。だが、まだ幼体であるため、外見はDクラスの魔物と瓜二つだ。それぞれに個体識別名が生まれつきある魔獣の一員として、このスレイプニルの仔にも名があった。それがシユラ、シユラクファミディエルだ。長い為、アシユレイ達はシユラと呼んでいた。

馬車を買おうと寄った貿易都市シシームで、紆余曲折を経て結局アシユレイに懐いた次第だ。

シシームを出て3日。商人は7日で着くと言っていたが、シユラの強靱な脚力と体力により、あと1日程度で武闘大会開催の町ファイザルに到着しそうだった。この分なら初日から試合観戦ができるかもしれない。

「アツシユー、疲れたー」

「はいはい。そろそろいい時間だし、昼にするか。シユラ」

声をかけると、ゆっくりと減速してから止まる。初めは止まれと

言ったら急停止をするものだから、あのときは慌てた。むしろシユラに追突した馬車がダメージを受けたが、そう言う問題ではない。中にいた2人も額や後頭部にたんこぶを作っていたし、シユラ自身にも何かの間違いで怪我をするかも知れないのだ。まあ、多少の怪我ならばクオオリの回復魔法でどうにかなるだろうが（彼女達のたんこぶもそれで治った）。

（とかなんとかそれらしい理由を並べたててみるが……）

実は一番被害を被ったのがアシュレイだった。御者台に座っていた彼は、急停止の際慣性に従って前方に放り投げだされた。もちろん怪我1つ無く着地はしたが、驚いたのは事実だった。シユラが殊更丁寧に止まるのも、主たるアシュレイに1度とはいえそんなことをしてしまったからだ。

襲いはしないものの、実際のところシユラが懐いているのはアシュレイのみ。たかが人間とエルフなど、シユラにとっては圧倒的格下。ゆえに彼女達の言葉には従わず、無視するのが常だった。ただ、アシュレイが彼女達を大切にしているから、そばに寄ることも、身体を撫でさせるのも、許しているだけ。

まあそんなものだろう、とアシュレイは思っていたが、いつかは心を許してやってほしいとも思っている。

馬車から降りてぐぐつと伸びをすると、パキパキ鳴る肩を揉みながらシユラと馬車を繋ぐ縄をほどこにかかった。その間にユーゼリア達も昼の準備をする。干し飯がいい案配にほぐれると、腕をもらって火の近くに座る。シユラは自分で狩をしにその場を離れた。

シユラは今まで自力で狩りをしたことはない。が、幸運なことに1度、継母の狩を見たことがあるらしい。どういう手段で「目」にしたのかは知らないが（現在シユラに目は無いため）、兎に角それでなんとかなるようだった。

具体的にいうならば、気配を消して、バツと追いかけて、攻撃範囲に入ったら頭の鎌でグサツと刺す。なんとも外見から分かりやすい攻撃方法だ。

ちなみに、成体のスレイプニルは【邪眼】という特殊な方法で狩

をするが、説明はまたの機会にしよう。

しばらくしてアシュレイ達が昼餉を食べ終わる頃、シユラが帰ってきた。鎌に青い血がこびりついているのを、もう慣れた手つきでアシュレイが拭き取る。ついでに軽くブラッシングなどしてやる間に、片付けは終わった。

初日などユーゼリアは、シユラが口と鎌を青く染めたまま意気揚々と帰ってきたとき(初めての狩が上手くいって嬉しかったらしい)、絶叫してしまったのに、今では完全にスルーしている。

(慣れとは凄いもんだな…)

再び馬車に乗り込んでガタガタと走りだす。周りはずっと深い緑の木々が奥まである森。特にアクシデントがあるわけでもなくずつとこの調子なので、大分飽きてきたユーゼリアとクオリは、お互いの話に花を咲かせている。アシュレイはぼうつとしながらそれを御者台で聞いていた。

「そういえば、召喚魔道士のユーゼリアⅡシャンヴリルといえば、【孤高】の渾名で有名ですよね」

「有名ってほどじゃないわ。ちよつと珍しくて、見た目もそれなりだから、周りがはやし立ててるだけ。もつと実力がある人なんて沢山いるもの。まあ、確かに召喚魔道士でソロっていうのは珍しいけど、それだけよ」

「何体と契約を交わしたんですか?」

「4体。そのうちの1体が、この間見たやつね。グアーっていうBクラスの魔物よ。風を操るの」

「Bクラスだったんですかあ、凄いですねえ」

「一番強いのがAクラスの魔獣なの」

「魔獣! 魔獣も使役できるのに、B+なんですか?」

「うん。強力なんだけど、ちよつと事情があつてね…。ほいほい召喚するわけにはいかないのよ。魔物がちよつと、面倒な性格でね」

「へえ…召喚魔道士さんって色々大変なんですね」

「まあ、今はアッシュとかクオリがいるから、無理しなくても平気そうだけど。というか、多分私が召喚する必要もなく終わりそうね」

くすくす笑いながら話は続いた。穏やかな日差しに、瞼が重くなつてくる。耳に心地よい彼女達の会話が、アシュレイには子守歌のようだった。

「リアさん、ずっと思ってたんですけど——」

クオリの言葉を皆まで聞かず、アシュレイの瞼はずるずると落ち始める。

（ああ、眠い…）

「シユラ、何かあつたら起こしてくれ……」

その返事を聞くか聞かないかのとき、アシュレイはついに睡魔に屈した。

「ずっと思ってたんですけど、今まで【孤高】だったのに、どうして突然アツシユさんとパーティを組んだんですか？」

「ああ、それは……」

言い淀んだ。それを言うには自身の過去の詳細も言わなくてはならない。が、そうホイホイと喋るわけにもいかない。ひよつとしたらこの後、クオリがパーティを抜けて、誰かに話を——

（いや、しなさそうだわ。クオリだし）

ちらとクオリを見ると、突然押し黙ったユーゼリアを不思議そうに見ている。ユーゼリアは覚悟を決めて、話し始めた。

「実はね、私、とある者に追われているって言ったでしょう？ あれには言っていないことがあるの……」

アシュレイに言ったのと同じように、自分の出生と、どういうわけかで今アシュレイと共に旅をしているのか。簡潔な言葉で10分もかからない話だったが、ガタガタと振動が伝わる馬車の中は、静寂が訪れた。

ペパーミントカラーのクッションを胸に抱え、じっと動かないユーゼリアと、クリーム色のクッションをいじりながら何か考え事をするクオリ。御者台のアシュレイは寝ているので、先ほどの和やかな



空気はどこかに消え去った。

やがて、クオリが何か意を決したような面持ちで顔を上げた。

「……それが、全てなんですね」

「……そうよ」

「ありがとうございます。打ち明けてくださって。……わたしも、全てをお話します」

「……」

唾を呑んだ。自分の弱点ともいえるような秘密を言ったこともあるが、そんな他人の秘密を聞くこともまた緊張した。

「疑問に思いますよね。なぜ引きこもりのエルフが、里を出て流浪の旅をしているのか」

そしてクオリは過去を話し始めた。それは、ユーゼリアが思っていたよりもずっと重いものだった。

## 18話 「クオリ・メルポメネ・テルプシコラ」

わたしも元ははエルフの一般家庭に生まれた、ただの少女でした。ただ、母はわたしを産んですぐ亡くなって、父の男手一人で育てられたんです。兄弟もいませんでしたから、幼少から父の仕事場で1日を過ごしていました。そのせいか、随分な本の虫になってしまつて……。父は、里にある図書館の司書だったんです。

エルフの図書館に収められているのは、普通の絵本や物語じゃないんです。大部分が、魔法に関する本。詳細は多岐に渡りますが、例えば人間が使う一般魔法や精霊魔法、召喚魔法、ちよつと危ない方にいけば、呪術、魔女契約などですね。

「魔女契約？」

「あれ、知りませんか？ 分類では召喚魔法に近いですが、つまり簡単に言うと、魔獣や魔物を召喚して命令するのが召喚魔法。対して魔女契約魔法は、魔獣を——こちらは魔獣が一般的で、魔物を魔女契約したという文献は聞いたことがありますね——自らの力として取り込むというものです。もつと正確に言うと、魔獣を召喚する過程までは同じなのですが——」

「え、あ、ごめん。本題を続けて」

「そうですか？」

早口になりだしたクオリを、ユーゼリアが慌てて遮る。クオリは少し残念そうだったが、気持ちを切り替えると再び話し始めた。

で、どこまで話しましたっけ。そうそう、まあそんなわけで、リアさん達が想像するような本が置いてない場所が、わたしの幼いときからの遊び場だったんです。

そして数多の魔導書を絵本代わりに育ったわたしは、気がついたら学び舎——学校のようなものですね——に行かずとも、普通の子ども以上に魔法を扱えるようになりました。

もともとエルフに必要なのは、自己防衛に使う魔法と最低限の教養ですから、学校も3年ほどで終わるんですよ。それも、強制ではないので、結局わたしは学び舎には行きませんでした。教養に関しては周

りが大人ばかりの図書館にいたわけですし、本にも書いてありましたから、問題ありませんでした。父にも必要ないだろうと言われましたし。

そんなわけで、わたしには友達と呼べるような存在もなく、ずっと図書館に入り浸って本ばかり読んでいました。館内にいる司書達や、研究者達とは仲がよくなりましたが、所詮わたしはまだ10やそこらの子どもでしたから、友達とは言えない関係でしたね。

でも、そんなわたしにも「友達」ができたのです。

わたしと同じ年の男の子。きっかけは、彼から話しかけてきたからです。彼は将来研究者になりたいからと言って、毎日図書館に来ていたらしいのです。なぜ彼がわたしに話しかけたかという点、後に聞いたことには

『だって、見かけるといつも1人で本を読んでいたから、君も研究者になりたいのかと思って』

つまり、彼はわたしのことをライバルかと思ったわけですね。だから、彼がわたしに最初に言った言葉は

『おい、僕と勝負しろ！』  
でした。

クオリが窓から外を見つめた。過ぎ去る木々に何を見ているのかはユーゼリアには分からなかったが、その目は懐かしいものを思い出すように柔らかく、弧を描いていた。

結果はわたしの勝ちでした。彼はひどく悔しがって、何度も何度もわたしに勝負を挑みましたが、結局わたしは全戦全勝。と言っても、最後の方はわたしも疲労していましたし、なんとかもとの保有魔力の差で逃げ切ったといった感じでした。わたしはへとへとになりながら家に帰ったのですが、心はとても晴れやかでした。

翌日も彼は鼻息も荒く図書館にやってきたのですが、わたしは慌てて彼に尋ねたのです。何故いきなりこんなことをするのか、と。彼は将来の夢について滔々とうとうと語りだしたのですが、そこでまた一悶着あつ

てやっと、わたしが単に暇つぶしの為図書館にすることを理解してくれたのです。

彼は、ずいぶんな頑固者でしたから、思い込んだら一直線でした。分からせるのに苦労したことを覚えています。

『なんだ、そうだったのか』

こちらの苦労なんてなんのその。脱力するわたしにニッコリ彼は笑いかけました。

「それが、彼——フラウ・クレイオ・エウテルペとの出会いでした」  
クオリの瞳の色が曇った気がした。

誤解が解けると、わたしたちはすっかり意気投合してしまって、これこそ朝から晩までずっと図書館に入り浸っては魔導書の解説にとめました。

もともとわたしの方が知識は深かったので、むしろ彼の為の魔法講座といっても過言ではなかったかもしれないですね。

そしてある朝、わたしが図書館に行くと、まだ早すぎたのか、彼はいませんでした。そのころ里は涼しい場所にあつて、早朝は一枚羽織つてもまだ肌寒いくらいでしたから、わたしは図書館の中で彼を待つことにしたんです。

それまでずっと黙っていたユーゼリアが首を傾げた。

『『そのころ』って？ 他にもあるの？』

「エルフは大陸中を転々とします。里は移動するんですよ。と言つても、引越しの頻度は年に1回あるかないか程度ですけど」

すらすらとクオリは答える。

「何年も同じ場所に止まっていたら、いつ人間に数で押し切られるか分かりませんか」

広くは知られていないが、例えば奴隷商などエルフの動向をよく調べている者であれば、この引越しについては特に真新しい情報ではない。

エルフの方もそれは承知しているので、クオリは何の気概もなく話していた。

対してユーゼリアは、エルフのその人間への警戒ぶりを知り、一部の富裕層の人間と、彼らを客とする奴隷商達に対する憤怒と悲しみの感情を持て余していた。それに気づいたクオリが笑ってフオローする。

「ああ、気になさらなくて結構ですよ。生まれたときからやってきたことですし、殆どのエルフはそういうものと割り切っていますから。…それより、話を続けましょう」

図書館には2種類の本がありました。1つは誰でも閲覧可能な、一般の魔導書。もう1つは、*“立入禁止”*の階に置いてある特別な本です。その本は一体何なのか。知っているのは、魔導書を護る一部の高位の司書と、一部の高い地位にいる者たちのみでした。父も、知らなかったかと思いません。

わたしたちは、きつと貴重な魔導書なんだろうといつも階段の上を見上げていました。いつか、それを読んでみたいとも。

「そしてついにその朝、わたしは欲に負けてしまったのです」

寒さに図書館内に入ると、まるで100年の時が詰まったかのようなあの古書独特のにおい。早朝というのは深夜よりも余程人がその生の鼓動を静めるときでした。死んだような静けさの中、息をしているのは自分しかいないような錯覚を覚えるのです。

——今なら、誰にも見つからないかもしれない。

愚かなわたしは足音を潜ませて、例の*“立入禁止”*の階まで階段を上っていききました。そこはいくらかの障壁の魔道具があつたのですが、たまたま魔力切れで障壁は張っていませんでした。毎日補給する魔力は、どうやら朝に司書か誰かが補給しているようで、本当に運の良いことに、ちやうど内蔵魔力が切れたときにわたしは階段を上ってきていたのです。

思ったよりずっとすんなり中に入れたわたしは、その蔵書の少なさに少し落胆しました。「立入禁止」の部屋は狭く、そうですね、シームで泊まった宿の一部屋くらいの広さしかないのです。簡易ベッドとクローゼットをおいたらもう何も置けないような、小さい部屋。

ただ、当然その狭い部屋にはベッドもクローゼットも置いてありませんでした。あるのはびっしりと並んでいる書架。ぎゅうぎゅう詰めに本は入れてあり、入りきらないものは積み上げられて下に放置されています。階下の整然と並べられた本と比べると、まったく扱いが悪すぎます。が、埃をかぶっている本からは、何か不思議な力が宿っているように感じました

「わたしは心を躍らせて近くの書架から本を一冊抜き取りました。今でも覚えています、開いたときのあの衝撃を。中には……」

ゴクリとユーゼリアの喉が鳴った。

「中には？」

「中には……航海記が書いてあったのです。手に取ったその本は、航海日誌でした」

「……は？」

拍子抜けしたようなユーゼリアの顔に苦笑すると、クオリは続けた。

なにしろわたしは未だ嘗て「海」という場所に行ったことは愚か、見たことすらなかったものですから、初めのうちはそれが何かの日記であることしか分からなかったのです。どうやら内容が海なるものについて書かれてありそうだと分かったとき、わたしはそれはもう落胆しました。幻滅と言っても良かったでしょう。

しかし次に湧いた疑問が、なぜこんなものがわざわざ結界を張ってまで立ち入りを厳禁した場所に置いてあったのか、でした。内容は名も知らぬ島々を巡った航海記。海の書物がエルフの里にあることも

不可解でした。航海記の割に薄い本というのもひっかかりました。

そしてわたしがようやくそのことに気づいたのが、3日目の朝。あれから毎朝魔力切れの時間帯を狙って会員制の階に足を運んでいたわたしは、閃いたのでした。

封じられていた書架にあつた本は、航海日誌に始まり、料理のレシピ、恋人との手紙のやりとりなど、まとまりが無く、本気でなぜこんなものが保管されているのか分からないものだらけでした。中には愛娘の成長日記なんてストーリーカーじみた内容のものまであったのです。……何月何日何曜日、愛しい愛しい我が娘が今日はいつもとより7分遅い起床だった、とか、今日は娘が学校で鉛筆の芯を2回折った、とか。

わたしが閃いたきっかけは、あまりにも関連性の無さ過ぎる本達が同じ場所に積んであつた、ということでした。

あの本は全て、れっきとした魔導書だったのです！

全てが独自の暗号で書かれており、解読は難を極めました。とうとう最初の1冊——あの航海日誌でした——を読み解くことができました。たのは、わたしが秘密の階に通り始めて半年後のことでした。実は、家に持ち帰って解読していたのです。探知系の魔法がかかっていないと判断してのことですから、安心して。

「今なら有り得ない大胆さというか……怖いもの知らずでしたね。あの頃は……」

苦い笑みと共に漏らした言葉は、僅かな後悔を含んでいた。

立ち入り禁止の階に収められていた全ては魔導書でした。それも、ただの魔導書ではありません。『古代魔導書』だったのです！ それは古代魔法、俗にいう『失われた魔法』<sup>ロスト・マジック</sup>について記された本でした。古代魔法は今では使える者も無いほどの太古の魔法ですが、威力は絶大。もちろん魔導書も全て失われたと思われていました。…魔法を得意とするエルフだからこそ、残っていたのでしょうか。それでも、暗号化と封印という方法で不特定多数に見られるのは阻止しまし

たが。

「ロスト…マジック……」

ユーゼリアが呆然とした。

「じゃ、じゃあ、今、古代魔法を扱えるの!？」

「はい。あの書庫にあった分は全て」

目を伏せながら言った。

ユーゼリアは召喚魔道士ではあるが、下位や中位の魔法なら扱える魔道士だ。魔を志す者にとつて、1度は夢見ることの1つが、古代魔法を扱うことだった。『夢見る』だけあって、実際にそれを成し遂げた者などいないが。子供が魔法剣士に憧れるようなものである。魔法も、剣も、どちらも極めたい。そんな欲張りな者はどっちつかずになって、器用貧乏のまま終わるに決まっているのに。分かっている、憧れる。

目をきらきらさせるユーゼリアに、内心で現金だなあと苦笑しつつ、クオリはそろそろ佳境に入った昔話を完結させようとした。

それから数年、書いた人物は数人なので暗号の方式も似ており、4年ほどでわたしは半数近くの古代魔道書<sup>アーカイブ</sup>を読み終えました。といっても、実際発動してみたことはなかったのですが。

しかし、ついにわたしが毎朝会員制の階に通っていることがバレてしまったのです。里の長に告げたのは朝、魔力供給担当の上位司書、父の、友人でした。

わたしは牢屋に入れられました。わたしが既に古代魔法を使えると言ったからです。わたしは特に抵抗もしませんでした。いつかこうなると分かっていたし、古代魔道書を読み終えた充実感でいっぱいだったからでしょうか。関係者以外には嘘の罪を伝えたそうです。

牢には長老たちがいくつもの魔法封印の結界を施し、足枷には魔力吸収の印が刻まれたものを使用しました。そのうえ常に監視の兵を3人、牢の前に張り付けておく徹底ぶりです。ただ、退屈はしませんでしたね。



「どうして？」

「毎日彼——フラウが、わたしの好きそうな本を5、6冊、持ってきてくれましたから」

小さく笑みを浮かべた。

面会時間は5分程度。父も週に1度程度しか来ないにもかかわらず、彼だけは毎日、来てくれたんです。……嬉しかった。

でも、彼とも別れが来ました。それは牢に入れられてから1年くらい経った頃からでした。彼が牢に来てくれる日数が、減り始めてきたのです。毎日だったのが、1日置きに。1日置きだったのが、週に1度に。そして、ついには月に1度来るか来ないかになりました。

週一になるあたりから、わたしは理解しました。

ああ、とうとう彼もわたしから遠ざかってしまうのか——

その頃には、もう父とも数ヶ月顔を合わせていませんでしたから、わたしがお話をする相手がいなくなったも同然でした。兵は、わたしを恐れて一言も喋りませんでしたから。

父に恨みはありませんでした。むしろ、娘が罪を犯して、表で糾弾されたのは父だっただろうから、申し訳ないという気持ちしかありませんでした。

そうしてとうとう彼が来なくなってから2ヶ月ちよつと。兵が、食事と共にある紙をトレイに乗せて渡しました。外部からの物の受け渡しは全て彼らがまず目を通し、妙な魔法や暗号が無いかどうか確かめるものですからね。

「紙には、こう書かれていました。『僕は夢を叶える為に里を出ることにした。君を置いていく形になってしまつて、本当に申し訳ない。牢から出させてあげるには、僕に力が無過ぎた。だが、再び里に戻ってきたら、絶対に君を牢から助け出す。だから、その時が来たら、一緒に旅に出ないかい？』紙は、今も持っているんです」

少し頬を染め、恥ずかしげに微笑むクオリは恋する少女に他ならぬ。

(いいな、そういうの)

ユーゼリアは優しくその姿を見つめていた。

ユーゼリアの出生で現状を受け入れてくれる男性など、いないだろう。何せ、共にいるだけで常に命が狙われているのだから。

(むしろ、巻き込んだじゃいけないもの)

だから今までソロだったのだ。

——じゃあ、アツシユは？

ふと頭に浮かんだ黒髪の男の姿をかき消すように、ユーゼリアは頭をブルブルと振った。

(違う違う！ アツシユは私から一般常識を教わり終わったら、そのままお別れ……)

ふと、気付いた。

彼がいなくなれば、また灰色の日々に戻るのだろうか。クオリは多分、フラウというエルフに出会えればそこでユーゼリアとは別れるだろう。

そうしたら、また、独り。

(……それは)

嫌だ、と思った。

(あれ、私いつの間になんか自分がままたんたんだろ)

確かにアシュレイは強いが、彼だって無敵ではないのだ。小さな掠り傷から毒を受けて、死に至ることだってある。

(……コルトみたいになんか)

どんなに沢山の敵でも、どんなに大きな魔物でも、必ず幼いユーゼリアを守ってくれた、あの広い背中が、たった一本の毒矢に倒れたのだ。

我に返ったクオリが咳払いをした。

彼が旅立って数十年、わたしの生活は幽閉される場所が牢から例の部屋に移った以外、何も変わりませんでした。外に出ることは無く、ひたすら本を読む毎日。

「どうして移ったの？」

「脅したんですよ、わたしが」

穏やかでない単語にびっくりしているユーゼリアをみて、笑った。「彼がいなくなつた1ヶ月後、くらいでしようか。自分から言つたんです。『暇だ、あの本を持ってこい』って」

そうしたらその部屋に連れていかれました。わたしは数十年そこにいました。読む本には困りませんでしたし、古代魔法の研究が随分進んだので、実りある日々でしたよ。

「数十年……」

「正確には、どれくらいでしようかねえ。6,70年はいたと思ひますよ」

「そ、そんなに!?!」

せいぜい3,40年と思つていたユーゼリアは高い声を上げた。

「そしてある日、唐突に、里は崩壊しました。奴隷商の一団に襲われたんです」

どうして里の場所が割れたのかは分かりませんが、それは若い男達が狩りに行つている時間帯、外貨欲しさに中から手引きした愚か者がいたんでしよう。老人は殺され、女子供はどんどん捕らえられていきました。

民家には火が放たれ、その火は図書館にも燃え移りかけていたと思ひます。

「……なぜ」

「『なぜ、わたしが生き残つたのか?』……父が、逃がしてくれたんです」

扉を守る衛兵も賊を迎え討つ為に出払つていて、非戦闘員の父は図書館の消火にあたつていたんでしよう。密かに4階に上がつて、わたしを部屋から連れ出しました。裏口の扉をあけて、

『もつと早くに出してやれなくてすまない。逃げてくれ。お前には生

き残ってほしい。古代魔法が伝わっている里は多くない。この里はもう駄目だろう。古いにしえの魔法を、途絶えさせないでくれ』

と。一言一句忘れずに覚えていますよ。それが不器用な父の、最後の言葉ですから。わたしは『今こそ古代魔法を用いるべき時だ』と里に戻ろうとしたのですが、

『まだ上手く制御ができない魔法では、あの商人たちには勝てない。今は逃げてくれ』

そう言って、わたしの背を押しました。

それからわたしは逃げて逃げて…、もとからわたしの存在を見たわけではない盗賊は結局わたしをのがし、わたしは体をすっぽり覆い隠すローブ以外はなにも持たずに、世に放り出されました。

それからなんとか素性を隠しつつギルドを伝って生きてきました。が、奴隷商人というのは鼻が利くもので、どこからともなく沸いて出てはわたしを捕らえようと襲ってくるのです。

そのせいでパーティを組むとパーティメンバーにまで被害が出てしまつて……。それでも魔道士がソロでできることには限界がありますから、

「だから、臨時パーティを組んでいたつてわけね」

「はい」

クオリが視線をユーゼリアに戻した。にこりと笑う。

「全然面白くありませんが、これがわたしの全てです。だから、自画自賛のようですけど、魔道士としてはかなりの戦力になれるかと思えますよ」

「…そうみたいね。古代魔法って、どれくらいの数使えるの?」

「全部で20種類くらいです。あまり沢山では無いんですけど…」

「十分だわ。古代魔法って効果がとても大きいんでしょう? 噂に聞く限りだと」

「そうですね。威力の面ではかなりのものかと」

見てみたい。

一魔道士としてそんな衝動に駆られたが、一般に知られていない魔

法である以上、闇雲に使うわけには行かない。何のためにわざわざ暗号文にして後世に伝えられたかを考えれば、なおさらだ。

古代魔法は、例えば魔獣と遭遇したなどの状況以外では使えないだろうと思つた。特殊な魔法は彼女がエルフであることをばらしやすくなつてしまうかもしれないからだ。本人にその意志がない限り、無理強いさせるようなことはできない。

「けっこう長く話し込んでしまいましたね」

「…うん。打ち明けてくれて、ありがとうございます。…ん？　じゃあクオリつて今何歳!？」

「今年で多分103になります。人間でいうと、だいたい30歳手前あたりですかね。それよりそろそろ休憩挟みませんか。アツシユさん、止めてもらえます？　…あれ、アツシユさーん？」

絶句したユーゼリアを放つて小窓から顔をのぞかせると、腕で顔を隠したまま（おそらく木漏れ日が眩しかったのだろう）動かないアツシユの姿。顔は見えないが、静かに上下する胸で、彼が寝入っていることがわかつた。

「寝てますね。そつとしておきましようか」

「珍しいわね…疲れてるのかしら。ああでも、アツシユがいないと馬車が止まらないわ」

そんな会話をしていると、馬車がだんだん減速し始めた。あれつと小窓を覗くと、特に障害物もないのにシユラが道の端に馬車を寄せて足を止めていた。

「あ、ありがとう、シユラ」

普段は無視するのに、この時はシユラが嘶き返した。

——礼はいいから、静かにしろ。

なんとなく、そう言われたような気がしたユーゼリアだった。

だが気をつけていても流石に馬車の扉が開くと気配でわかるらしく、気を使われていた当の本人は目が覚めた。

「ん、休憩か？」

「あ、うん。そう。アツシユもお茶はいかが？」

「頂こうかな」

ユーゼリア特製の紅茶は、鍋で沸騰した熱々のお湯のおかげでまたアシュレイの舌を火傷させ、悶絶するアシュレイと声を上げて笑うユーゼリア、吃驚するクオリと、賑やかな休憩づくりに一役買ったのは、いつものことである。

## 19話 「闘争の街ファイザル」

「ここがファイザルか……」

「お尻が痛いです〜」

「こんなの慣れよ、慣れ！ 最近乗ってなかったけど、大して痛みも無かったわね」

三者三様の反応を示しつつ到着した一行は、だがまだ城壁の中に入っていないかった。

門前で並んでいる滑り込みの大会参加者や商人達が、1人1人顔認証と通行料を払っているからだ。入場料大人1人1000リール、子供は800リール。ちよつとお高いが、それが大会中の町の治安に役立てられるならと、皆溜息を呑み込みつつ支払うのだ。

「はい、アツシユの分ね」

「そういえば、シユラについては何か言われるでしょうか」

お小遣いを貰う子供のような気分のアシユレイが自分の通行料をユーゼリアから渡されていると、クオリが言った。

「まあ、ここはDクラスの魔物だといえれば問題ないだろう。まさか兵がエルフだとは思わないし」

「そうね。馬車馬が魔物——本当は魔獣だけど——というのも、多くはないけど、例えば大商人だったりすればけっこう聞く話だわ。冒険者では珍しいかもしれないけれど……。まあ、なんとかなるでしょ。多分」

(……まあ、アツシユさんに任せておけば、なんとかなりそうですね)  
ユーゼリアの言葉にやや心配そうな顔をしつつも、内心人任せなことを考えていたクオリであった。

それにしても、と、

「大会には余裕で間に合いましたね。シユラ、流石です」

褒めてみるが、完全にスルーされる。アシユレイがやれやれとたてがみを撫でると、尻尾をブンブン振って喜びを表すのだ。

その様子に、口を尖らせたユーゼリアが小声でクオリに話しかけた。

「ほんとに、全く懐く様子がないわね。私たちには」

「仕方ないです。だって子どもとはいえ、第六世代の魔の眷属なんですから。寧ろ、人やエルフを乗せた馬車を引いてくれている事自体信じがたいです。…アツシユさんって、何者なんでしょう……」

「さあ、それは私もわからないけど……。魔獣が懐く件に関しては、アツシユだから、っていう理由で終わりそうだわ。彼、何でもできるもの。剣はどう考えてもBランカー以上、この間簡単な料理も出来るって聞いたし、馬の扱いにも長けてるし、その上魔獣に懐かれて…そういうえば、彼、狩りもできるのよ」

思い出したように言った。

ユーゼリアが言うことには、シシームに着く前日にたまたま食料が尽きてしまい、ユーゼリアが罫をいろいろキャンプのそばに仕掛けておいたところ、気がつけばアシュレイの姿がない。まあいいかと放っておいたら、大した時間もなく兎を2羽獲ってきたというのだ。

「え、剣で、ですか？」

「そうみたい。なんか、そこらに走っていたのを見つけて剣を投げた、みたいなことを言っていたけど…。あ、短剣だけどね、一応」

「それでも、走っている兎を短剣の投擲で仕留めるって……」

「ねえ？　ほんと、何でもできるから、彼と一緒に旅してからもう大助かりよ。罫じゃあ捕まえるのに時間かかるしね」

笑いながら言うユーゼリアだが、クオリは笑えなかった。

（魔獣に懐かれる人間なんて聞いたことがない。エルフでもないし、彼は一体……）

無性に、アシュレイⅡナヴユラという人物の正体が知りたくなつた。ふと思いついて、ユーゼリアに耳打ちする。

「ところでリアさん、提案なんですけど……ごによごによ」

「……それいい！　採用！」

「何がだ？」

突然現れたアシュレイに飛び上がりながらも、なんでもないとユーゼリアと2人でごまかした。訝しげに2人を見ながらも、続きをせがんだシユラのブラツシングに戻ったアシュレイに、ユーゼリアと2人



でホツと息を吐く。

結局、シユラについては“Dクラスの魔物”で話は通り、無事門を抜けることができた。

「さて、宿に向かって走るわよ！」

「なんでです？」

「早く宿をとっておかないと大会期間中ずっと野宿する羽目になるわよ！ この時期ファイザルは余所者で大賑わいなんだから！ この際宿のランクなんて二の次、部屋が空いてそうなところからドンドン行く！」

妙に手馴れた感のあるユーゼリアに従い、片っ端から宿を覗いていくが、案の定部屋は全て埋まっていた。

「うう、やっぱりギリギリすぎたかあ…」

やや諦めの混じった10軒目の宿。恰幅の良いおぼさんの店主に尋ねると、

「ああ、申し訳ないね。2人部屋がちょうど1部屋だけ空いてるけど、3人にはちよつと狭いなあ」

「2人、ね……」

「ユリイとクオリはここで泊まるといい。俺は馬車の中で寝るとするよ」

困ったように眉を寄せるユーゼリアに、横からアシユレイが言った。おぼさんがおやつと目を見開く。

「そんなことできません！ ならわたしが…」

「いいからいいから。俺の方が頑丈だし、毛布をいくらか借りれば問題ない。安い馬車でもないし」

「でも、アツシユさんは大会に出るんですから、ちゃんとした休養を取らないと……」

「おや、兄さん大会出場者なのかい！ そうならそうと言ってくれなきゃあ！」

そこでおぼさんが口をはさんできた。ぽかんとしているアシユレイの代わりにうんうんと頷くと、彼女は立派な胸をどんと叩いて言った。気のせいかな息が荒い。

「ならちよつと小汚いけど、うち旦那のベッドを使っておくれよ！」  
「え？」

「サービスだよ、サービス！ 私ら夫婦、っていうか、ここらで宿を経営している家はみーんな大会で儲けさせてもらってるからね！ さあさ、これがお嬢さん達の部屋の鍵ね。290号室！ 2階の一番奥だから、わかりやすいよ。お兄さんはこっち！」

「え、待て、俺大会、え!?!」

会話についていけないアシユレイは、おばさんに手を引かれるままにカウンターの奥の方へと消えていき、あとには苦笑して手を振るユーゼリアとクオリだけが残された。

「あれ、絶対アツシユさんの顔が良いからサービスしてくれましたよね……」

「私、アツシユが驚く顔初めて見たわ。……ふふん」

「……」

「と、とりあえず荷物を置いて、参加申請してきましょう！」

荷物を置いてまた玄関口まで戻ってきたものの、アシユレイが帰ってくる気配は無かった。クオリと相談した結果、

「……ま、私たちが申請しちやいましょうか」

という結論に至る。

2人で通りを歩くと、宿を探していた時にも思ったことだが、随分人通りが多かった。シームよりも更に広い通りなのに、気を付けないと5歩歩かないうちに誰かの肩にぶつかってしまうほど、混雑している。

受付場所を知っているのは自分だけなので、クオリとはぐれないように時折後ろを見ながら向かっていた。

「クオリは大会見るのも初めてだっけ？」

「はい。今まで人通りが多いところは避けていたので……」

「ああ、そっか」

やっと着いた参加受付は、町のはずれの西門の裏側に屋台を出して行っていた。例年通りなら、2日前の夕暮れともなればもうとつくに皆申請を済ませており、受付の周りは実に閑散としたものであった

が、今日はどうも勝手が違うようだった。

「随分、混み合ってるわね……」

「そんなに変ですか？ 町中も人通りが激しかったですし……」

「私も2,3回しか観に来たことはないけど、この時間になったら受付は空いているはずなのよ。参加受付は大会の2日前の日が沈むまでだから、皆もうとつくに申請は済ませてるわけ」

「なるほど。じゃ日没までもうすぐですから、早く行きましょう！」

今度はクオリが立ち止まったユーゼリアの手を引いて、ずんずん人混みの中へ歩いていった。

「こんな混んでるなんて……それに、皆一般人だわ。選手じゃない。気になるわね……クオリ！ 私ちよつと聞き込み調査してくる！」

「え!?!」

「大丈夫！ やり方は係の人が教えてくれるから！ あ、あとこれがアツシユの大会参加費ね！」

それだけ言つてクオリに10000リールを手渡すと、波打つ銀髪は人集りに消えていった。

残されたクオリは、先ほどまでユーゼリアがいたからこそ紛れていた“人混みの恐怖”が蘇り、肩をややすぼめながら逃げるように受付まで辿り着くと、蚊の鳴くような声で、

「あのう……」

と声をかけた。

「はい！ こちらは大会参加希望者受付カウンターです。大会参加希望者の方ですか？ 個人部門とチーム部門の2つがありますが、いかがでしょうか？ 個人部門はお一人様、チーム部門は2人以上でのご参加となります。費用はどちらの部門もお一人様10000リールとなっております」

快活な笑顔とともに立て続けに言われ、たじたじなクオリだが、なんとか要件を伝えられた。ギルド職員が優秀なのと、後ろの人ごみの目的が参加申請に関係なかったことが幸いしたようだ。

「はいはい！ では参加希望者のお名前と失礼ですがご年齢、ランク、職業をこちらにお書きください。代筆でも構いません」

受け取ったペンで個人部門参加者の欄にアシュレイの名を書いた。係員はランクの欄を見ておや、と眉を上げたが、何事もなかったように再び営業スマイルを浮かべた。このあたりに、彼女が若いながらも激戦を極める武闘大会参加受付の係員を任された理由（わけ）が見える。

「個人部門アシュレイIIナヴユラ様、22歳男性、Fランク剣士、魔法は使用しない、で間違いございませんか？」

「はい」

「かしこまりました。では個人参加1名で、参加費用が10000リールとなります。……はい、ありがとうございます。それではこちらをお付けください」

クオりに白いバッジが渡された。花をモチーフにしているようだ。小さな花が塊になって咲いている様子が描かれている。

「こちらのバッジは個人部門参加者の証となりますので、紛失のないよう、よろしくお願いいたします。そしてこちらが参加申請の写しです。これが参加申込書にもなります。お受け取りください」

渡された紙は先ほどクオリが代筆した申請用紙の写しで、真ん中に大きく赤いインクでギルドの紋章が捺印されていた。

「そちらの参加申込書とバッジが揃わないと大会には参加できませんので、大切に保管なさってください。申込書の再発行は出来かねますので、悪しからず」

神妙な面持ちで頷き、紙とバッジを鞆にしまうクオリにくすりと笑うと、係員は笑顔で彼女を見送った。

「以上で参加手続きの全ての過程を終了とさせていただきます。頑張ってください！」

笑顔に勇気づけられて再び人混みの中に向かう。なんとか抜け出ると、ちよつと離れたところでユーゼリアが待っていた。

「お疲れ！ できた？」

「なんとか……」

ユーゼリアは快活に笑った。道端のベンチに2人腰掛けて疲れを癒す。

「で、結局あの人集りはなんだったんです？」

「そう、それよ！ あのね、クオリもギルド加入の時に多分話を聞いただろうけど、武闘大会で優勝すれば賞金が出るでしょ。その他に何か不測の事態の対応の為にS系ランカーが賓客の護衛としてつくのよ」  
「そういえばそんなことどこかで聞いたような……」

遠い昔を思い出すような仕草とともにクオリが呟くと、ずずいつとユーゼリアがクオリににじり寄った。咄嗟に首だけ逃げるが、ガツと引つ掴まれた腕の力がいつになく強く、逃げ場はなくなった。

「それが、なんと今年はSSランカーがいらつしやるらしいの！ それも…それもよ！ あの！ 【竜騎士】カメラリアⅡシルヴィオスなのよ！」

クオリの記憶が正しければ、大陸にSSランカーは3人しかいなかったはずだ。Sランカーは9人と増えるが、それでも冒険者全体の数から見ると、異常な少なさである。

そして、その【竜騎士】カメラリアといえば……

「確か…最年少のSSランカーでしたよね。4年前でしたっけ。19歳でSSランク取得って、大陸中で大騒ぎでしたね」

「そう！ しかも、私にとってあの人は特別な存在なの。なんてったって、同じ召喚魔道士なんだから！ 大陸中の召喚魔道士は彼女を目標とするのよ。カメラリア様をまさかこの目で見れるだなんて……はあ」

「『召喚魔道士は弱い』という定説を覆した人でしたね。わたしも会ったことはありませんけど、噂くらいなら耳にしていますよ」

その時だ。彼女たちの背後から恨めしげな声がかかった。

「ユリイ……クオリい……」

「ひゃああつ！」

悲鳴をあげながら後ろを振り返れば、ひどく憔悴した様子のアシユレイ。目線を泳がせながらユーゼリアがクオリの手から参加バッジをひったくり、彼に押し付ける。訝しげにそれを眺めるアシユレイに、早口で言った。

「……あの、えと、色々ごめんっ！ はいこれ！ 大会参加の証。その

コートにつけておいてね」

「いや待て。まずは俺に言わせろ。…大会参加って、何の話？ 俺ら賭けしにここに来たんじゃないの？」

「だってほら、勝ったら優勝賞金でるし！ それに、ぶっちゃけ誰もアッシュの実力を知らないから、賭けでもがっぽり儲かるというか……」

徐々に尻すぼみになっていく声にアッシュもため息をつくとき、「やれやれ仕方ない」という風に頭をぽりぽり搔いた。

「まったく…一言言ってくればよかったのに」

「サプライズにしたかったんですよ」

先ほどより更に深いため息をつくとき、最早どうでもよさげに「…ああ、そう。もういいよ。勝手にするがいいよ」とかなんとかブツブツ言い始めた。なんだか随分様子がいつもと違うが、それだけあのおばさんがアッシュの鋼鉄の精神を削りまくったのだろうか。

背中を丸めてベンチに腰掛けたアッシュは、手元のバッジを見るときもなしに眺めると、ぽつりと口を開いた。

「…これ、何の花だろう？」

「エーデルワイス。花言葉は “勇気”。ちなみにチーム部門は青いバッジで、花はブルースター。 “信じあう心” という花言葉なの。ぴつたりでしょ？」

ふうん…

微笑み、沈む夕日にバッジを照らす。白い花は橙色に染まった。

(勇気…か……)

翌日、アッシュは大会前日となってますます賑わっている町を一人歩いていった。

手慰みにぽんぽんと右手で小さな巾着を投げては取り、投げては取りしている。チャリチャリと小気味良い音を立てるそれには、いくらのお金が入っていた。今までちよつとずつアッシュが貯めていた、いわゆる “お小遣い” である。金額は4000リールほど。

彼はこれから武闘大会用の剣を買うつもりでいた。

「へい、らっしやい！」

威勢のいい声が出迎える武器店に入ると、いつぞやのポルスとは比べ物にならないほど沢山の武器、防具が売っていた。試しに目玉商品と思われる鎧の近くに寄ってみると、目を丸くした。

(こりやまた随分な高級品だ……)

鎧は魔法伝導率が非常に低いことが特徴の貴重金属である断魔鋼オリハルコンがいくらか混ざっているようで、魔法耐性が高いらしい。ついでお値段も高い。

現在の所持金の10倍出しても買えない鎧は置いておき、量産品の剣がズラリと置いてある所に行く。駆け出しと思われる装備の若い冒険者が、1つ1つ手にとっては値札を見、「ううん……」と唸っていた。実力はさておき、金のない者は財布と相談してものを妥協するしかないのだ。

少し離れたところから壁に飾ってある剣を見渡し、目にとまったものを近くに寄ってみては再びじつくりと眺める。

(流石にこれっぽちの金じゃいい剣なんて買えないな……)

そもそも彼が何故、最高級品といってもまだ足りない程の剣を持ちながら、新たな剣を求めて武器店にやってきたのか。それは、今朝の回想から始まる。

朝の5回鐘が鳴る前に目が覚めてしまったアシュレイは、いつものように着替え、剣を腰に携えようとしてふと気づいた。

(——この剣、大会で使うのか?)

この剣は——いつだったか説明したかもしれないが——かつてアシュレイがまだ遣い魔だった頃、主人ノーアに造ってもらった魔剣だ。そう、魔剣なのだ。

魔剣といえは何かしら特殊能力がついている武器のことであり(それが例え槍だとしても分類上は【魔剣】なのである)、もちろんアシュレイの剣にもその能力はあった。だが、アシュレイの場合一般的に言われる魔剣とは少々勝手が違っているため、こうして剣を買いに来たというわけだ。

色々見てはいるが、あまり良さそうなものがない。ここは見立てのプロに任せたほうが良いと、カウンターで暇そうにしている男に声をかけた。

「すまない、できるだけ丈夫な剣が欲しい。予算はこれで買える程度で」

「ん？ ちょっと失礼…」

そういつて巾着の中身をカウンターにぶちまけると、ひいふうみいと硬貨を数え始めた。「うーん」とうなると、難しそうな顔をする。

「4760リールねえ。で？ 兄さん、〃丈夫〃つて、切れ味はいいのかい？」

「それは二の次だ。とにかく丈夫な剣がほしい。種類はなんでもいいが、できたら長剣の類が嬉しいな」

「でも兄さん、あんたなかなかよさげな武器を持つてるようだが？」  
「今回はちよつと訳ありでね。これは使わないことにしてるんだよ」

流石、御目が高いね。ニヤリと笑いながら言うのと、店主は照れたように頭を掻いた。

「防具と武器のレベルが伴ってない冒険者なんざなかないが…まあ、うちはちゃんと金払ってくれりやあそいつが誰でも構わねえや」

「助かる」

そうして奥から持ってきたのは大した装飾も施されていない長剣。いかにも〃質実剛健〃といった感じで、僅かに赤みを帯びていた。

「これア5%くれエだが硬赤銅アーケライトが混じってあんのよ。聞いたことあるか？ アークライト。〃軽くて丈夫！〃が売りだ」

「いや…初耳だ」

「ふむ。まあ一言で言やあ、高級金属の1つだよ。

ほら、そこに置いてある鎧オリハルコンに混ぜ込んである断魔鋼ミスリルと同列つっわけだ。オリハルコンや魔導銀アダマンタイトなら聞いたことくらいあんだろ。有名だからな。これア性質で言えば、厳剛鉄アダマンタイトに近いかな。そっちは知ってるか？」

「ああ、それくらいなら。世界で一番硬い鉾石だろ」



「そうそう。ま、アークライトはそれに比べるとかなり見劣りするが、それでも一般的に武器に使われるような金属よりは硬い。で、話を戻すとだな」

手で鞘の上から剣を叩いた。

「これがそのアークライトがちよびつとだけ混じってるから、全部鉄で作る武器よりも少し軽くなるし、おまけに硬度も上がるつー代物だ。お値段は50000リールなんだが、まあそこは兄さんの出世払いで返してくれや」

豪快に笑う店主には、好感が持てた。

「悪いな、助かる。この大会が終わったあとには残りの金額も返すよ」  
「お、兄さん大会に出るのか！ わはははは、頑張れよ！ できるだけシールドの奴らとカチ合わないよう、祈ってやる！」

店主に“祈る”なんて行為も言葉、随分シールドに映る。

鞘のベルトの長さを調節しながら、前回は誰それが強かっただけの、人気負けしてただのという、だいぶ店主の主観が入った与太話を聞かされながら、アシユレイは一瞬で中身が消え去った巾着を意味もなく弄んでいた。

## 20話「第一次予選」

『おはようございます！ 9回鐘が鳴りました。冒険者ギルド主催、第64回大武闘大会の開催をここに宣言します!!』

わああああああ!!!

会場が歓声に包まれる! 男も女も、大人も子供も関係なく、席から立ち上がって自分の応援する選手に声援を送っていた。もちろん、その中にはユーゼリアとクオリの姿もある。

「すごい熱気ですね!」

「ほんとね。ちよつと後ろの方だけど、席が取れただけラッキーだったわ」

「あ、それならですね、いい魔法があるんですよ。【我請う、大気に遊びし自由なる君よ、狭間の先を見つめる瞳とならんことを】」  
「わっ」

途端、ユーゼリアの視界がぐぐつとズームインされ、たまたま視界を向けていた司会の顔が目の前にあるように拡大された。なんだか目が回りそうだ。

「もう少し遠くから見たい時はですね、魔力を手のひらから出しながら手をこうすると、調節できます。逆の動きをすればまた拡大できますよ」

クオリがその反応に笑いながら、手のひらを顔の前で押し出すようにする。確かに今度は司会の体全体を見れる程度になった。もつとやり続け、自分のちょうど良いアングルに持つていくと、今度はユーゼリアは試合場を観察し始めた。

なんてこともない、極めて一般的な試合場だ。

地面は固い砂で作られた石舞台のようになっており、円形状のフィールドと観客席を隔てる高い壁の間には幅2m弱のくぼみがある。観客席は10mほどの塀の上からすり鉢状に座席があり、試合での攻撃の余波が当たらないように工夫されていた。

さらに、この塀は1つの巨大な魔道具らしく、戦闘が始まったら担当の者達が一斉に魔力を込めることで、絶対不可侵の魔法壁が出現す

るようになっていた。もちろん視界は確保されてある。後部の座席や、会場に入れなかった観客にも見えるよう、空には映像を映し出す魔道具が5個ほど、気球でふわふわと浮いていた。かなり巨大な2D映像だ。

「うわ、高級そう……」

「リアさんがそれをいいますか？ それより、まずは予選からですよ。ね。どうするんでしょう」

声をたてて笑いながらクオリが言った。

もう出場者であるアシュレイは別に呼ばれた部屋へと移動していた。ところが、会場に彼はおろか、出場者は誰もいない。他にも疑問の声を上げているものはいた。だが、多くの観客は動じていない。むしろ慣れっこだった。特にファイザルに居を構えている民衆などは、2年ごとにやるこの武闘大会の席取りからなにか、もはやプロである。

『司会はわたくし、普段は冒険者ギルドファイザル支店受付を任せておりますモナイスリクス。解説はSランカー冒険者、カスパールスパタでお送りします！』

『よろしく』

きやあああー!!!!

カスパール様ああ!!!!

ひっこめこの野郎お!おお!!!!

すてきー!!!!

こつち向いてー!!!!

うおおお!!!!

きやあああー!!!!

金髪碧眼の美青年が拡声魔道具を口元にもって片手を上げた途端、物凄い歓声が会場を包んだ。9割5分方女性観客の黄色い声だが、ちなみに残りの5分は太い声で叫ぶ独身の野郎共の大ブーイングである。

いきなりの熱狂ぶりにびっくりしたクオリだったが、ユーゼリアもノリに乗ってきやーきやーはしゃぐので、じきに笑顔で一緒に歓声を

上げていた。初めてのことばかりで、全部が新鮮だった。パツと画面が切り替わり、表が映し出された。

『武闘大会の日程をお知らせします。』

- 1日目、個人部門第一次予選、第二次予選。 チーム部門予選
- 2日目、個人部門第一次本戦、二次本戦、
- 3日目、チーム部門第一次本戦、第二次本戦
- 4日目、チーム部門準決勝戦、決勝戦
- 5日目、個人部門準決勝戦、決勝戦、表彰式

この日程表は会場外の掲示板にも大きく載せてありますので、よろしければご覧下さい。個人配布は行っておりません。

では早速、個人部門第一次予選を始めます！』

わああああ!!!

『シード権保有者は計9名、ランクAー以上の冒険者とさせていただきます！』

司会モナの言葉に小首を傾げたクオリが、ユーゼリアに尋ねる。

「シード権？」

「今年は特に多いとはいえ、毎回100人を超える参加者がいるの。大会は5日間って決まってるし、というわけで、毎回武闘大会の一般参加は予選からあるわけ。でも予選は毎度毎度、気が遠くなるような1日がかりのものなのよ」

歓声でユーゼリアの声がかき消されそうになるが、彼女はクオリの耳元で精一杯叫んだ。

「それで人数を絞ったらやつと本戦なの！ で、シード権保有者ってというのはその予選をパスできる人達のこと！ 与えられるのはAランクとか、実力者だけだけどね！」

『これから第一次予選のルール説明をさせていただきます！』

「3日目と4日目は3人でお祭りを回れそうですね。後でお金は入ってくるんですから、沢山いろんなもの買いましょうね！」

「アッシュが優勝するのが当然っていう風に取りれるけど？」

『第64回武闘大会個人部門、第一次予選は、〃兎狩り〃!!』

「だって、アッシュさんですから」

割れるような喝采の中、くすりと笑うとユーゼリアも領き返した。「確かに。アッシュが負けるところなんて、想像できないわね。よし、奮発してレストランとか行きましょ！」

\*\*\*\*\*

懐中時計を持った男性が、スタッフに耳打ちする。スタッフは静かに頷くと、声を張り上げた。ざわめきが消える。

「開始時間になりました。これより個人部門第一次予選を始めさせていただきます」

ところ変わってアシュレイ他個人部門出場選手たちは、現在森の入り口に集まっていた。後ろは草原、その向こう、あまり遠くないところにファイザルが見える。今ちようど9回鐘が鳴り終わったところだった。

「今年度個人部門第一次予選は『兎狩り』です。

ルールを説明させていただきます。この森と草原には半径3kmほどの円形の結界が張られています。強度はそれほどありません。破壊行為は失格とみなしますので、ご注意ください」

スタッフの1人が何かぶつぶつ唱えると、魔道具を起動させた。ヴン…

明滅をいくらか繰り返すと、やがて淡い青に光る結界が展開される。

スタッフ数人と選手達は、薄い結界で隔たれた。

「この結界の内側に、40匹のフェアラビットがいます。うち20匹は首に赤いリボンを、20匹は青いリボンをつけているので、すぐお分かりになるでしょう。

第一次予選内容は、15回鐘がなるまでにフェアラビットを捕獲することです。剣、魔法、罨、なんでも有り。人から奪い取るのも有りですので、ウサギを捕まえたからと油断は禁物です。

ただし、フェアラビットを殺してしまうと失格です。もちろん、選手の命に関わるような強力な攻撃も禁止となります。

ここには計61名の選手が集められましたから、うまくいけば、半数以上第二次予選に通過することができます。頑張ってください。

なお、結界内の様子は飛行型映像転送魔道具で会場に中継されています。壊したら弁償ですから、お気をつけて」

そこで一旦言葉を切る。深く息を吸うと、腕を振り上げた。

「それでは、予選、開始！」

「フェアラビット…って、何でしたっけ？」

「高級食材の1つね。お肉が柔らかくて、筋もないし、調理方法次第でどんな料理にも合わせられるの。その上脂身も少なめで、女性にも人気のよ。大きさは大体…これくらいかな」

そう言っ手手のひらで表現する。野兎よりもふた回りくらい大きい。

「しかも、なんとCクラスの魔物に認定されているのよ」

「ええ!? それじゃあ意外と強いんですか？」

「違う違う。そうじゃなくて、フェアラビットの最大の特徴はとにかく逃げ足が速いこと。並のCクラス魔物より、ずっと速いらしいわ。しかも持久力もある程度あるし、駆け出しからトップスピードに乗るまでにほんの数秒もかからないらしいの。だからなかなか捕まらなくて、それで高級食材かつCクラスの魔物に認定されているわけよ。あ、あと、主な生息地はフェイ・ド・テルム帝国だからなかなか国にはいれないっていうのもあるけど」

「へえ」

「多分、参加者の3分の2の数のフェアラビットを用意したのも、捕まえられない人がわらわら出てくるからだと思う。足切りとしては、まあよくあるわね。ちなみにあの兎、売ったら1羽で1万はくだらないわよ。多分生きてたら倍以上の額で売れるかも」

「いちまんっ!? 魔道書と同額ですか……」

それを、たかが大会予選の為にひよいひよい用意するギルドの儲けつぷりはどれほどだろう。ついつい単価が高い魔道書で換算してしまうのは、魔道士の性<sup>さが</sup>である。

「おまけにうさぎだからか聴覚もすごいっていうし。…んー！ もう1回でいいからまたフェアラビットのハーブ包み焼き食べたいなあ！」

「食べたことあるんですか!？」

「あー…まあね。何年も前に」

そこでクオリも王宮時代のことと気づき、頷くに留めた。

「もし手に入ったら、リアさんお料理できます?」

「そうねえ…流石にプロの味とは行かないけど、そこそこ行けると思うわよ? でも、なんで?」

ふふーん、と意味深な笑みを浮かべるクオリを不審気に見やる。

「きつとアッシュさんなら野生のフェアラビットでも捕まえられますよ」

「ええ!? 流石に無理よ。そもそも個体数が少ないものだし、帝国は、ちよつと入りにくいから」

そうこうしているうちに、画面の中の選手達は皆森の中に入って兎を探し始めていた。2人も目印になる黒髪を探すが、見当たらない。木々が密集していて視界が悪いというのもあった。

「大丈夫かしら…」

\*\*\*\*\*

連れが心配していることなどつゆ知らないアッシュレイは今、木登りをしていた。背の高い松のような樹を器用にするすると登ってゆく。(しかし、フェアラビットか…:懐かしいな)

実は彼、遣い魔時代に一時期フェアラビットの乱獲をしたことがあった。ノーアがその味覚にハマったのが原因である。彼女のマイ

ブームに応える為、毎朝毎晩主産地であるフェイ・ド・テルムのとある森に足を運び、肥えた兎をかつさらっては持ち帰った。その際強者について回る魔物達を置きっぱなしにしてきたことについては、少し申し訳なく思っている。

結局何が言いたいのかって、

(これくらい、俺にとつちやお茶の子さいさいってね)

「よっ」と声を出して一番高い枝に飛び乗ると、下の森を見下ろした。この森に生える木は背の高い針葉樹より、横に伸びる広葉樹が多くを占める。他の木より数メートル上方の視界だが、おかげで目的のものはすぐに見つかった。

パラパラとプロペラが回るような音がすると思ったら、横に映像転送魔道具が浮いていた。しっかり目が(相手に「目」はないが)合ってしまったのに少々羞恥を覚える。

(ユリイと目が合っていたりしたら恥ずかしいな。：なんだか、よくわからないが)

そのまま躊躇なく地面に飛び降りる。魔道具もすっかりその姿を追う。思ったより機敏な動きができるらしい。小枝を叩き折りつつ着地、と同時に前転して勢いを殺した。上からパラパラと葉が降り落ちる。

(こつちか)

さつきみつけたものの方向は忘れずに、木の根で歩きにくい森をすたすたと歩き始めた。きちんと気配を殺しておくことも忘れない。

ジ——…

魔道具だけが、彼の後を追って森深くに消えていった。

アシユレイの目的地へと向かうその後ろ姿は、分割された画面の片隅にしっかり表示されていた。ユーゼリアもクオリも当然見逃すはずもなく。アシユレイが危惧したとおり、ばっちり画面越しに目が合ったユーゼリアは、特に何も思うところはなかったが、突然木登りをするかと思いきやとんでもない高さから飛び降りるなど、何がした



いのか読めないアシユレイの行動を疑問に思っではいた。  
(何か探してみたんだけど…でも何を?)

そして食い入るように画面を見つめるのだった。

\*\*\*\*\*

目的地に着いたのは30分後、アシユレイはまた、湖のほとりの木の上でじつと息を潜ませていた。

彼が探していたのは、それなりの大きさの池ないしは湖だった。正確には、そのほとりに群生するケミスという植物である。

ケミスはフェアラビットの大好物なのだ。小さな黄色い花を咲かせるなんてこともない花だが、その特徴に「水気を好む」というものがあつた。ゆえにアシユレイは高所から湖を探し、見事その場所を探しあてたという訳である。

足の速いフェアラビット狩りは、こちらから追いかけるよりこうして気配を絶つて上から襲いかかるほうが効率がよい。後ろから追いかけられるのに慣れている兎にとつて、頭上からの攻撃は慣れていないのだ。おかげで行動が一瞬遅れる。

ここまでできたからには、あとは兎が来るのを待つのみである。幹に背を預け、大きな欠伸を1つ。

ぼーっと空を見始めた。

ふと気配を感じて目をあける。近くの茂みから白い何かが顔を覗かせていた。首もとにチラチラと赤い何かが光を反射している。あれが次の第二次予選への切符となるリボンなのだろう。

太陽の位置から、まだ昼前だとわかる。3時間もしないでフェアラビットを獲れることに口角が吊り上がった。

兎は周囲を一所懸命警戒しながらも、ケミスの群生地へジリジリ近づいていく。思わず尻を蹴っ飛ばしてやりたくなるほどの用心深さなのも、1000年前と何も変わらない。

フェアラビットが湖に来てから待つこと実に半時間。アシユレイ

は漏れ出そうになる苛つきの気配を深呼吸でどうにかごまかしていた。ひさびさにこれをくらうと、やはり辛い。忍耐力を試されるどころの話ではない。3歩進んで2歩下がる、と思いきやたまに4歩下がることもある兎が本当は時速80km近い速さで走れるなど、誰が想像できるだろう。

やっとアシユレイの真下まで寄ってきたフェアラビットは、もぐもぐとケミスの花を食べ始めた。ようやくありつけた食事だからか、周りへの警戒も薄れる。

(今か……)

バツと枝から飛び降りると、間髪いれずに余力を込めないようにしつつ兎の頭をはたいた。脳震盪をおこした兎はぱたたと倒れる。

「捕獲完了、と」

フェアラビットの息を確認してやれやれと溜め息をついたアシユレイは、兎を抱えると森の入り口へと戻った。

\*\*\*\*\*

鮮やかな手際に、ユーゼリア達は感心すると共に小首を傾げた。

「よくフェアラビットがああ湖に來ると分かりましたね。帝国の国境の砦は獸人以外を国に入れることなんて滅多にないのに」

「ええ……やっぱり」

ユーゼリアが顔を曇らせた。

(やっぱり、アッシュが記憶喪失なんて、嘘だわ)

「え？」

「あ、何でもないの」

曖昧な笑みでごまかして、再びユーゼリアは画面の片隅をみつめた。さっきまでアシユレイが映っていたその場所は、今はもう他の選手を映し出している。

今までなんども「変だな」と思ったことはあった。確かにギルドや五大国をなど、赤ん坊でも知っていることを知らないと言っていたときは記憶喪失といわれても領けた。あれは嘘をついているようには

見えなかったし、多分本当なのだろう。

(でも、有り得ないもの)

大国の名前すら知らないくせに、なぜシユラが——魔の眷属のそれも第六世代のスレイプニルであるという正体を見破れたのか。エルフのクオリは事情がわかる。だが、彼は、違うはずなのだ。

ほかにもある。普通、記憶喪失の人物は精神的に不安定になると聞いた。なのに、彼に至っては不安定どころか驚いた顔すら見たことが無いのではないか。いつもこちらを安心させるような微笑を浮かべている。

上げればきりが無いが、兎に角、五大国の名も忘れるような重度の記憶喪失者が、フェアラビットの捕獲方法など知っているわけがない。

アシユレイは、記憶を失っているわけではない。

(でも、)

大国の名を、数百年も昔からあるギルドの存在を知らないというのは、本当にみえた。しかしそれにしては彼の言動に矛盾が沢山あった。

(一体どういうこと……?)

## 21話 「第二次予選」

『終——了——!!!』

ざわめきが消える。今まで各フィールドを映していた画面が消え、ずらりと表が現れた。残った選手と落ちた選手の表のようだ。皆食い入るようにして応援していた人物の名を探していた。

「……あつ、いました！ いましたよ、リアさん！」

「当然！ 予選敗退なんて無様なこと、アッシュはしないわ！」

なんて言ってみるものの、その顔には満面の笑みが浮かんでいる。アシュレイの勝利を我が事のように喜んでいた。

『結果を発表します。第1グループ合格者、19名。第2グループ合格者、20名。第3グループ合格者、17名。詳細は画面をご覧ください。ご確認ください。』

選手の休憩と会場への移動の為、個人部門第二次予選は16回鐘からとなります』

モナの声に観客達は次々と席を立って出口へと向かっていった。クオリがそれを目で追っていると、横からユーゼリアが説明する。

「選手を迎えに行ったのよ。私達も行ってもいいけど……」

言葉を切ると、周りを見渡した。つられてクオリも視線をなぞると、人がいなくなった席にはすかさず立ち見席の客が入りこみ、どっしりと座っているのを目にする。

「席がとられちゃうのよね」

どうする？ ユーゼリアが浅葱髪のエルフに訊くと、ガシツと手を掴まれた。思わず半歩引く。

(あれ、既視感?)

2日前くらいに立場が逆だったのをふっと思い出したユーゼリアだった。

当のクオリは遠い目をしたユーゼリアにお構いなく、キラキラと輝いた瞳を彼女に向けていた。

「わたし、そんな時に凄く役にたつ魔法知ってるんです！」

「誉めて誉めて」という期待に満ちた眼差しを前に、ユーゼリアは続

きを促すほかなかつた。気のせいかクオリの頭に三角形の獣耳と、尻からブンブンと左右に振れる尻尾が見えるような気がした。

「それはですね…まあ見ててください」

語尾に音符などが付きそうな調子で言うと、手を前に翳して小さく早口で呪文を唱えた。

「我請う。数多生命いのち支えし大地の君、今人形ヒトガタとなりて大地の鉄槌を下さん」

そして立て続けにもう1つの魔法を唱える。

「光に覆われし子らよ、消えよ。【神隠し】」

光属性上級魔法だ、と認識した時には体中は薄いベールで包まれたような感覚で覆われた。光の屈折率を変えて、他人の目に自分の姿が映らなくなる魔法だ。範囲指定魔法だから食う魔力は多くなるが、そこはかのエルフ。持ちうる強大な魔力の量にも言わせて、上級魔法をこんなところで惜しげもなく使った。

気がつけばベンチにはクオリともう1人のユーゼリアが仲良く並んで座っていた。思わずぎよつとするが、肩を叩かれ向こう側が透けて見える2人目のクオリが説明すると、ほつと息をついた。

「ゴoremなんです、あれ。驚かせてすみません。でもこれで席は確保されましたから、安心してアッシュュさんを迎えに行きましょう！」  
はぐれないように手と手を繋ぎ、人混みに飛び込んだ。

\*\*\*\*\*

やれやれやつと終わったかと、15回鐘が鳴り終わると共に周りへの警戒を解いた。周りも同じらしい。うさぎを抱えている者はほつとして腰を下ろし、捕らえ損なった者はああ、と膝をつく。

あのあとアッシュレイは、ずっと兎の首根っこを捕まえたまま木の上で時間を過ごした。途中数名に気づかれたが、一言も喋らせるまもなく用意していた胡桃を脳天に直撃、即行でお休みいただいた。

「お疲れ様でしたー」

どこからともなく現れたスタッフにフェアラビットを渡し、首にくくりつけられていた赤いリボンを手首に巻く。

彼らに先導されて、ぞろぞろとファイザルへ戻り始めた。

町に着くやいなや、待ち構えていた民衆の歓声に迎えられた。たかが第一次予選を終えただけでこの興奮である。本戦や決勝はどうなるのか、想像がつかなかった。ただ1つ分かるのは、アシュレイのその並外れた聴覚にかなりのダメージを与えるだろうということだ。今も頭がキーンと鳴っている。

次の集合時間と場所を言われると、その場で解散した。さてこの人の山からどうやって2人を探そうかと考えていると、どうやらその必要はないと考え直す。

「アッシュュー!!」

「アッシュユさん！ お疲れ様でしたー！」

「おうおう、お迎えありがとさん」

2人の頭をぽんぽんと撫でつつ、まずはこの場を離れる。はぐれないうように、また3人は手を繋いだ。ふと握っているアシュレイの左手首に結んである赤いリボンに気づいたクオリが、つんと彼のコートの手袖を引っ張った。

「このリボンは何ですか？」

「ああ、うさぎの首にくくりつけられてたやつだ。これで二次予選のグループ決めが行われるらしい」

「もつと綺麗に結びなさいよ。あとでやり直してあげる」

アシュレイの反対側の手につかまっていたユーゼリアが、ひよいとその腕にしがみつく。持ち前の膂力で彼女の体を引きずらないよう持ち上げつつ、礼を述べた。

3人で遅い昼食を食べ終わると、再び別れ、アシュレイは1人集合場所へと向かった。

場所はまた屋外、だがそこは森とは違い、身を隠す所もない平野だった。位置で言えば、町を中心に森より西側にあたるのである。

時間は思ったよりもギリギリだったらしい。目印の赤いフラッグの周りには、既に多くの選手が集まっていた。皆体のどこかにアシュレイと同じ赤いリボンが結んである。

着いてまもなく。町から16回鐘が響くと、またスタッフ達が現れる。

「時間になりました。第二次予選を開始します。二次予選は単純、乱戦方式の勝ち抜き戦です！ ここにいる選手は28人、うち10名、最後まで残っていた者を勝者とします」

ここまで言った時点で、多くの選手はバツと周りを確認した。強力な選手がいなかろうか、確認したのである。

一方全く動じなかった少数派は、恐らくBやB+ランカーなのだろう。自信に満ちた表情でスタッフの話の聞いている。

アシュレイもこの少数派だが、彼は単純に周りを見ても誰が名のある戦士なのか分からないからだ。ふむふむとスタッフの言葉に耳を傾けていた。

「二次予選のように、また円形の結界を張らせていただきます。範囲は半径80m、強度は先ほどよりもありますが、上級魔法をなんとか耐えられるかどうかという程度のもので。あまり高位の魔法は乱射せぬよう、お願い申し上げます」

それでも持ち運び可能な小型（あるいは中型）魔道具で上級魔法を防げるというのは、随分高級なものなのだろう、と頭のどこかで考える。

「また、一次予選と同様、命に関わるような攻撃は禁止とします。結界の外には10人のギルドの高位魔道士が待機しています。戦闘続行不可能とみなしたら即結界外へ転移、医療魔道士に治療を施させます」

（つまり殺しちや駄目だが本気で行けよと）

「最後に、この戦闘の様子も会場に中継されています。頑張ってください。何か質問は？」

ひとりの槍使いが手をあげた。

「悪いが、その医療魔道士はどんなもんだい？ 何人いる？」

「人数は8名、皆ランクB以上の人員です。余程のことが無い限り死に至ることはありません。また、明らかな過剰攻撃の場合、無断で守護結界を張る場合もあります」

槍使いは安心したらしく、片手をあげて頷いた。周りを見回して他に質問者がいないことを確認すると、後ろに待機していた魔道士達が一齐に詠唱を始めた。青白い結界が現れ、再び彼らと選手を分ける。「開始は1分後です」

選手がバラバラに散っていく。結界を背に戦った方が有利だからだ。少なくとも、後ろからの不意打ちは有り得ないのだから。

この為に配備された『時守り』の少女が、緊張した面持ちで手元のぴかぴかに磨いた懐中時計を見つめていた。あたりは静かだ。そう遠くないところにある町の喧騒が、やけに大きく感じた。

少女が高い声で秒読みを始める。

「20秒！・10秒前……5、4、3、2、1、始め！」

声と共に、剣戟の音がけたたましく鳴り始めた。まずは近場の者の首を（殺すわけではないが）取りにいったのだ。

事前に何か取り決めていたのだろうか、Bランカーと思われる者相手に3人で連携をとって戦っている者もいる。

逆に、Bランカー同士が一時的にチームを組んで、他の選手をバツタバツタとなぎ倒していくのも見られた。

ようするに最後の10人に自分が入ればいいのだから、数で攻めるのも策の1つなのである。

映像転送魔道具はそれらをまんべんなく上空から映し出し、会場へ転送する。ファイザルの町は大いに沸き立っていた。

「あつアツシュー！」

目を皿のようにして黒髪の男を探していたユーゼリアが、声をあげる。彼は結界に背を預け、腕組みをして目を瞑っていた。

「馬鹿、そんなことしてたら……」

今も、彼の目の前で2人の選手が太刀合っている。彼はその様子をぼーっと見ているだけだ。乱入して漁夫の利を狙うこともなければ、そこから逃げようともしない。



会場の何人かも、それに気づいたらしい。司会者モナが彼らの気持ちを代弁するように言った。

『おや!? あの赤グループの黒髪の選手、先ほどから全く戦闘に参加していませんねえ! どうしたのでしょうか!?』

解説者カエンヌが意味深に笑った。

『ほう』

『それにずっとああして無防備に立っているのに、誰からも相手にされていらないようですが!? カエンヌさん、どういうことでしょうか!?』  
ハイテンションのままカエンヌに訊くと、Sランカーはゆつくりと口を開いた。

『そうですね、まず1つ訂正しなくてはいけないのは、彼が周りから放置されているのではない。彼が相手にしていないのです』

『と、言いますと...?』

『私達はこうして上空から映像として送られてくるものを見ているだけですが、実際結界内では限られた狭い空間で、あちこちで戦闘が起きています。そこに彼は目を付けたのです』

相変わらずアシュレイはその場を1歩も動かない。

『その場にいなければ確信は持てませんが、恐らく、彼は気配を操ってあの場に佇んでいる』

『気配を、操る?』

『言うのは簡単です、実際Cランク以上ともなればある程度はそういう事もできるようになります。 “気配を殺す” という言葉は聞いたことありますか? 例えば静かな森の中で魔獣を相手にする時などは、その能力が無いとお話になりません。が、冒険者たちが一般にその能力を使うのは、今挙げた例のような、 “静かな場所で、気配を「殺す」こと” が殆どです』

『確かに、その表現ならよく耳にしますね』

今や観客の眼はアシュレイに釘付けた。あれだけ騒がしかった会場も、とりあえず叫ばなくても隣の者に話が聞こえる程度には静まった。皆カエンヌの解説に耳を傾けている。

『そうでしょう。ところが彼その逆を行っている。苦もなく、欠伸を

噛み殺しながら』

画面には、眠そうに欠伸をしているアシュレイの姿がアップで映っていた。一応手で隠しているものの、彼はこちらがズームアップにしていることを知らないのだろう。その目は明らかに「早く終わんねえかな」と語っていた。目は口ほどにものを言うとは、よく言ったものだ。

『狭い空間のあちこちで置きている戦闘を前に、不動の物、あるいは人がいると、むしろそれは目立つのです。鬼ごっこをしている子供たちの中で、1人その場に立ち止まっているようなものだ。目立つでしょう？』

『まあ…そうでしょうか…？』

『ちよつと例がわかりにくいですかね。まあ兎に角彼は意図して気配を荒くしたり、また不意にそれを静めることで周りの気配と同調し、あたかもその場にいないかのようにしているのです。…まあ、それも時間稼ぎでしょうが』

『…そうなんですか？』

散々その凄さを語られたモナとしては、最後のカエンヌの言葉に思わずガクツとした。知らず言葉にも呆れが入る。

『気配操作は極端に静かな場所や、逆に極端に騒がしいところでないと効果を発揮しません。人数がある程度減ったら、じきに彼も誰かに目をつけられるでしょう。……ほら』

言葉通り、今画面では初めてアシュレイが他の選手と対峙していた。あれだけの凄技をさらりとやってのけた彼の戦いに皆注目する。が、残念ながらそれは叶わないようだった。

『そこまで!!』

画面の向こう、ギルドのスタッフが制止の声を張り上げる。どうやらアシュレイが剣を抜く前に、離れた場所で太刀合ってた者達の決着がついたらしい。

観客が一斉にため息をついた。その中にはユーゼリアとクオオリの姿もある。なんだかんだで結局、アシュレイの戦いを楽しみにしていたのだ。

「…まあ、何はともあれ本戦出場っ。やったわね！」

「アツシユさんに賭けてる人なんていないでしょうし。一体どれだけ儲かるんですかねえ……」

ユーゼリアに毒されたのか、クオリが返ってくるときには倍以上になっっているであろう金に思いを馳せた。

## 22話「第一次本戦」

『おはようございます!! 武闘大会2日目は、個人部門本戦です! 私は楽しみに昨日全然眠れませんでしたー!』

翌日、目の下に本当に隈を作ってきたモナに、観衆から苦笑がもれた。が、気持ちは分かるといった風でもある。

『それでは、選手入場ー!!』

声と共に2つの扉が開き、左右から5人の選手が現れた。3人が剣士、1人は魔道士、1人は槍使いらしい。アシュレイの姿は、ない。『ルールを説明します! ルールと言っても簡単、5人で戦って、最後に残った1人が第二次本戦に進出です! 負けの判定は降参、あるいは石舞台のしたのくぼみに落ちることとします! ただし、魔道具は使用禁止! 使ったら反則ですからね。また“降参”の意を示した相手に更に攻撃を加えても失格ですよ。……それでは準備はよろしいですか? では、よーうい:始め!』

『唸れ猛雨の吹雪!』

直後、会場の中心が爆発した。属性は水。魔道士である。それを皮切りに、他の3人が動き出した。爆発は彼らも巻き込んだはずだが、どうやら苦にならなかつたらしい。先制攻撃でダメージを少しでも与えたかつた魔道士が舌打ちした。試合会場の周りにずらつと拡声魔道具があるので、試合中の彼らのつぶやきも、舌打ちも全て観客には筒抜けなのだ。

わつと観衆が沸く、と同時に、ユーゼリアは誰かに肩を叩かれた。

「よっ」

「アツシユー!」

「どうしてここに?」

「俺の順番は4回戦目でな、それまで自由にしているとのことだったから、戻ってきた。まあ、席はなさそうだから通路に立ってるが」

申し訳なさそうな顔をするクオリに、笑って「気にするな」と言うのと、そのまま戦闘を観戦し始める。

試合は魔道士の圧倒的不利だった。剣士たちと槍使いが、まずは遠

距離攻撃のできる魔道士を4人で潰しにかかったからだ。魔道士の方も必死に攻撃を避け、下級魔法の連弾で距離を稼ごうとしていたが、流石に4人の近接戦闘員を相手取るのは厳しいようだ。

『【氷の乙女】！』

「…なるほど。そうきたか」

「何が？」

「あの魔道士の戦法だよ」

詳細を求めるユーゼリアには「まあ見てろ」と言うだけに留まり、アシュレイ自身も再び会場に目を向ける。

その場の気温がスツと下がる。範囲はちょうどフィールドよりやや小さい程度だ。

『うわっ』

『くそっ』

剣士たちが悪態をついた。ひとりには尻餅をついている。

「始めに仕掛けた水の爆発はこのための布石だったというわけだ」

乾いた土を凍らせるより、水を撒いて湿らせた土を凍らす方が使う魔力は格段に減る。そして凍りついたフィールドでは、下手に動けば滑って転んでしまい、魔法の格好の的になってしまう。

戦況は逆転、一気に魔道士有利となった。

『大逆転！ Bランク水魔道士、アイン・シテイ選手が一気に形勢有利に！』

『いい戦略ですね。始めの爆発をあえて中央に設定したのは、このためだったというわけです』

『なるほど！』

結局このまま魔道士がごり押しで勝利、やんややんやの大喝采となった。

その他の試合では他に魔道士は勝ち抜いておらず、やはりこのような「場」になると、魔法士は不利なのだろうと思った。

「さて、次か」

「頑張ってください」

「そうだ、アッシュユ！」

「ん？」

「今日の大会が終わったあと、外でご飯食べてきましょう！　お店はチェックしてあるから！」

「ん、分かった」

「優勝の前祝いですね！」

「はは、気が早いよ」

「勝つのよ！」

「はいはい、お姫さまのおっしゃる通り」

「アツシユ！」

「わかってるって。んじゃ、勝ってくる」

ぽんぽんと銀色の頭を叩くと、コートのポケットに手を突っ込んで、いかにも気だるげに階段を上っていった。

「まったく」

「ふふ。仲よろしいんですね」

「ん、仲が悪かったら護衛になんて雇ってないわ。まあ、彼ならちよつとくらい仲悪くても、有能だから手放さないけどね」

「そういうのじゃなくて…」

困ったような顔で苦笑するクオリ。ユーザーは首を傾げた。

「あはは…やっぱりなんでもありません」

「なあに？」

「こういうのは静かに見守っておいた方が、当人たちのためですからね」

「？」

再度首を捻るユーザーに笑って誤魔化すと、クオリはそれよりも、と試合会場を指差した。

「アツシユさんが来ました。応援しましょう！」

『続いては第4回戦！　先ほど赤グループで高度な技を見せたアシュレイ選手もいます。なんと選事情報を見るかぎりランクはF！　一体今度はどんな動きを見せてくれるのでしょうか！　他に青グループで1対4の勝負を勝ち取った大剣使いのBランカー、ロートス選手にも注目ですね、カエンヌさん！』

『そうですね。また司会席側から出てきたのは女性ながら重い一撃を放つ槍使いBランカーのリーメイ選手、素早く懐に入り急所に叩き込むダガー使いBランクのシユウ選手、手数で敵を圧倒する双剣士Bランカークライン選手です。5人とも前衛の近接戦闘担当、魔法が使えないという情報はありませんから、競うは己の剣技ということになりますね』

『なるほど。ええ、この5人のレートですが、Bランカー！リーメイ選手が1.7倍、おなじくBランカー！シユウ選手は1.5倍。Bランカー！ロートス選手が1.9倍。Bランカー！クライン選手は1.8倍、ただ1人Fランカーにて参加したアシュレイ選手は…に、29.9倍です』

(桁が違うな)

それだけで如何に自分が期待されていないかが伺えた。きつと金を賭けているのはユーゼリア達だけに違いない。

『では準備も終わりましたようなので、第一次本戦4回戦目、ようい……始めッ!!』

瞬間、双剣士クラインと槍使いリーメイが風のような速さで同時にシユウへと斬りかかった。だが防具を貫通せんとした槍は空を突き、唸りをあげた双剣はダガーで止められた。

キーン!!

硬い金属音が響き、クラインを弾き飛ばした。

「やるなー」

宙で一回転しつつ余裕をもって着地するクラインを見届けると、シユウは油断なくダガーを構えた。

「リンチはやめてほしいんだがね…」

「そりゃ、無理な相談ってね!」

リーメイが長いリーチで槍を横風に振るう。シユウが飛んで回避すると目の前でクラインがニヤリと笑っていた。

「ぐっー」

片方は防いだものの、双剣の片方を腕に喰らい、その場で落下。前転して勢いを殺すが、利き腕を傷つけられ思わず顔が歪んだ。

「何せ、アンタがこの中で一番ランクが高いもんだからな」

「その女がいるだろ！」

再び地を蹴り、息も止まるような連撃を繰り返した。が、リーメイは全てを完璧に叩き落とす。今度は彼女の方が後ろに跳び、距離をもった。と同時にまたクラインが前に飛び出す。リーメイが息を整えながらニヤリと笑った。観客も思わず唾を鳴らす。

「おなじBランカーでも、あたしゃ弱いオンナノコだからね」

「はっ！ 笑わせるぜ！」

苦い顔をしながらも、シウウはクラインに向かって地を蹴った。

対してもう一組、アシュレイとロートスからは、剣が剣を受ける金属音さえ鳴っていなかった。

『Fランカーアシュレイ選手、流石にBランカーロートス選手の猛攻撃を避け続けるのはつらいのでしょうか、押されています！ しかしなんとか紙一重でかわせているようです！ ただ危うい！ 見ている方がヒヤツとするようなギリギリ崖っぷちの避け方！ やはりFランカーの下剋上は無理なのか!？』

子どもの背丈はありそうな大剣を縦横無尽に振り回すロートスの攻撃を、アシュレイは目と鼻の先でかわし続けていた。ギリギリの戦いに観客が沸き立つ。

(さつきからFランカーFランカーって……連呼されると恥ずかしいんだが)

まだ登録して1月なのだから仕方ないことではあるが、今回の参加者の中ではダントツの最下位ランク(そもそもFの下にはFーしかないが)であるため、ちよつと苦い顔のアシュレイなど放っておき、モナは実況を続けた。

『どうやら4回戦では1対1の戦いを同時にやるようです！』

『まあ、魔道士のいないグループならそれが定石でしょう。しかし：アシュレイ選手は本当にFランカーなんでしょうかねえ?』

『確かに、ギリギリとはいえBランカーであるロートス選手の攻撃を避け続ける技量には、目を見張るものがあります!』

『……まあ、見ていきましょう』



若干の含みを持たせた声でカスパーは言い、それきり口を噤んだ。リーメイとクラインの方のコメントに移る。

試合開始から十数分。

リーメイ、クラインに延々追い掛け回されたシユウは息も切れ切れなのもうなずける。当の2人は僅かに息を切らしているものの、まだまだ余力があるのに対し、アシュレイに対峙していたロートスの方は、既に肩で息をする程体力を消耗していた。

否、正確には「精神力につられて、体力も削られた」である。

『おやあ?! 一体どういうことでしょうか?! 押していたように見えたロートス選手、既に体力は限界のようです!!』

(顔に似合わずズバツと言うな、あの司会)

思わず苦笑するアシュレイは、当然息一つ乱してはいない。これには観客も大盛り上がりだ。

「くっそお、クソクソツッ! なんで当たらねえんだよ!!」

苛立ちも露わにロートスが怒鳴る。

片や吹き荒れる風のような連撃を全て受けられ、片やクライン程の速度でないものの、並の冒険者ならば一撃で伸せるであろう力強さを秘めた剣戟を全て紙一重で避けられる。

どちらも相手にダメージを負わせていないのに変わりはないが、精神的に追い詰められるのは圧倒的に後者だ。当たった、と思う斬撃がことごとくかわされる。如何なBーランクまで上ってきた剣士であろうとも、むしろBーランクの優秀な剣士だからこそ、それが数十分にも続けば苛立ちは押されられない。自分の剣に自信を持っているからだ。

そして内心でくすぶり続けた苛立ちの火は、やがて焦りとなって振るう剣に表れる。

(当てたい。一発あたりやあ奴はあの軽装だ、アバラの2, 3本は持つていける。一発でも当てれば…!!)

その気持ちから、無意識にロートスは剣をより大きく振り上げた。狙うはアシュレイの左肩。

この時、ロートスは気付かなかった。

今の今まで、自身の振るう大剣を全てかわしてきたアシュレイが、無防備にその足を止めたこと。その意味を。

(いける…!!)

意地と怒りにまかせて振り下ろした鉄塊は、だが獲物を食らうことは叶わなかった。

ふと気が付けば、ロートスはなぜか空を見上げていた。

(……………?)

34歳Bーランク大剣使い、ロートス・ブランデーが次、穏やかに目を開けたのは、日付が変わったあとだったとは、彼を治療した医療魔道士見習いの談である。

『おオつとお!? これはどんなでん返しだ!! なんとロートス選手が地に臥し、動きません! ロートス・ブランデー選手、敗退です!』

扉が開き、駆け足で数人の医療魔道士がロートスを運んでいく。観客も予期せぬ勝者に沸き立つ。

「やった! アツシユー! 頑張れー!!」

「あわわわわ、分かっているてもヒヤツとさせますね。まったく心臓に悪い…」

一番はしゃいでいるのはこの2人かも知れない。

アシュレイはすっかりユーゼリアの声援の声を拾い上げてそちらに向くと、ニコリと笑って手を振った。彼らの延長線上にいた女性客が浮き足立つ。

あまり言及されたことはないが、アシュレイも十分整った顔立ちをしているのだ。思わずドキツとしてしまうのも、まあ無理はない。

モナがキラーンと目を光らせた。

『おやおやおやおやあ? なにやらアシュレイ選手、余裕の笑みで観客に手を振っていますか?!』

『はいはい、時間は推してますから寄り道はなしですよ。さて、3人になった今、リーメイ選手とクライン選手はどう動くのでしょうか』

アシュレイとしては間近でB系ランカー同士の試合を観戦したかったのだが、どうやらそうは問屋が卸さないらしい。

いつの間にかシユウの姿がない。どうやらあのあと体力切れで場外に突き落とされたようだった。

リーメイとクラインは自分とほぼ変わらないランクであるロートスがいともあっさり敗れたのに危機感を持っていた。それも、見たところ年齢はまだ20になっているかどうかといった若者なのである。2人とも互いの実力はもう分かっている。そう大きな差はないだろう。

ならば問題視すべきは、素性の知れない目の前のFランカーだった。

クラインとリーメイは戦いを一時休戦、2対1でアシユレイを相手取ることに決めた。

「氣イ抜くんじゃないよ…」

「わあつてらあ！」

2人同時に駆け出す。得物の差か、クラインが先にアシユレイの間に合いに入った。

『なんと、B、B―ランカー達が、Fランカーを袋叩きだあ！　これはマズいんじゃないでしょうか、カエンヌさん!?』

『さて、どう逃げきるでしょうか。楽しみですね』

カエンヌはニヤリと笑いながら試合場を見下ろした。その目には何かを確信している光があった。

「うりゃあー！」

威勢の良い声と共に突き出される片手剣をしゃがんで避けると同時に脚払いをかける。連撃を見舞う予定だったクラインはバランスを崩し、尻餅をつくかと思われたが、そこはB―ランカー。危なげ無く剣を握ったまま逆立ちし、バック転の要領でアシユレイと距離をとった。

「先走るんじゃないよ！　こいつはあたしの獲物だ！」

「へ、だあれがお前に譲ってやるもんかよ。こういうのは…早いもん勝ちだ!!」

左右からハサミのように首を狙って放たれた双剣を、髪を数本斬られつつも回避、サマーソルトでクラインの手から片方の剣を叩き落と

す。

間髪入れずに降ってくる槍の嵐を後転直後後ろに跳びずさって避けた。

緩慢な動作で、運運良く足下に落ちていたクラインの片手剣を拾った。2人はアシュレイを警戒し武器を構えるだけで、襲ってくることはなかった。クラインがジンジンと痺れて動かない手をだらんと下げたまま舌打ちする。

(どんな馬鹿力だよ、あの野郎)

胴体部分に比べれば薄いものの、クラインは長手袋型の手甲をしている。『軽くて丈夫』が売りの高級金属、赤硬銅アークライト80%の高級品だ。中地には衝撃吸収と蒸れ防止の為にBクラスの魔物の糸で編んだ布が使われている。

にもかかわらず通った、それも重い打撃。驚愕だった。

(本当にフランカーかっつての)

「…おい」

「分かってるよ。…舐めてかかったら、こつちが危ない」

クラインの左手を視界に収めたリーメイが、静かに腰を落とす。

もちろんこの小声のやりとりも観客席には丸聞こえで、観客はざわめいた。ユーゼリアとクオリなどは、してやったりと顔を見合わせた。

『どうやらアシュレイ選手、フランカーという肩書きに合わない実力者のようです！ さて、それでも2人のB系ランカーの攻撃をかわすことはできるのでしょうか!?!』

「やああ!!」

ダツとリーメイが飛び出した。遠心力で槍を横薙ぎに振るう。しゃがんで避けると読んでいたかのように完璧なタイミングで片手剣がアシュレイを襲った。

「ん、」

眉を上げつつ体をひねり剣を避け、振り向き様クラインの目にフィールドの砂を叩きつけた。

「うわっぷー」

ここでクラインにたたみかけようとするも、それは正確にアシユレイの膝を狙って放たれた槍によって叶わない。

「チツ」

舌打ちと共に腕を動かす。クラインを狙っていた剣は槍の穂先に当たり、僅かにその狙いを逸らせると音を立てて真つ一二つに折れた。

「ぬがー!!」

「我慢をし！ 助けてやったんだから、寧ろ礼が欲しいね！」

奇声を上げたクラインに、リーメイが地面に突き刺さった槍を抜きながら怒鳴った。ふるふると震えながらクラインはアシユレイを指差す。

「……ずうえええつたいに、勝あつ!!」

この大会では、例え試合中に武器が破損しても、対戦選手に賠償請求をすることは出来ない。しかし実際のところ、選手たちは武器の賠償をしたりしなかったりしている。大会はそれを黙認している形だ。

「勝ったら賠償請求可」

つまり、勝てば官軍。請求金額が本来の半分だけのときもあれば（およそこれは低ランカーに優しい措置である）、しっかりと全額受け取る場合も、ちゃっかり「手数料」と銘打って倍額請求することもあるとか無いとか。ただ、全額請求が一般的ではある。

閑話休題。

つまりクラインからすれば、勝たねばFランカーに負けた初戦敗退者（予選はカウントしない）のレットルを張られるばかりか武器まで片方無くし、その上賞金も賠償請求すらできないという正に泣きつ面に蜂、七転八倒の処遇を受ける他無いのだ。今頑張らずしていつ頑張るというのか。

気合い十分に剣を掲げると、その場で詠唱を始めた。

「……」

『あれは身体強化系の補助魔法！ クライン選手、実は魔法も使えたということですか!?!』

『といっても、彼は根っからの剣士ですから、多分1発で魔力総量的には限界でしょうね。持って10分といったところでしょうか。まあ、

身体強化魔法程度なら覚えている剣士も少なくありませんし、特に驚くことではないですよ』

そうはさせじとクラインに迫るアシュレイだが、寸前で首に殺気を感じ横に跳んだ。数瞬前に首があった場所に恐るべき勢いで槍が通過する。もし当たっていたら並みの人間なら首を骨折、下手をすれば頭が潰れるだろう。アシュレイであつても浅くない傷を負うのは間違いない。それは大会のルールに反する。リーメイは敵選手であるアシュレイが避けると確信していたのだ。

『あつつぶなああい!!! スレッツスレでした!!! 今のつて完全殺しに  
いってませんか!!?』

『アシュレイ選手なら避けられると確信していたんでしよう。事実、彼は軽く避けましたし。完全な死角からの攻撃を』

『むむむ、戦闘に素人だと危なっかしくて見ていられません!!』

事実、観客席は皆一斉に息を呑んでいた。何人か目を覆っているものもいた。筆頭は、ユーゼリアである。

「アツシユのバカあゝ」

「し、心臓に悪いなんてもんじゃありませんよ…」

思わず背もたれにぐったり横たわる2人を後ろの男性観客達が心配そうに見る、と同時に、彼女達の連れであるに違いないアシュレイに嫉妬の視線を向けていた。

「…：大分暗くなったな」

ここで初めて、アシュレイが喋った。視線は空を見上げている。つられて皆空を見た。会場に屋根は無い。そのため会場は魔道士達による光球によつて照らされていた。周りが明るすぎて星はあまりよく見えないが、それでもいくらか特に明るい恒星は見えた。日が沈んで半鐘くらいは経っているかも知れない。

慌てて視線を戻したクラインが、油断なくアシュレイを睨みつけた。目を逸らしたところを突く作戦かと思つたようだ。

アシュレイが視線を空に固定したまま言った。

「悪いがこれから予定が入っていてな…」

「何言つて——!!?」

ドンツ!!

瞬間、クラインが壁に叩きつけられた。受け身を取る間もなく頭を強打、白目を向いて倒れる。

「約束してしまった以上、うちのお姫さまたちを待たせるわけには行かないんだよ。…悪いね」

きやあ、とどこかで黄色い声がした。

「な!？」

クラインがいた場所で悠然と立っているアシュレイに、リーメイが驚きを露わにしていた。

素早くクラインに接近し、その腹を殴った。

たったそれだけの単純な動きが、リーメイの目には追いつかなかった。気が付いたらアシュレイが消え、同時にクラインの前に出現、殴打。クラインが場外に吹っ飛ぶのを見ているしかできないなんて情けないことだが、それでも身体強化を施したクラインでさえ手も足も出なかった今のアシュレイには、到底勝てると思えなかった。

あるいは、ロートスとシユウも合わせて4人で始めから殺すつもりであれば、一撃くらいは通ったかも知れないが、終わった後それを言っても詮無きことである。

「さて…降参すれば痛い思いはしなくて済むが……」

「抜かせ!」

Bランカーの意地。降参するわけにはいかなかった。声を上げてアシュレイに突進する。

「だろうな。……だが」

想像通りの答えに嘆息するもニヤリと笑うと、

「それでこそ、戦士だ」

リーメイの目の前から、その幻影だけを残して、消えた。

沈む意識の中、モナが高い声でアシュレイの勝利を叫ぶのが聞こえた。

\*\*\*\*\*

「えー、それでは我らが財布の運命を握っているアシュレイの第一次本戦突破を記念してー」

「乾杯!!」

「プレッシャーはかけないでほしいんだが…」

「まあいいじゃないの。ふふ」

試合が終わったあとから妙に機嫌が良いユーゼリアに内心首を傾けるが、まあご機嫌斜めよりかはよっぽどいいので、放っておくことにした。

「このまま優勝したら賞金っておいくらなんでしょう?」

両肘をたててエールをちびちびと飲むクオリが独り言のように尋ねた。

「1000万よ! 3人できっかり分けたとしても、1人330万と端数貰えるわ」

「さんびやくさんじゅう……」

「おまけに少なくとも今日アッシュが勝った分は確実に賭けに反映されるから、10万の29.9倍の……ふふふふふふ」

「にひやくきゆうじゆうきゆうまん……ふふふふふふ」

「お、おい。2人とも、正気に戻れ! 目が怖い! 怖いって!」

「このままアッシュが勝ち続ければそれだけで……ふふふふふふふふふ」

「一体魔導書が何冊……いや何十冊買えることか……ふふふふふふふふふ」

そのとき、虚空を見つめていた蒼と金の瞳が同時にアシュレイを見た。頭ごと。オノマトペで言えば、ぐりゅん、ギロツ」と。

何が言いたいかって、

(こ、怖い……)

ノーアに抱く生命の根源的恐怖とは違うが、それに劣らない程怖かった。何か身の危険を感じた、と、後に彼は語った。

彼女達が正気に戻ったのは十数分後、食事が運ばれてきた後であ





## 23話 「第二次本戦」

『おはようございます！ 本日も晴天、良い大会日和ですね！ それでは武闘大会第二次本戦の幕開けです!!』

連日あれだけ叫び続けてよく声が枯れないものだと、密かに感心しながら、アシュレイはフィールドに立っていた。隣と向かいには同じく整列した選手達がいる。アシュレイを入れて、選手は7人いた。

どうやらこれ以降の試合の対戦相手は、くじで決めるようだった。平等を期す為らしい。

『それでは中央の筒の中に入っている金属の棒から、お好きな1本を抜いてください。順番は問いません』

言葉が終わるとほぼ同時にくじに飛びつく影が1人。驚くほど俊敏だ。頭に三角形の何かがついていている。

(ほう、獣人か)

察するに、あれは狼人<sup>ワウルフ</sup>とみた。彼の頭に生えているのは狼の耳、また尻から生えているのは狼の尻尾だった。斑な灰色の髪は硬そうで、身長は恐らく2メートルは超すだろう。人間の中では長身に入るアシュレイより、縦も横も一回り以上に大きい大男だった。

獣人はその名の通り獣の特徴をもった人種で、一般的に皆基本身体能力が高い。狼人<sup>ワウルフ</sup>も例に漏れず、戦闘に適した身体能力を持っている。

獣人が住むのは南の大国フェイ・ド・テルムだが、そのの兵士の実に4割が狼人<sup>ワウルフ</sup>である、といえは伝わるだろうか。

狼男は真つ先にくじを引き、パツと元居た場所に戻った。他の選手達も続々とくじを引く。アシュレイは選手達を興味深そうに見ていた。

(狼人<sup>ワウルフ</sup>にエルフ、彼女なんてまだ少女じゃないか)

この場に不釣り合いな赤いドレスを着た少女は、年の頃13、4。ズンズンと歩み寄りくじを引くその姿は自分への自信に満ち溢れている。ユーゼリアに匹敵する魔力を保有し、かつそれを完璧に制御できているのは、流石だと思った。自信たっぷりなのも頷ける。

また、その端正な顔と特徴的な長い耳を隠そうともしないエルフの青年にも興味をひかれた。

金髪碧眼、身長はアシユレイ程でないものの長身で、一見ただの優男に見えるが、その身のこなしから、彼がただの魔道士ではなく軽装の下には鍛え上げられた肉体を秘めているであろうことは容易に想像できた。

(なんとも：ランクが上がると個性派な面々が集まるのかな)

内心苦笑しながらアシユレイはくじを引く。彼で最後だったが、くじは1本余った。

くじの先にはハートの印。

『はい、それでは説明をさせていただきます。試合は同じ印のくじを引いた者同士、順番はスピード、ダイヤ、クローバー、ハートの順で進みます!』

「ちよつと待ちなさい!」

赤いドレスの少女だった。

「ここには7人しかいないのに、2人ずつ試合してたら誰か1人余っちゃうじゃない」

『はい、勿論心得ております。しかし、まずは戦う相手が誰かをはっきりさせましょう! まず、スピードを引いた方、一歩前に!』

剣士とあの少女が出た。その瞬間、少女の瞳に勝利を確信する者の光が灯る。

彼はどうやらシード組ではなくアシユレイと同じ予選通過者のようであった。つまりランクは最高でもB+。

(なる程、つまりシード権を持っている3人が表彰台を総なめにするわけだ。……例年通りなら)

ピコン、と画面に顔写真とランク、年齢その他が現れる。

『B+大剣使いノーク・アポストロム選手! Aランク炎魔道士【赤の女王】アディアンヌ・オーケストラ選手!』

わああああ!!!

『続いてダイヤ!! B+水魔道士アイン・シテイ選手! B+細剣使いアベル・カヴァエリ選手!』

次にクローバー!! …おや、〃当たり〃を引いたのはAランク双剣士【魔法剣士】フラウ・クレイオ・エウテルペ選手! 相手選手がいない為、セカンドシード権獲得で、この時点で既に準決勝進出確定です!

最後にハート!! Aランク拳闘士【狼王】ロボ・グレイハーゲン選手! Fランク剣士アシュレイ・ナヴユラ選手!』

どうやら余ったのはエルフの青年のようだった。

〃当たり〃を引いた本人は「お、ラツキー」など言いながら、観客席で黄色い声をあげる女性達に手を振っている。

その腰には、2ふりの片手剣。

(一見ただの軽い優男に見えるが……強いな)

流石にA系ランカーの集められた一次本戦を勝ち抜いただけのこととはある。

アシュレイと戦う狼人も、既に獲物を狙うようなギラギラした目で彼のことを睨んでいる。

(好戦的な野生児か…実にイイね)

僅かに殺気を込めた目で睨み返してやると、ニタアつと野蛮に笑った。

\*\*\*\*\*

結論から言うと、Aランカーは圧倒的だった。

初戦のB+槍使いノーク対A炎魔道士アディアンヌ。近接職と遠距離職だから、いくらB+とAとはいえ多少はノークも奮闘するかと思えば。

「一瞬で終わらせてやろう。《三重展開》【最後の日の業火】」

火属性最上級魔法の三重展開一発。否、〃一発〃というには、語弊がある。正確には〃三発〃だ。

《三重展開》。高等技術である《二重展開》の更に上をいく魔法

展開法で、1つの詠唱で3発を一気に発動させるものだ。当然放つ魔法3回分の魔力を消費し、かつそれに比例した技術相応の魔力も消費される。

強力だが使用魔力も大きく身体に負担がかかる技術である。しかもこの場合発動させたのは火属性最上級魔法。下手をすれば魔力の過剰消費で倒れかねない。そもそも並みの人間が持っている全てを振り絞ってもまだ足りぬ程の魔力を使用するのが最上級魔法である。それを3つ+a、かつ無詠唱なのだから、その難易度たるや、想像に難くない。

もつとも、降参する間もなく倒れ臥したノークをせせら笑う余裕があるのがAランカーたる証ではあるが。

まったく、こんな一言で最上級魔法を連発するような化け物（アシュレイ自身他人のことは言えないが）が3人も4人も集まった第一次予選では、よく会場が壊れなかったものだ、密かにアシュレイは感心した。

実際のところ、大会では戦術級魔法は使用禁止、最上級魔法に関しては事前報告をしたもののみ使用可というルールがある。報告をうけて事前に魔法障壁の属性耐性を偏らせるのだ。

初戦の魔法障壁は火属性に強い赤い色になっていたのも、その影響だ。

報告は大会側のスタッフが尋ねてくるのだが、アシュレイを根っからの剣士とばかり思っている彼ら（クオリが参加届に魔法は使用しないと書いたせい）がアシュレイには見向きもしなかった為、彼がそれについて知る由もない。

続く試合はB+ランカー同士。それも近接職対遠距離職と、初戦と同じ組み合わせであったが、それでも先のアディアン又は別格なのだと思う試合内容だった。

水魔道士アインはひたすら無詠唱を連射していた。その間に最上級魔法の詠唱をしようという魂胆であるが、その無詠唱魔法がごとごとく下級、最下級のものであった為、結局剣士アベルに押し切られる形の結果となった。

そして最後、【狼王】の渾名を持つ拳闘士ロボ対、正体不明のFランカーアシユレイの試合。

観客としてはこれほど一方的になるだろう試合はなかったのだが、意外なことに——ユーゼリアとクオリにとつては期待通りだが——なんと、Fランカーであるはずのアシユレイが予想外の奮闘を見せていた。

「ワオオ——オオン——!!! いいぞいいぞ！　なんだ、弱えと思つたら実は強えじゃねえか！　楽しくなってきた!!」

「うるさい、遠吠えするな」

「がははははは!!　悪いな！　つい嬉しくなっちゃまった！　ワオオ——オオン——!!!」

「だから、うるさいっつの！」

試合開始から随分長い間、互いに動かないと思えば、今度はずつとこの調子である。

これだけを聞くと、2人が並んで談笑しているようなのかな情景が思い浮かぶが、実際そんなことは断じてない。

この応酬の間には絶え間ない金属音が鳴り響いている。

ロボのナックルとアシユレイの剣のぶつかり合う音である。当然ロボはAランカーであるから、その動きも速さも人間離れたものだ。実際、観客の半数はその拳を目で追えていない。流星のように相応しいだろう。

『しかし、真に誉めるべきはアシユレイ選手です』

『どういうことですか?』

『考えてもみてください。ロボ選手は素手にナックル。アシユレイ選手は長剣。さてここで質問だ。リーチが長いのは明らかに長剣。なら試合はアシユレイ選手有利か?』

『え?　…違うんですか?』

『答えは否。むしろロボ選手の方が大いに有利だ』

首を傾げるモナに、カスパーが興奮を抑えきれないというように言った。

『長いものはリーチがある分遠くの敵に届く。ただ遅いのですよ、長

ければ長いほどね。特に、懐に潜り込まれたら圧倒的に不利だ。それに比べてナツクルは素早い連撃で攻めるのが特徴だ。しかもAランカーのそれを、見事に押さえ込んでる。実に見事！ とんでもないルーキーですよ、これは！ 彼は将来大物になるでしょうねえ！』

カエンヌの賞賛に、ほうほうと頷いたモナが『凄いですねえ』と感嘆した。

ひたすら剣と拳の応酬だったのが、変化し始めた。にやにや笑いを引つ込めたロボが、今度は蹴り技まで攻撃に入れ始めたのである。

『これは厄介だ』

『あの速い拳の他にキックにまで気を配らないといけませんね』

『そうですね。なにせ足技は威力が拳の倍以上ですから』

先ほどよりも動きが大きくなり、観客も盛り上がってきた。

ブンッ

「ツらあ!!」

風を切る音と共に視界の外から来た回し蹴りを、半歩身を引いて避ける。ほぼ同時に剣を振り上げるがロボは流石と言わざるをえない跳躍でそれを回避した。

「チッ」

後退した時の追い討ちとして構えていた振り払いの止め、上空に向かって突きを出す。

「当たるか、よっと」

ギンッ

わっと観客が沸いた。ロボはあの状況からもう一回転することで滞空時間を伸ばし、アシュレイの突きを避けたのだ。

「軽業師か、お前は」

舌打ちしつつもやや呆れ顔であるアシュレイの間合いより、拳一つ分空けた地へ着地したロボは、へへっと笑いながら鼻の下を拭った。

アシュレイは溜め息を零しつつ剣を握る右手をぶらぶらと振った。真上に跳んだロボが間合いの外まで後退したのは、彼の剣先をナツクル部分で押し返したからだ。

（「押し返す」なんて、生易しいものじゃないな）

勢いよく突き出した剣にタイミングを合わせて拳を出された。剣が割れるかと思っただのは、嘘ではない。

ぽんぽんと剣の腹を手のひらで叩き、状態を確認。ロボも肩をバキバキ鳴らし、気合いを入れ直した。

「つたく、このあとまだまだ試合があるのに…」

「悪いな！ 安心しろ、俺がお前の代わりに優勝してやるからよ！」

「それはそれは——」

キラリとアシュレイの黒の眸が光った。

「——大層な自信なことぞ！」

「ッ!」

赤い血が空に舞う。

ロボの細い目が見開かれた。アシュレイが一瞬で近づきロボの両腕に浅くない傷をつけたのだ。

(危ねえ…)

獣人の第六感で咄嗟に腕を犠牲にしたが、もし間に合わなかったら、

(俺の首が飛んでいた)

ロボの前に立ち挑発的な笑みを浮かべているアシュレイを見やる。一見隙だらけのように見えるが、見る者が見れば、そんな隙など欠片も無いことが分かる。試合開始直後もそうだった。どこから攻めれば落とせるのか皆目見当もつかない。しばらく動きがなかったのはその為だ。

ダラダラと滴る血を長い舌で舐めると、ロボはニヤリと笑った。くじを引いたあと、アシュレイに向けたあの好戦的な、野性的な笑みだ。  
「……楽しめそうだぜ」

わあああああつ

会場が再び沸いた。アシュレイがロボに一撃を見舞ったのだ。血が染みた砂が赤黒く変色する。

『なんと！ フランカーアシュレイ選手が、Aランカー【狼王】ロボ選手に深手を負わせました!』

『結構な出血量です。拳闘士特有の軽装が裏目に出ましたね…』



『これは降参してもおかしくありませんよ!!?』

まさかの展開に、モナが身を乗り出して絶叫した。

だが、ロボは降参する気などさらさらないようだった。自らの血をベロリと舐めると、暫しその味を堪能してから言った。

「……楽しむそうだけ」

『お——つと!? この言葉はつまり、降参はしないということでしょうか!?』

「つたりめえだ。誰がこんな面白い戦いを止めるかよ。これっぽっちの傷で！」

叫ぶやいなや、再び地を蹴り負傷しているとは思えないスピードでアシユレイに肉迫した。

「うらうらうらうらうらア！」

全身全霊で解き放たれる、岩をも砕く威力をもつナツクルを、アシユレイは避けに避けた。

首をひねり、腕を曲げ、その場で横に一回転。先のリーメイとの戦いのようにバク転して回避すると同時にサマーソルトでロボの顎を砕きにかかる。

「チィッ！ ちょこまかと!!」

ロボが苛立ちを露わにするが、対するアシユレイは涼しい顔である。サマーソルトがかわされても、眉一つ動かさない。

「ほら、どうした？ 動きが鈍くなってきてるぞ」

明らかに挑発と分かる言葉が彼の口から漏れた。

「うるせエ!!」

回し蹴り。だが、それはアシユレイに当てようとしたものでは無く、彼と距離を空けようとして繰り出した代物だった。

「ハッ…ハッ…ハッ…」

鋭い光を浮かべる目はこちらを油断なく睨みつけているが、その身は明らかに疲労している。ロボが膝を付くのは時間の問題に見えた。

(……………までか)

気を緩め、アシユレイが最後の一撃を振りかぶったとき。

「ッ!!」

観客は何が起きたか分からなかった。モナもきよとんとしたままフィールドを見下ろしている。

端から見れば、アシュレイが剣を振りかぶった直後、突然彼が後ろに吹き飛んだように見えるだろう。間違いではなかった。

ズザザザザ!

「アツシユ!!」

血相を変えてユーゼリアが叫ぶ。観客もどうしたのかとざわつき始めた。

砂埃を纏ったアシュレイは、フィールドギリギリで踏みとどまった。長剣を地面に刺し、勢いを殺したようだ。

「チツ……」

舌打ちすると、ペツと血を吐いた。大した量ではないから、口内を切ったのだろう。

(俺としたことが……油断したな)

『こ、これは野獣化! 獣人族の奥の手です!! とうとう【狼王】が本気になりましたああ!!』

モナが絶叫する。カエンヌが冷静な声で説明した。

『本能に身を任せることで体の無意識のリミッターを外す、獣人だけがもつ特有の業『野獣化』は、正に狂戦士バーサーカーといえる荒々しきです』

獣人の戦士は皆近接戦闘の達人だが、中でも狼人ワウルフは強い。強靱な筋肉はあらゆる武器の威力を底上げし、またそれだけで堅い鎧となつて身を守る。それだけならず鼻も利くし、爪も牙も一級品だ。それが野獣化すると、筋肉が限界を超えて稼働し、更なる瞬発力と怪力を生み出すのだ。欠点といえば、本人の意識が朦朧としており、ただ自分以外の全て——味方すらも区別がつかない——を破壊するか、体力が尽きて倒れるまで暴れまわることと、翌日激しい筋肉痛に起き上がれなくなる。ひどい時には死に至ることもある両刃の剣であるが、

「ウフフフ——オオンン——!!!」

『…非常に、強力です。ここからは小さなミス一つで結果が分かれることもあるでしょう。集中して挑みたいですね』

先ほどとは比べ物にならない殺気、威嚇を秘めた遠吠えが会場に響

き渡る。砂埃が落ち着くと、中から姿を現したのは、両手両足を地につけた四つ足の獣。

「ガールルルルル……」

目はギラギラと光り、あとからあとから零れる涎は、目の前の獲物を餌としか見ていないのを雄弁に語っている。

姿形は何時もと同じなのに、纏う雰囲気は明らかに「狂気」だった。

『野獣化した獣人は、個人にも寄りませんが、およそ現在のランク＋1の力とみていいでしょう。現在【狼王】はAランカー。つまり、2ランク上げると理論上Sランカーと同じ力と言えます。あくまで、「力」ですが……』

意味深に締めくくったカスパーの説明を、だが誰も気にとめない。観客は皆、食い入るように舞台を見つめていた。

2人は動かない。アシュレイは注意深くロボの一挙手一投足を見逃すまいと見つめ、ロボはアシュレイのどこが美味いか狙いを定めていた。

ゴクリ……

誰かが唾を嚥下する音が聞こえる。心臓の鼓動すらうるさいと感じる。

ふっと、アシュレイが吐息した。

「グワアアアアッ!!」

直後、ロボが宙に躍り出た。さっきまでとは比べ物にならない速さだ。その牙は真っ直ぐに、アシュレイの喉元へ。

「クッ」

アシュレイの口から声が、声とも呼べない音がでた。余りの速さに避けることもできないのか。これから来るだろう痛みに耐える声なのか。

——否。

アシュレイの唇は、弧を描いていた。

\*\*\*\*\*

今度こそアシユレイは一卷の終わりだと、誰もが思った。彼が高位の魔道士ならあるいは、と思っても、もう遅い。彼は魔法の使えない剣士なのだ。

獣人は近接戦闘では滅法強いものの、総じて魔法に弱いという弱点を持っている。彼らと戦い勝つには、魔法が使えないと話にならない。むしろ、Aランクの獣人相手によく剣技だけでここまで保つたと誉めるべきである。

痛い思いをする前に、早く降参をすればいい――

ところが、アシユレイの両手はだらんとぶら下がったまま。そこでようやく観客も気づいた。

アシユレイの口角が、吊り上がっている。

「…気でも狂ったか？」

誰かがつぶやいた声は、静かな場内に響く。それに反する声が、また響いた。落ち着いた女性らしい美しい声は、濃茶のローブをすっぽりと被っている人物の声だった。隣には長い銀髪の少女が、手を組んでじつと舞台を見つめている。

「……いいえ、違います。アツシユさんは、勝つつもりです。いえ、勝てます。勝ちます、彼なら」

絶対絶命の選手の勝利を確信している女性の声に、近くにいた観客は顔を見合わせた。

「勝って、また飄々と笑いながら帰ってくるんでしょっ？」

女性――クオリはそっと呟いた。その声を聞き取った者はいない。

\*\*\*\*\*

向かってくるロボの牙。野獣化した今、彼の武器は両手両足に加

え、牙と爪も脅威になっていた。

「……ッ」

ロボが地を蹴ると同時に横に飛んだ。

(場外に出て失格、とは流石にいかないか)

手足の爪がアシユレイの長剣の役目を果たし、地面には5本線の傷跡が4つできたのみだ。

避けても避けても弾んだボールのようにポンポンついてくるロボに、また内心ため息をつく。

(最近ため息ばかりついてるなあ。……幸せが逃げてるかな……)

彼の心中を読める者がいれば、「なんて呑気な」と唾然とするだろう。

アシユレイは無表情を崩すことなく、ロボの猛攻を防いでいた。流石の彼も全てをよけるのはきついのか、最初よりも剣で受け流す回数が増えている。

「頑張れー!!」

観客席の誰かが叫んだ。子どもの声だ。それに続いて複数の子どもの声援が、皆固唾を飲んで見下ろしている会場に広がった。

頑張れー!!

ナヴユラーー!!

Aランカーをぶつ倒せー!!

「ふっ」

ガギンツ

剣と牙が真つ向から鏝迫り合いになった。

「こんな俺が、子どもに応援されるなんて、な！」

ギギ…ギ…ザンツ!

ワアアアアアア!!!

『なんと!! 獣人との力勝負に、アシユレイ選手が勝ちました!! 信じられません! なんとという馬鹿力! あの細腕のどこにあんな力が隠されているのか!』

ドンツ!

雑払った勢いをそのままに左足を軸に一回転。渾身の回し蹴りを

力負けしてのけぞったロボに叩きつける。位置は胸元。

ボキボキツ

キャンツツ!!

確かな手応えと共に、ロボが凄まじい勢いでふっ飛んだ。1回、2回と地面を跳ね、何とか舞台のギリギリで止まる。悪運の強い男だ。追い討ちはしなかった。流石に疲れたか、息を乱したアシュレイは剣を肩に担ぐと、

「よう…目は覚めたか？」

「う…ぐ…げほっ」

うつ伏せで上体を起こし、ガハツと血を吐いたロボからは、先ほどの狂気が鳴りを潜めていた。体が限界だったのだ。

ぜえぜえと荒い息を吐いては、口元の血を拭う。舞台の数メートルの端にいるのを自覚すると、ハツと笑った。

「てめえ…化け物か」

「さっきまで化け物も逃げ出すような形相だった奴に、言われたくはないな」

「へっ…違えねえ」

大の字に寝転がり、1つ大きな深呼吸すると、すらりと立ち上がった。肩を回してバキバキと鳴らすと、またあの好戦的な笑みを浮かべる。今回は、獲物を見る目ではない。好敵手と認めた相手を見る、眼だ。

「待っててくれてありがとよ」

「問題ない。次で決めるぞ」

アシュレイも剣を再び鞘に戻し、軽く手首を振ると、柄を握り直した。腰を落とし半身を引いて、いつでも飛び出せる準備をする。

「オレの獣化を力業で解いた奴ア、お前で4人目だ。誇れよ、お前は強え」

「それは光栄だな。因みにその3人は？」

「ハッ！ 最初にお袋、次に嫁、最後は——」

ダンッ!!

ふたりの足元が爆発した。

煙が収まると、人影が2つ、互いに背を向き合っている。ひとつは拳を前に突き出し、ひとつは剣を振り切っていた。

…  
チン

剣を鞘に収めた音がした。

「なかなか血肉沸き踊るいい試合だったよ。——【狼王】」

バタリとロボが倒れる。既に意識はない。即座に医療魔道士がぞろぞろ舞台上上ってきた。

アシユレイも自力で歩いてだが医務室へ向かった。彼も無傷ではない、どころか、傷だらけだ。安物のコートはAランカーとのぶつかり合いで既にボロボロだった。

『この試合、誰が予想したでしょうか!! 勝者はフランカー剣士、アシユレイ!! ナヴユラアアアアアアアアアア!!』

ワアアアアアアアアアア!!!

前代未聞、新進のフランカー冒険者が決勝進出を果たした。

## 24話 「ぬくもりの消える路」

「えー、ごほん。それでは、アツシユの準決勝進出を祝って！ 乾杯！」

Cheers!

グラスの当たる涼やかな音と共に、一行の笑顔がはじけた。

「それにしても、大した怪我が無くて良かったわ。ま、アツシユのことだし、どうせ心配するだけ無駄な労力だったかしら」

「ふふ。ロボさんが獣化した時に血相変えて叫んでいたの、誰でしたっけ？」

「ちよ、クオリ!! わ、私は明日の準決に支障を来したら大変だから、それがちよつと気になっただけで、だから、私は——！」

「はいはい。そういうことにおきましようか」

「クオリい〜！」

いつになく情けない声で叫ぶユーゼリア。その頬が赤いのは、果たして手に持っている蜂蜜酒ハニージェールの力だけか、否か。

甘味の強い酒をちびちび口に入れていた銀髪の少女は、今日一番の功労者と目が合わないよう音を立ててグラスを置くや、その白い腕をすつとあげてボーイを呼んだ。

「ハニージェールをジョッキでもう一杯、あとアボカドとツナのチーズ焼きと、イカとネギのバター醤油炒めと、手羽先のピリ辛照り焼きー」  
「……そんなに食えるのか」

「いーの！ 余ったら手伝ってもらおうから！」

グイツと残りの酒を飲み干して、だんだん据わってきた目でアシュレイをにらむ。

誰に、なんて尋ねても詮無きことだろう。言わずもがな、この場合手伝って「あげる」人物は、彼の他にない。

追加オーダーを出した時点ですでに6人掛けテーブル一杯に乗っている料理を見下ろして、アシュレイは恨めし気にクオリを見た。日頃の優雅さをどこへ追いやったとばかりにガツガツとかきこむユーゼリアへ、「沢山食べますねえ、お金は大丈夫ですか？」などと呑気に



聞いている。白々しい。

「そういえばアッシュュさん、腕は治りましたか？」

「…ああ、もう完璧。他の傷も完全に塞がってるし、流石に一流の魔道士を置いているものだな」

【狼王】の名を戴く<sup>いた</sup>Aランカー、ロボ・グレイハーゲンとの戦いで負った一番の重傷が右腕に走った10cmほどの裂傷だったのだが、試合から4時間経った今ではすっかり治ってしまった。身体中についた細かい傷も完治している。

「ふふー、お医者さまびつくりしてたわよねえ。『おおかみおう』とたたかってこれだけの傷ですんだなんて!』って!」

だいぶ酔いが回ってきたユーゼリアが、その鈴の鳴るような声を精一杯低くして真似をする。全然似てはいないが、クオリが便乗しておだてたのが功を奏したというべきか、どんどん饒舌になっていった。

今彼らが席についているのと同じようなテーブルが20個近く、加えてカウンター席まで客で一杯になった料理店では、ひっきりなしに笑い声、怒鳴り声、ガラスの鳴る音や、酔っぱらいの歌であふれる。この時期の話題は武闘大会一色だ。今日の試合の誰それがどうだったかの、賭けの結果はどう出るに違い無いのだ。

常人より耳の良いアッシュレイもはじめはこの喧騒に耳が潰れるかと思っただが、慣れてしまえばまあ我慢できないことも無い。

「あしたとあさってはチーム戦をかんせんして、そうしたらもう次かあー! 早いわねえ〜……うふふふふ!」

「あら、リアさん、なんだか嬉しそうですねえ。どうかしましたか?」

「だあって、3日後にはもう準備っしようでしょう? そうしたら次の日にはもうけっしようなんだからあ! うふふふふ、そうしたら1000万リールと……」

「299万……うふふふふ〜!」

「うふふふふふふ……」

捕らぬ狸のなんとやら、と最早呆れを交えつつアッシュレイが2人の不気味な笑いを聞き流していると、不意に耳に心地よいテノールが響

いた。

「楽しそうなお話をしているね、お嬢さん方。僕も混ぜてくれませんか?」

「だあれ? あなた」

とろんと濡れた眼で銀の少女が問いかけるのは、どこかで見たような金髪的美青年。珍しくもその特徴的な長いエルフの耳を隠そうとせず、碧色の瞳は甘く弧を描いている。自分の美貌を知り尽くした上で浮かべたその微笑はあらゆる女性を虜にしようとする。

「申し遅れてすまない。僕はフラウ・クレイオ・エウテルペ。貴女の楽しそうな笑い声につられて声をかけてしまったのです。お名前をいただけませんか、美しい人」

流石エルフとしか言いようのない美貌でそのような歯の浮くセリフを言われれば、どんな女性だって悪い気はしない。普段そういった言葉は歯牙にもかけないユーゼリアも、酒の力もあってか「あらやだー」と瞳を輝かせていた。

「彼女に何か用でもあるのか」

「お前には言っていない。僕がお話してるのはこのお嬢さんだ。黙っていたまえ」

なんとなく気に入らないアシユレイが割って入ると、同じ人物から発せられた声とは思えないほど冷たい声が青年——フラウから発せられる。

あまりの言い草にカチンと来たアシユレイが拳をプルプルさせつつ耐えているのを尻目に、再びフラウが同じ質問を繰り返す。素面なら兎も角、酒気を帯びたユーゼリアはそんな水面下どころか水面上にも表れた攻防には全く気付かず、ほわほわとした心地のままにっこり答えた。

「ユーゼリアよ」

「凜とした響き、清廉な貴女に相応しい名だ。どうぞお見知り置きを、レディ」

「ねえアツシユキいた? “せいれん” だってー!」

「……良かったな」

「うんー！ えへへ」

頬に照り焼きのタレをつけたまま嬉しそうに笑うユーゼリア。いつもは大人びて見せている彼女の、珍しく年相応な反応に、アシユレイはむかつく青年のことも全てどうでもよくなってきた。彼女が楽しいなら、まあ、いいか。

「なんかお腹いっぱいになっちゃったー…。アツシユ、ごめーん…。」  
だから案の定、頼んだ料理の半分を手伝う破目になっても、やれやれと溜息をつきつつ、この穏やかな日常に静かに笑みをうかべるのだ。

「…………フラ、ウ…？」

今まで黙っていたクオリが、絞り出すように青年の名を呼んだ。その目は信じられないものを目にするかのように見開かれている。

そういえば、とアシユレイも手羽先を噛み千切りながら頭の片隅で思い出す。このナンパ小僧（意図せずとも1000歳を超えてしまった彼にとっては、相手がエルフだろうと『小僧』同然である）は、ユーゼリアにはちよつかいを出してきた癖に、彼女と同じかそれ以上に目立つであろう同族のクオリには一言も話しかけなかったな、と。

「うん、そうだよ。久しぶり。50年ぶりかな？ …クオリ」

ふわりと浮かんだその笑みは、今までユーゼリアに向けたものとも、武闘大会で浮かべていた笑顔とも異なる、優しく自然なもので。

「フラウ…!! 会いたかった…!!」

クオリの固まっていた黄金色の瞳から、大粒の涙がこぼれた。

\*\*\*\*\*

結局ハニーエール2杯半で酔い潰れたユーゼリアの代わりに、フラウがすべての代金を支払い、実に胡散臭い笑顔でアシユレイとユーゼリアを追い払った。曰く、50年ぶりに再会した幼馴染と積もる話があるらしい。

『半世紀も会えなかった旧友とやっと巡り合えたこの歓び、人間風情には分らないだろうけどね』

なぜか込められた敵意の言い回しにアシュレイとて癪に障らないでもないが、ここでいちいち腹を立てていても大人気ないと、おとなしく先に宿へ帰ることにした。妙に「旧友」を強調するようなアクセントに、内心首を傾けつつ。

『クオリが今晚帰らなくても、心配することはないよ。まさかとは思うけど、僕の宿ホテルに迎えに来るなんて無粋な真似、止めてよね。焦らななくてもちゃんと2日後に捻りつぶしてやるから、おとなしく待ってなよ』

四肢を投げ出して爆睡しているユーゼリアを背負った時耳打ちされた言葉を思い出し、やはりあの小僧、試合で会ったら叩きのめしてくれると心に誓った。

どうもあの子憎らしい言葉の数々が、いちいち彼の旧知の人物に似ているのがイラつく。

「んう……」

微醺を帯びた頬に、ひんやりとした夜風が心地よい。

アシュレイは背中にすり寄り少女をおろし、上着をそっと背中にかける。完全に力が抜けている人間は、まだ少女の域を出ないユーゼリアであってもそれなりに荷重を感じるが、彼はものともせずひよいと抱き上げた。

(……荷重、なんて考えたらまた引っ叩かれるかな)

以前、クオリと2度目に会った町で理由わけあって2人を抱えた時、そんな話をしたらユーゼリアにこっぴどく叱られた記憶がよみがえった。ひとり笑みを漏らし、またゆっくり宿への道を歩き出す。少女の波打つ銀髪が、歩むたびふわふわと腕に当たった。

「……」

ふと、アシュレイの足のリズムが崩れた。後ろを振り返り、静かに一点を見つめる。

バサバサッ

カラスが飛び立った。闇に紛れる羽音を目で追いかけて——踵を返

す。

あくびを隠そうともせず迎えた宿の女将から、女性陣の部屋の鍵を渡してもらおう。背中の子ーゼリアを見た彼女は「あらま！」と口に手を当ててから、少し非難の籠った目でアシユレイを見た。……気のせいとかどこか瞳に輝きが見える気がするの、彼の見間違いだらう。

「ダメじゃないか、女の子をこんなべろんべろんに酔わせちゃあ！」

お兄さん部屋で一体何するつもりだったんだい？」

「……は？」

「けしからん、ウチは壁が薄いんだ。そういうコトは他の宿を当たつて——」

「あああいや女将！ あのですね、俺はただこの子を寝かせに行かせるだけですから！ 普通に！」

一体何考えてんだこの女ひとは！

頭の中で叫びながら、ひきつった笑みと共に彼女の追隨を振り切る。

だから疲れるのだ、あの女将との会話は。すでに会話と呼べるのかも危ういが、兎に角彼女のいじりは性質が悪い。それほど喋る性質タチでもないアシユレイにとって、彼女と目が合う度繰り出される底の見えない怒涛のトークは、ある意味過酷な試練であった。

「…おや、もう戻ってきたのかい。……つまらん」

最後の方にボソツと聞こえた一言は聞こえないことにしておく。普通の人間なら確かに聞こえない音量であったから、問題ない。

クオリが帰ってきたらまた鍵を渡してやって欲しいと目を合わせないようにしながら一方的に頼み、再び扉を開ける。と、後ろから少し慌てた風にかけられた。その声には純粹に心配が伺える。振り返れば、自分の肩にかけていたストールを手にした女将が居た。

「お兄さん、また外へ行くのかい？ その格好じゃ寒いだらう。何か掛けるものでも……」

「大丈夫ですよ。すぐ戻りますし、そんなにヤワじゃないんでね。寧ろ貴女の方が夜通し玄関口にいるんですから、温かくしててください。それでは」

まだ少し不満そうな彼女に会釈を残し、外へ出る。向かうのは、街の喧騒とは反対方面。宿や料理店の立ち並ぶ表通りから住宅街へつながる小路を一本抜ければ、そこは夜らしい静寂と闇が広がっていた。

そのことに知らずほつと息をついて、確かな足取りで路地を進みはじめた。迷いなく正面を向き、右へ、左へ、また左へ、そして右へ。時間になると10分も経っていないだろう。薄暗い路地を抜け出した先は、大きな月が浮かんでいた。

「……お前か。散々俺を追い掛け回してくれたのは」

ぽつりと落とした言葉に、答える声は無い。溜息をついたアシュレイは、もう少し大きい声で姿無き者へと語りかける。

「おい、さっさと出てこないか。そこにいるんだらう、何を隠れている？ ……それとも、俺に用があると思ったのは気のせいだったかな。ただの忍びか？ だったら悪かった。お前を別にどうこうする気は無いから、安心しろ。——ただ、人間に手出しはするな。…早くお前の在るべき場所へ、帰るといい」

それだけ言っただけで街へ足を向けた男を追いかけるように、細い声がその背に届いた。

「……………ぬ……」

「ん？」

「…信じぬ……、…私は…信じぬぞ……!」

振り返れば、大きく丸い月を背に立つ、黒いシルクのナイトドレスを纏った妖艶な美女が立っていた。逆光でもわかる、そのややつり気味の赤い目は、渦巻く魔力と憎悪を乗せてアシュレイを睨み付けていた。

「……ほう、これはこれは。あの化け鳥がこんな美女だったとは、驚いた」

「黙れッ！ 貴様に云われると虫唾が走るッ」

思ったことを述べてみただけなのだが、ここまで小気味良いほどのつれなさだと、むしろ笑いがこみあげてくる。それがますます神経を逆撫でしたようで、瞳の鋭さがまた一段と増した。

(はて、彼女とは初対面だと思うが……。こんなに憎まれている様子とは、さては何処かで会ったことでもあったのかな)

見たところ女はまだ若い。100年も生きてはいないだろう。50年、せいぜい60年といったところか。

「では、今一度尋ねようか——」

魔獣にとつての60年とは、まだまだ青二才もいいところである。特にこの女のような——

「——我が同胞よ、こんな下界の辺境へ、何しに来た？」

——高位の【魔の眷属】にとつては、瞬きをするように十年が過ぎるのだから。

ここ千年間【狭間】の空間にいたはずのアシユレイとは面識が無いはずだが。

訝しがる彼の言葉を聞き流し、頭の天辺からつま先まで嘗めるように見た美女は、鮮血色の紅をのせた厚い唇を、わなわなと震わせた。

「信じるものか……！ 貴様が……貴様のような男が、ノーア様の寵を得ていたなど……!!」

目を見開く。『ノーア』。その言葉だけですべてが繋がった。

ああ、そうか、彼女は。

「……お前は……ノーア様の、遣い魔か……」

千年も昔。彼にとつてはまだほんの少ししか時が経っていないような気もする。

ちゃんと朝食は召し上がっているだろうか。またご友人ルールスルー様とお戯れになつて、新しい渓谷などをお造りになられてはいないだろうか。

世界の絶対者たる魔人が「死ぬ」ことはそうそうあり得ないのは百も承知だが、それでも、あのお方が確かに存在生している、その確たる証拠に、喜びがあふれた。いや、これは喜びか——それとも安心と  
いふべきか。

「そうか……。ノーア様は、御壮健でいらつしやるか？ また子供っぽいわがままなどおつしやつて、そなたを走らせておられるのではな  
いか？ …いや、きつとそうなんだろうな。大方、あの方のことだ、俺

が【狭間】から出たと知って『面白いから連れてこい』とでも命じられたんじゃないか?」

「黙れ!! 貴様如きが…ノア様を知った風な口で云うな!!」  
(なるほど、凶星か)

さて困った。どううやつてこれを断ろうか。

【狭間】から出たばかりの頃ならいざ知らず、あれから数か月が過ぎた今、アシュレイは、この下界のことが大層気に入っていた。

アシュレイやノアが片手を動かすだけで殺せるような、弱き者が暮らす世界。しかし、かれらは身を寄せ合い、互いに助け合うことで、実にたくましくこの過酷な環境を生き抜いてきたのだ。

戦に負け、家族も友も、住む場所も、すべてを奪われたまだ十八の少女が、顔を上げ、前を向き、笑う世界を見た。

父の命と百の同族の命運を引き換えに逃げ延びた、怯え隠れるばかりだったエルフが、自分の足で立ち上がり、勇気をもってフードを脱いだ瞬間の震えを見た。

彼女たちのあの細い身体はあんなに非力であるのに、一体どこからそんな力強さが生まれるのだろう。人並みよりはるかに重い過去を背負いながらも、その生命は揺らぐどころか、さらに輝きを増すのだ。

少女らの歩む世界を、もう少しだけ見て回りたい。願わくは、彼女のそばで。

何者をも拒絶する白で満たされた、虚ろな狭間の牢獄から、この美しく自由な、刹那の煌めきに“生きる”世界へと彼を連れ出した、夜の星のかがやきを見に宿す少女。

「私は、貴様など認めん…認めんからな!!」

アシュレイが思案するうちに一体何の自己完結があったのか、女は激昂して叫ぶや、開いた背から身の丈より大きな黒い翼をあらわした。ふわりふわりと羽が散るその隙間から、女の凍るような視線がアシュレイを射抜く。

「シファア||ナ||ヴユラ。今ノア様に侍ることを許された者の名だ、よく覚えておけ! 貴様などに二度と…二度とノア様の遣い魔を名乗らせてなるものか!!」



叫び終わると、女——シファはみるみるその姿を十メートルはあるうかという大きな三つ足のカラスへ変化させ、月に向かって飛び去った。

「……なるほどな。ヤタガラス、か」

魔の眷属第二世代、ヤタガラス。第二という区分に或る者の、実質的脅威は第一世代に勝るとも劣らない。膨大な魔力に物言わせ、超遠距離からの狙撃を得意とする。手下に一頭いるだけで隣の領地への攻撃も可能という利点は、特に狭い島に住む魔人たちにとっては大きい。

あの小娘の域を出ないシファを遣い魔としたのも、きつとそういう理由からだろう、とアシュレイは推測した。そうでもなくては、ノーアが鳥をそばに置くなんて、説明がつかない。彼女は猫好きなのだから。

（まあ、何はともあれ、今回はあつちから勝手に帰ってくれて助かった）

こんな街の近くでは、実力行使をするにも被害が大きすぎる。

一陣の風が吹いた。やはり何か羽織る物でも持つてくればよかったか、と考えながら、自分の上着のありかを思い出す。そうだ、眠ったユーザーアが袖を妙に固く握りしめていたから、そのままにしていたのだった。

襟を立てて宿への道を急ぐも、女将に大見栄を張った手前、大通りへ戻ってからは敢えて悠然とした歩みで帰ったのだった。結局、部屋へ案内される間に浮かんだ鳥肌を見破られて、「だから言ったのに」と散々小言を言われる羽目になるのは、別の話である。